

主な登場人物等

第一編のあらすじ

1

第二十七章 緑の時間島

3

第二十八章 帰還

19

第二十九章 無言通信

41

第三十章 初対面

61

第三十一章 特別番組

81

第三十二章 宇宙戦艦

113

第三十三章 お医者さんごっこ

143

第三十四章 盗聴

165

第三十五章 誕生日

185

第三十六章 関ヶ原

219

第三十七章 ふたりの身体

239

第三十八章 DNA鑑定

271

第三十九章 ふしぎな民宿

297

第四十章 巨大コンピュータ

319

第四十一章 寝返り

349

第四十二章	第六感	365
第四十三章	ノイズ	391
第四十四章	突破	411
第四十五章	宇宙海賊	433
第四十六章	火炎土器	451
第四十七章	鍵穴星	475
第四十八章	無限後退	497
第四十九章	宇宙の地平線	517
第五十章	ニューロコンピュータ	555
第五十一章	多次元エコー	571

主な登場人物等

瞬示・真美（しゅんじ・まさみ）

偶然な出来事から超能力を持つ。誕生日はもちろん生まれた時間まで同じ双子のような幼馴染み。しかし、偶然ないきさつで超能力を持ったわけではなく、しかも人間ではないことが第三編で解き明かされる。

一太郎・花子

瞬示と真美の友人。ジャストウェブ社で無言通信システムを発明して人間同士の通信に革命をもたらす。システムの中枢である言語処理プログラムはコンピュータやアンドロイドに多大な影響を与える。

小田

ジャストウェブ社の社長。無言通信システムの普及に奔走する。

大僧正

主な登場人物等

一 太郎の友人でジャストウエーブ社の社員でもあるミブの養父で壮大寺の僧侶。ミトたちをかくまう

ホーリー・サーチ・ミリン

ホーリーとサーチは男の軍隊と女の軍隊に別れて戦っていたが結ばれる。ホーリーはフォルダーの古い友人でもある。ミリンはふたりの娘。

キヤミ・カーン

キヤミは女の軍隊の將軍から地球連邦政府の大統領に就任する。カーンは男の軍隊の將軍だったが、男と女が和解したあとはキヤミを支える。

ミト

女の軍隊の司令官だったが、地球連邦軍の司令官となる。

住職・リンメイ

僧侶である住職と医師であり考古学者でもあるリンメイは精神面と科学的見地で、瞬示と真美を支援する。

主な登場人物等

フォルダー

宇宙海賊でブラックシャークの船長。ホーリーの古い友人。

イリ

ブラックシャークの重要な乗務員で有能な医師でもある。

R v 2 6

アンドロイド。宇宙戦艦の艦長。人間に対して献身的に仕える。

時間島

黄色の時間島と緑の時間島の二種類があつて、ともに時空間を自由に移動できる異次元の移動装置。その形は一定していない。

時空間移動装置

永久の世界の人間が開発した直径五メートルほどの球体の小型のタイムマシン。

西暦・永久（えいきゅう）

異なる世界ではあるが、パラレルに存在する世界の年号を示す。一太郎・花子・小田は西暦の世界の人間。一応瞬示と真美も西暦の世界の人間。

「」

通常の会話を表す。

【】

次元通信の会話を表す。

〔 〕

無言通信の会話を表す。

「」

中央コンピュータやアンドロイドの交信を表す。

各章の前段の【時】【空】【人】はそれぞれ次のとおり

【時】 その章の時代・年代を示す。次の【空】とかねて表示する場合がある。

【空】 その章の場所を示す。

【人】 その章の主な登場人物を示す。

第一編のあらすじ

摩周湖で起こったふしぎな事件で瞬示と真美は西暦の世界から永久の世界に移動した。そこは完成第十二コロニーという星で、男と女の軍隊の戦闘にまきこまれるが時間島に包まれて永久の世界の摩周湖から少し離れた海辺の民宿に時空間移動する。

男と女の軍隊が休戦して瞬示と真美の時空間移動の分析を始める。女の軍隊はサーチを、男の軍隊はホーリーをふたりがやって来た摩周湖に派遣した。

瞬示と真美は民宿で生命永遠保持手術という不老不死の手術が開発されたことを知ったあと御陵に移動する。御陵から現れた巨大土偶がふたりの攻撃を受けて消滅してできた穴に吸い込まれて、たどり着いた鍾乳洞の中でふたりは時間がぐらぐらと揺れる時震を体験する。その洞窟は巨大土偶の胎内で体外に出るとそこは西暦の世界の御陵だった。真美は自分の家の前でもうひとりの真美に出会々と突然消える。独りになった瞬示は御陵から摩周湖上空に移動して時間島の中で真美と再会する。そしてふたりの因果が清算されると黄金城に移動する。城主明智光秀が忍者を乗せた大風を時間島に向かわせるがのみこまれる。

民宿に戻った瞬示と真美はケンタと摩周クレーターに向かう。そこでホーリーと再会するが、時間島に誘われるまま京都の寺に時空間移動して黄金城から消えた忍者に出会う。そして月の

生命永遠保持機構の本部でも忍者に遭遇する。一方ふたりを追いかけて古寺にホーリーとサーチが現れると続いて女の追跡隊、さらには男の追跡隊が現れる。瞬示たちは時間島で前線第四コロニーに逃れるが、男と女の軍隊の時空間移動装置がコロニーを包む時空間バリアーに体当たりを繰り返すと、時間島が星ごと地球の近くに時空間移動する。

誰もいない月の生命永遠保持機構でサーチは女が起こしたクーデターの話を披露する。そのあと生命永遠保持機構に残されたデータからリンメイが生体内生命永遠保持手術を開発したと、その手術で生まれた胎児が遮光器土偶に変態したあと巨大土偶に成長して地球の生命永遠保持センターを攻撃して壊滅させたこと、そしてミトの脱出作戦が成功して女たちが地球から完成コロニーに逃れたことが判明する。ホーリーとサーチは生命永遠保持手術の効果を失ったことを自覚する。

瞬示と真美はミトが戦った摩周クレーターで巨大土偶を発見する。その巨大土偶が溶けたあとに時間島が現れる。前線第四コロニーやすべての完成コロニーが時間島によってある宇宙空間に集められる。その完成コロニーでは男の軍隊と女の軍隊の戦闘が繰り広げられていて瞬示と真美が必死に停戦を訴える。前線第四コロニーで停戦会議が開かれるが、すでに各コロニーの男と女は協力して負傷者の治療に当たっていた。

第二十七章

緑の時間島

【時】永久0255年

【空】摩周クレーター

【人】ホーリー サーチ ミト キャミ カーン 住職 リンメイ R v 2 6

人類ははげしい戦争で機能を失った各完成コロニーから超大型時空間移動船で次々と地球に戻ってくる。完成コロニーはすべて前線コロニーに格下げされて、アンドロイドがコロニーの修復に取りかかる。しかし、徹底的に破壊されたコロニーにいたアンドロイドは人間とともに地球の復興にたずさわることになった。

超大型時空間移動船が地球に到着して船底を開口すると、これまで憎みあつて戦いに明け暮れたことがまるでウソのように男女の区別なく若い者や元気な者が老人や負傷者をいたわりながら地球に次々と降り立つ。子供の姿はないが、すべての人間が生命永遠保持手術の効果を失つて手術を受けたときの年令に戻ったため人口構成が自然な状態に戻った。

人間が留守にしていた地球には緑があふれている。戦闘がはげしかったころは火星のような赤い星だったが、人間がいなくなるといつの間にか緑の星に戻った。

人間は再び同じ過ちを犯すのだろうか。今、地球に戻ってきた人間にそこまで考える余裕はない。男と女の戦争で人口を一千万人近くまで減少させてしまった人間には、地球を再び傷つけるだけの影響力はない。いずれにしても地球はすぐれた回復能力を持っている。

宇宙戦艦で地球に戻ってきたホーリーとサーチが手をつないで地面に足をつける。

「人間はこの地球で生き物といっしょに生活すべきなんだわ」

サーチがホーリーにもたれながら地球の空気を胸いっぱい吸いこむ。

「おいしいわ」

ホーリーがそんなサーチの腰に手を回すと地球を踏みしめるようにゆっくりと歩きだす。宇宙戦艦からは様々な物資が降ろされる。その中には時空間移動装置もある。

ミトが数人の兵士とともにカーンとキャミを囲んで時空間移動装置の前で話しあっている。

「やはり確認した方がいいのかしら」

キャミがミトに首を傾げる。カーンも同じようにうなずいてミトを見つめる。

「それでは偵察の準備にかかります」

まわりにいる兵士が時空間移動装置の点検作業に取りかかる。性急なミトにキャミが苦笑いすると視線をミトの後方に向ける。腕を組んだホーリーとサーチがキャミに軽く会釈して通りすぎようとする。カーンもふたりに気が付く。

「あのふたりを連れて行つた方がいいだろう」

カーンがキャミの言いたいことをミトに伝えると、ミトがキャミとカーンの視線をたぐる。
「わかりました」

ミトがカーンの助言に賛成するとふたりに声をかける。

「ホーリー、サーチ！」

手招きするミトにふたりは身を寄せたまま気だるそうな表情でカーンとキャミとミトに近づく。

「くつろいでいるのに悪いけれど、摩周クレーターの偵察に行くミトに付きあってくれないかしら」

言葉はやさしいが、キャミの視線はきびしい。実質的にはいやおうなしの強引な命令だ。

宇宙戦艦の作戦室でミトが摩周クレーター偵察作戦の説明を終える。

「ミトらしくないなあ」

ホーリーは口元をゆるめてはいるが、ミトに向ける視線に少し角度をつける。

「いや、あくまでも偵察だ」

「でも、ミトは摩周クレーターで巨大土偶を全滅させたんでしょ」

サーチもミトを見つめながらホーリーに追従する。

第二十七章 緑の時間島

「もう巨大土偶はいないだろうし……」

ホーリーが腕を組みながら何か言おうとするのを制してミトが言葉を続ける。

「それに我々は何の障害もなく地球に戻れたと、言いたいんだろ？」

ホーリーが視線もゆるめて言葉を変更する。

「それにあのふたりもどこかに行ってしまった」

「そう言えば、瞬示と真美はどこにいるのかしら」

作戦室の誰もが瞬示と真美のことを思い出す。キャミ、カーン、ミト、ホーリー、サーチの心の中に瞬示と真美の姿が浮かびあがるとしばらく沈黙が続く。

「月の生命永遠保持機構の本部も気になるわ」

キャミが沈黙を破る。ミトが続く。

「R v 26の報告によると、今のところ摩周クレーター周辺も生命永遠保持機構の本部を含む月面の施設にも異常はない」

「そうか、そんな報告があるから、ミトは気軽に偵察に行こうと考えたのか」

「いや、刺激のない偵察をするのがベターと考えただけだ」

ホーリーがミトに首を傾げる。

「刺激がない？やはり何かあるのか？あの摩周クレーターに」

ミトが素直にうなづく。

「R v 26を呼んだ方がいいな」

カーンが立ちあがって作戦室にいる兵士を呼びつける。一方キャミはリンメイがこの作戦室に出頭していないことに気が付く。

「どうしたのかしら」

ミトがキャミの疑問に気付くと少し頭を下げる。

「忘れていました。リンメイは住職のカウンセリングを受けていて、出席が少し遅れるそうです」

「カウンセリング？」

サーチがミトに代わって応える。

「私が住職を紹介したのです。リンメイは生体内生命永遠保持手術以来、心身ともに疲れ切っていたので、住職のカウンセリングを受けてみるように勧めたのです」

キャミがサーチの言葉にうなずくとカーンに指示する。

「カーン、リンメイにカウンセリングを切りあげて、ここへ来るように伝えてください」

ミトはカーンをチャットと横目で見ると中断していたホーリーとの会話を再開する。

「R v 26から詳しい報告は受けている。摩周クレーターも月面の施設にもいっさい生体反応はなく、時間島の痕跡こんせきもないらしい」

ホーリーが声のトーンを落としてつぶやく。

「気になることがある。時間島と巨大土偶の関連がよく理解できない」

「摩周クレーターの巨大土偶が溶けて消えたあとに時間島が現れて、その時間島がヒモのようになつて……」

サーチの言葉をホーリーがさえぎる。

「あのとき瞬示と真美にたずねようと思ったけれど、急に前線第四コロニーに戻らなければならなくなつて疑問が立ち消えになつてしまった」

「そうだったわ。私はどうも巨大土偶が時間島のような気がするの」

ホーリーはうなずきながらもサーチに否定的な見解を示す。

「そうかな。時間島は俺たちに悪意に満ちた危害を直接加えることはなかった。巨大土偶は違う。女やその軍隊は徹底的に巨大土偶の攻撃を受けて殺された」

「いいえ、時間島も完成コロニーをせつせと寄せ集めて男と女を殺しあうように仕向けたわ。

ホーリー、あなたが言っていたことよ」

「確かに。しかし、あの巨大土偶が時間島に変身するなんて想像できないな」

「そうね。私も想像できない。巨大土偶は遮光器土偶のように女の象徴ともいえる体型をしている。なのに女を徹底的に攻撃したのはなぜかしら。是非、リンメイの見解を聞きたいわ」

急にミトは巨大土偶の恐ろしいほどの素早い空間移動を思い出す。

——サーチの言うとおり巨大土偶が時間島と同じ能力を持っているのなら、あの素早い空間移

動を合理的に説明することができる

一方、キャミとカーンはホーリーとサーチの会話を黙って聞いている。そのとき、シワだらけの顔に疲労感を漂わせたリンメイが住職といっしょにRv26のあとに続いて作戦室に入ってくる。そしていきなりキャミに発言する。

「生命永遠保持機構の本部で死亡したはずの胎児がいなくなっています」

「それはリンメイが生体内生命永遠保持手術を施した一体目の胎児のことなの？」

キャミはもちろんのことホーリーもサーチも驚いて立ちあがる。ミトが座ったままポツンと言葉をもらす。

「悪い方に予感が当たった」

「消えた？」

サーチの疑問符付きの言葉のあと、ミトが震えるような声をあげる。

「復活した？」

住職がリンメイに椅子いすを勧めてから横に座わると坊主頭をさすりながらホーリーとサーチにうなづく。リンメイが机に両手をつけて身体を支えながら座る。ミトがじつとリンメイの表情を追う。腰かけたリンメイがRv26をチラツと見てから、キャミに視線を固定して弱々しい言葉を続ける。

「Rv26の最新情報によると摩周湖に向かったそうです」

「えー」

驚きの声が作戦室に広がる。

「いつ？」

驚きの声の中からホーリーの質問が抜けたすと即座にR v 2 6 が答える。

「ツイ十三分前ノコトデス」

再び驚きが渦巻くなかリンメイの興奮気味の声がR v 2 6 に追従する。

「探査器で空間移動の痕跡こしせきを調べた結果、明らかに十キログラム程度の物体が月から摩周クレターに向かって空間移動したことを確認しました」

「そんなバカな！」

ホーリーが怒鳴るとサーチが続く。

「生命永遠保持機構の本部にいた胎児は死んでいたわ。そうでしょ？リンメイ」
リンメイがわずかにうなずく。

「アノ胎児二人間ト同ジ『死』トイウ定義ハアテハマリマセン」

R v 2 6 の言葉にミトが天井を仰ぐ。八体の遮光器土偶と戦うはずだったのに七体しかいなかったことに一応納得していたミトがキャミとともに両手を震わせる。

「まだ一体いる。今、攻撃されたらひとたまりもない。もう戦うだけの武器はない」

ミトとキャミもそしてリンメイも巨大土偶の恐ろしさを想像して青くなる。ホーリーはそん

な心配をよそに気軽に言う。

「宇宙戦艦があるじゃないか」

「無理だ。宇宙戦艦では巨大土偶の動きに追従できない」

ミトが冷静に否定し、ホーリーから視線を全員に向けると改めて提案する。

「本格的な偵察が必要です。まだ巨大土偶に成長していないはずです」

「俺とサーチは偵察に参加する」

サーチの了解なしにホーリーが立ちあがってミトに伝えると、サーチも立ちあがってホーリーの背中にピッタリと身を寄せる。初めの態度と一八〇度転換したホーリーを見てミトが苦笑する。リンメイもよろめきながら立ちあがるとミトとキャミを見つめる。言葉を出したのはリンメイの横に座っていた住職だ。

「わしも行く」

住職が立ちあがってリンメイの肩に手を置く。キャミが目を閉じたまま大きくうなずくとゆつくりと目を開けてミトに同意の眼差しまなざしを送ってから住職にほほえむ。

「リンメイは専門家だから同行していただくとして、住職はここに留まって私たちに力を貸してください」

「いや」

住職がポツと顔を赤らめると、頭をポンポンと二回たたいてからリンメイを見つめる。

「僧侶の身でありながら……」

住職からいつもの軽妙な口調が消えて年柄もなく、はにかむような態度を見せる。

「リンメイに恋をしてしまうたのじゃ。はっはっは」

住職は大きな声で照れ笑いしてからそのままうつむく。リンメイも顔を真っ赤にしてうつむく。ほかの者はそんな住職とリンメイをポカンとして見つめる。

「住職はリンメイにどんなカウンセリングをしたんだ？」

ホーリーのささやき声にサーチが首を横に振って中途半端な苦笑いをする。

「ソレデハ偵察作戦ノ準備ニカカリマス」

R v 26 の声だけが響くように残り、その大きな身体が作戦室から消える。R v 26 は命令を受けなくても何をすべきかを自覚していた。

摩周クレーターの上空に銀色の宇宙戦艦と時空間移動装置十基がこつ然と現れる。時空間移動装置にはミト、ホーリー、サーチ、リンメイ、住職と四十人ほどの兵士が分乗している。すべての時空間移動装置には、かき集められた中古の拡散バズーカレーザー砲が一丁ずつ積み込まれている。

宇宙戦艦の艦長 R v 26 からすぐさま情報が送られてくる。

「胎児、イエ土偶ガ空間座標 p 1 4 7 q 2 5 6 ニイマス。森ノ中デス」

狭い時空間移動装置の中でホーリーとサーチが緊張して顔を見合す。モニターにその場所が映しだされる。摩周クレーターの真ん中の島のある岩の上に体長数十センチの遮光器土偶が空を見上げている。

「土偶のそばに何かいるわ」

サーチの声がそのままミトの時空間移動装置に伝わる。ミトを押しつけてリンメイが焦点を合わすように目を細めてモニターを見つめる。

「あれは……」

リンメイが何か重要なものを発見したような声をあげる。ミトと住職がリンメイの肩ごしにモニターを見つめる。

「鳥のような感じがする。これ以上ズームアップできないのか」

ミトが兵士の肩をたたく。

「鳥ではありません。あれは……」

リンメイが興奮する。

「あれは鳥の形をした埴輪はにわです」

誰も声をあげることができないなか、住職が目をこすりながら叫ぶ。

「じゃが、羽ばたいておるぞ！」

「土偶が時空間移動するぐらいだから、埴輪はにわの鳥が羽ばたいて空を飛んでもふしぎじゃない

わ

リンメイの言葉にうなずくとミトがモニターに釘付けになる。

「あつ、本当に飛んだ！」

ミトの言葉に呼応するかのように埴輪^{はにわ}の鳥が大空に向かって飛びたつ。ぎこちなく羽を上下に動かしてはいるが、普通の鳥のように羽ばたいて飛んでいるのではない。

「反重力装置ヲ内蔵シテイルヨウデス。シカモ計測デキナイ巨大ナエネルギー。回避シテクダサイ」

R v 2 6 の大きな声が時空間移動装置内のスピーカーから流れる。

「回避！上昇しろ」

ミトの命令を受けてすべての時空間移動装置が回転を開始する。モニターから画像が消えてグレーの画面になるとスピーカーのノイズ音がうるさく耳につく。

埴輪^{はにわ}の鳥が時空間移動装置に近づいてくる。そしてその目から緑の光線が十基の時空間移動装置に目掛けて次々と発射される。同時に時空間移動装置の回転が急に落ちる。

「高度を維持しろ。このままでは墜落するぞ」

「コントロールできません」

十基の時空間移動装置の回転が完全に停止するが、落下することなく空中に浮かんでいる。ノイズが消えてモニターに映像が戻る。埴輪^{はにわ}の鳥が土偶の前に着地するとくちばしを空に向け

第二十七章 緑の時間島

て「チーチー」と鳴きはじめる。

「被害は？」

ミトがすべての時空間移動装置に確認を入れる。

「ありません」

次々に報告が入るが、途中で割りこむようにR v 26の音声スピーカーから流れる。

「時間ガ、ロックサレマシタ。宇宙戦艦ト時空間移動装置ノ時間ノ流れガアト数分モシナイ内ニ分離サレマス」

ミトが目目の前のマイクを乱暴に取りあげて叫ぶ。

「詳しく報告しろ！」

土偶が首をひねって顔を埴輪はにわの鳥に向ける。埴輪はにわの鳥も鳴くのをやめて小首を傾げて土偶の

丸い目を見つめる。

「現象ヲ伝エルコトシカデキマセン。時間ノ分離ガ始マリマシタ」

埴輪はにわの鳥の目から緑の光線が放たれて土偶の目に吸いこまれる。一瞬にして土偶が緑色に輝

くと、緑一色の世界が土偶を中心に急速に広がる。

宇宙戦艦ではR v 26が操縦士を乱暴に押しつけて操縦席に座りこむ。

「全速前進！面舵おもかじ一杯！アノ緑かたまりノ塊ノ中心へ突入スル！」

R v 26が大声をあげて、目の前のモニターに時間ゼロ地点と表示された場所に向かって宇

第二十七章 緑の時間島

宙戦艦を突入させようと必死に操縦桿そうじゅうかんを小刻みに動かす。

時空間移動装置からは土偶の姿がまったく見えない。緑色の水の中にいるようにモニターが緑一色に染まる。

「時間島だわ！」

サーチが叫ぶ。サーチの直感は鋭い。

「時間島は黄色じゃなかったのか」

ホーリーがサーチの腕をつかむ。ミトの命令がスピーカーから聞こえてくる。

「全員、戦闘ヘルメットを着用しろ！」

時空間移動装置が直径数十メートル近くまで膨張した緑の時間島に次々と吸いこまれる。しかし、小さな緑の時間島が宇宙戦艦を吸いこむことはない。宇宙戦艦が機敏に時間島に突進する。そして艦首を突っこんだまま動かなくなる。宇宙戦艦の時空間エンジンがもがくようにフル稼働を続ける。そのとき緑の時間島に変化が現れる。収縮しはじめたのだ。艦首が時間島に締めつけられてまったく動けなくなる。時空間エンジンのフル稼働が続く。

ついに摩周クレーター上空に耳をつんざくような大音響がとどろく。土偶と埴輪はにわの鳥はもちらんのこと時間島も宇宙戦艦も消滅する。

第二十七章 緑の時間島

第二十八章
帰還

【時】西暦2048年11月11日（西暦の世界へ）

【空】御陵 北海道（民宿）

【人】瞬示 真美 一太郎 花子

緑の時間島の中で瞬示と真美が雄大な宇宙を気持ちよさそうにながめる。子供のころ、両親に連れられて郊外の緑豊かな池のほとりでキャンプファイアをしたときに見た夜空を思い出す。教科書で見た記憶がある渦巻状の銀河に超高速で向かう。それは天の川という銀河だ。

ふたりはそれまでと違ってゆっくりとしたスピードで移動しているが、それでも驚くべき速度だ。やがて小さな黒い星のすぐそばを通りすぎる。その星の表面には無数の黒い角砂糖のようなものが浮かんでいた。自分たちがまっすぐに移動していないことに気が付く。ゆく手のはるか彼方にかすかに輝く点が見える。

しばらくして、寄りそうふたつの星のそばを通りすぎる。暗くて色は感じられない。一方は大きく片方はその半分ぐらいの星だ。ふたりにはどこに向かって進んでいるのか見当もつかない。しかし、興奮するわけでもなく、不安にさいなまされるということもない。

今度は先ほどの星よりかなり大きな星のそばを通過する。そのときふたりははるか遠くで弱々しく輝く星を発見する。

さらに時間が経過する。今度は青緑色の星のそばを通過する。まだまだ遠いが輝きを増す星は太陽のような恒星なのだろうか。

次の星が見えてくる。見覚えのある美しいリングを持った星、土星だ！土星に違いない。そうすると正面で輝く星は太陽だ。

理科の授業をまじめに受けておくべきだったと瞬示が苦笑する。真美は土星の美しいリングをうっとりとながめる。ふたりは冥王星めいおうせいとその冥王星に寄りそう大きな衛星、そして海王星、天王星と続いて今土星の近くにいます。それぞれの惑星についての知識はないし、その順番でさえ怪しげな記憶しかない。いや、四つではなかった。五つの惑星とすれ違っている。最初の星は？名前が浮かばない。惑星がもし九個あるとするなら第十番惑星とでもいう未知の惑星なのか？

そんなことはふたりにとってどうでもいいことで、自分たちが太陽系の中を移動していることが重要なのだ。しばらくすると今までのどの星よりはるかに巨大な木星が見えてくる。ふたりは木星とすれ違う時間を長く感じる。そして目玉のような斑点はんてんがある木星にしっかりと見つめられているような気分になる。

次は赤い火星のはずだ。しかし、すぐには到達しない。ゴミのように大小様々な岩石のよう

なものが無数に現れる。小惑星群だ。まもなく火星が現れるはずだ。

ふたりは少し不安を覚える。今までと同じように火星のそばを通過するのだろうか、その次の地球もそのそばを通過して金星、水星と向かうのか？そしてその後は？

赤い火星が現れる。やはり、そのそばを通過する。今はまぶしい太陽がふたりの不安をかきたてる。果たして次は地球なのか。ここが太陽系だと確信しているものの、偶然火星や木星や土星に似た星にめぐりあっただけなのかもしれない。

遠くにフーツと青い点が現れる。やがてはつきりと青と白が混ざりあった鮮やかな惑星を確認する。

ふたりは円球の真ん中から近づいていく。すれ違うような角度ではなく確実にその円球に向かっていく。そばには衛星が見える。月だ！まぎれもなくこの惑星は地球だ！月のすぐそばを通過する。地球が見る見るうちに大きくなり全体から部分へと姿を変えていく。このままでは地球にぶつかってしまう！どんどん吸いよせられる。しかし、落下スピードはどんどん遅くなる。

やがて日本列島が姿を現す。瀬戸内海が、淡路島が、関西国際空港が見えてくる。ふたりはいつの間にか時間島から抜けだしてまばゆいピンク色の輝きを発しながら地上を目指して落ちていく。やがてうつそうとした木々におおわれた御陵上空に達する。

【御陵だ！】

ふたりは御陵を通りすぎて自分たちの家の方へ向かう。踏切はなく高架の駅には電車が止まっている。ふたりが見慣れていた黄色とオレンジのツートンカラーの電車ではなく銀色に輝く八両編成の電車だ。ふたりの身体は自分たちの家の上で高度を下げるが、通過してその先の小学校の校庭の砂場に着地する。

ふたりはたった今、光とともに地球に帰還した。

「帰って来たんだ」

瞬示が叫ぶ。校舎は建て替えられて記憶とまったく違うが、ここは確かにふたりが六年間通った小学校だ。校門から二、三分ぐらい歩いたところにふたりの家があるはずだ。

【あれは？】

小学校からは御陵の頂上付近しか見えないが時間島に包みこまれて緑色に輝いている。大きな地響きとともに地面が揺れだす。ふたりは御陵の真上に瞬間移動すると時間島が御陵を押すつぶす光景を目のあたりにする。御陵の森は炎をあげて燃えるのではなく、緑色のチリとなつて見るまに消滅する。そして大きな鍵穴のくぼみが残る。堀の水が流れこんでくぼみは深緑色の池になる。ひよつとしたら緑の時間島の色なのかもしれない。

御陵の管理事務所の前で年老いたふたりの管理官が地面に這いつくばるようにして池を見つめる。横付けされたパトカーから降りた警官もぼう然と見つめる。揺れはおさまったのにまだ

地面に伏せている管理官が警官にうながされて立ちあがる。そのとき、瞬示と真美の視覚にうつすらとした青い輝きが飛びこんでくる。

【あれは！】

青い球体が見える。

【時空間移動装置？】

しかし、すぐに消える。

【確かに見えた！時空間移動装置に間違いないわ】

【みつつ見えた】

【いいえ、四基だったわ】

念を押すように真美が地上に視線を移した瞬示に同意を求める。

【うわあ、いっぱい人がいる】

それまでまったく気付かなかったことがふしぎなぐらい御陵のまわりには人があふれている。

【まずい！】

宙に浮かんでいる自分たちに気付くかもしれないと、すぐさまふたりは瞬間移動して元の小学校の砂場に戻る。そして御陵上空に銀色の巨大なものを見つけて驚く。

【超大型時空間移動船だわ！】

【なぜ、ここに！】

【瞬ちゃん、外が騒がしいわ】

先ほどと違って校門の外側が騒がしい。家から出てきた人々が御陵の方を見ながら騒いでいる。ふたりは上空を気にしながら人々の会話を拾いはじめる。

「今度は地震か？」

「緊急地震速報は流れていなかったぞ」

「でも、強い揺れだった」

「御陵に行ってみよう」

「人がいっぱいだ。テレビを見ていた方がいいかも」

続々と家から人が出て道をおおいつくしながらゆるやかな坂道を御陵に向かって下る。鉄道の高架横の道路はすでに人々があふれていて、なかなか前に進むことができない。

【老人ばかりじゃないか】

遠くでヘリコプターの音がする。

【どうしてこんなに年寄りが多いんだ】

【知らない人ばかりだわ】

【ぼくらも行こう】

【瞬間移動するの？】

【こんな人の多いところで瞬間移動はできない。歩こう】

ふたりはなつかしい校門を出て御陵に向かう集団の最後尾に続く。家並みは見慣れたものが多く、表札も覚えがあるものが多い。しかし、新しい家や記憶にまつたくない家もある。二、三十メートル先にふたりの家が見える。

「道をあけてください」

数十メートル先でふたりの中年の警官が群衆をかき分けて小学校に向かおうとする。瞬示と真美はまわりの人々の会話を注意深く聞く。

「御陵に緑色の光線がぶつかったらしい」

「宇宙戦艦の次は緑の怪光線か」

【宇宙戦艦！】

瞬示と真美が同時に信号で叫ぶ。そのとき先ほどの警官がふた리를呼びとめる。ちようどふたりの家の前だ。

「この付近でピンク色に輝いたものが落下するのを見ませんでしたか？」

「いいえ」

首を横に振りながらふたりが同時に答える。

「失礼しました」

警官が小学校へ小走りで向かう。うつむき加減で首をゆつくりと横に向ける。目の前には生まれ育った家がある。老朽化しているがふたりの家に違いない。

ふたりは身動きもせずに戸惑いながらじっと全体をそして玄関を見つめる。ドアを開けて「ただいま」と言つて自分の家に入ることがこれほど困難なことだとは！今まで経験したことをどのように両親に話せばいいのか。親といえども信じてくれるのだろうか？ふたりは信号にすることなく同じことを考える。

【どうする？瞬ちゃん】

【もし別のぼくらが家の中にいたらどうなる？】

それぞれ自分の家の中の気配を探る。

【いない】

【誰もいないわ】

ふたりはほつとした表情をする。

【両親はあの御陵に向かう集団に加わったのか。そして、もうひとりの自分たちも】

真美が久しぶりに腕時計を見る。

【瞬ちゃん！】

真美が強烈な信号を発すると細い腕を瞬示の前に差し出す。

【S2048年！】

【永久（E）じゃないわ。西暦（S）を表しているのかしら】

【その下のこれって十一月十一日のことかなあ】

瞬示が真美の腕時計の数字をなぞる。

【そうだとしたら、今日はぼくらの誕生日じゃないか】

真美がこっくりとうなずく。

ふたりは少し離れた群衆の最後尾に追いつくために早足で自分たちの家をあとにする。高架になった鉄道の手前で群衆の最後尾に追いつく。真美が瞬示の袖を引っぱって電信柱のプレートを指し示す。

「三国ヶ丘一丁」

ふたりが住んでいた町名だ。

【いつの間に高架になったのかしら】

真美が前方を注意深く見つめる。

【あの喫茶店がないわ】

鉄道が高架になったときに立ち退きになったのか、喫茶店の建物自体がない。群衆は足踏みをするだけで固まって身動きがとれない。

「どうでしたか？」

あきらめて戻ろうとする若い男を捕まえて質問する老人がいる。

「御陵がなくなつて緑色の池になつたらしい」

「えー、御陵が消えた？」

「陥没したみたいです」

何機ものの自衛隊や警察や報道関係のヘリコプターが御陵上空を旋回している。そのさらに上空に銀色に輝く宇宙戦艦が見える。

【超大型時空間移動船ではなく、宇宙戦艦だと言っていた】

見上げる瞬示と真美には宇宙戦艦の主砲は見えない。

ヘリコプターの音に負けないように人々の声が大きくなる。しかし、それはしばらくの間だけではとどの人々から会話が消える。しゃべらないのにお互い会話をしているようなふしぎな雰囲気漂う。宇宙戦艦に氣をとられているふたりにはその異様さに気付く余裕がない。

まったく会話がなくなったのかといえそうですが、そうでもなくときどき声をする。

「すごい人だ。テレビを見た方がいいですよ」

人々のなかにはうなずきながら同調する者が増える。

「テレビを見る方がいいのかも……」

瞬示と真美が何人もの人とぶつかりながら、少しでも前に進もうとするがすぐにあきらめる。

「戻った方がいいぞ」

ある老人がふたりに声をかける。

「若い人は無茶をするからな」

「今日は十一月十一日ですか」

急に思い出したように瞬示がその老人にたずねる。老人は唐突な質問に戸惑う。

「えーと、そうそう、十一月十一日だ」

「2048年ですよね。今年は」

真美が質問を追加すると老人が不機嫌そうな表情をして目を閉じる。

「48、2048年だ」

「ありがとうございます」

瞬示と真美が手を打つ。

【やっぱり2048年だ！あれから……】

【『宇宙戦艦の次は緑の怪光線か』って誰か言ってたわ】

【えーっと、とにかく、確かめよう】

ハンドマイクで警告を発する警官の声が連続して聞こえる。

「御陵陥没の原因が明らかになるまでこの付近には近づかないでください」

「ご近所の方は家に戻ってください」

「電車も運転を見合わせています。すぐ、ここから立ち去ってください」

そのとき耳慣れない信号が真美の頭を直撃する。

「大きな緑色の池ができています」

真美は頭の中に怒鳴り声が聞こえたような感覚を持つ。瞬示はそれには反応せずに想いをめ

ぐらせる。

——あの巨大土偶が抜けだしたのか？そのあとにできた窪地くぼちは堀の水に満たされて池になったのか？それに宇宙戦艦っていったい……

「宇宙戦艦が御陵を破壊したんだ」

「いや、緑の光線で御陵は消滅した。俺はこの目で見たんだ」

瞬示と真美が驚く。頭の中に会話が直接飛びこんで来たのだ。ふたりは奇妙な信号の会話と宇宙戦艦に戸惑う。

【マミ！】

【心の中でしゃべったり、声を出してしゃべったりしている！】

【瞬ちゃん、みんな直接、心の中で会話できるみたい。それに宇宙戦艦が御陵を破壊したとも言ってたわ】

【宇宙戦艦ってなんだ？】

上空を見ると雲ひとつない秋のすがすがしい青空を背景に銀色の宇宙戦艦が急速に降下する。

【どういうことだ。家まで戻ろう】

ふたりはやはり戻りはじめた一部の人々といっしょに小学校に向かう。そして家の前の道路で近所同士の親しみある会話がふたりの頭の中に直接入ってくる。

【この会話はいいかい？】

【せっかく帰ってきたのに、なぜ人目を避けるように歩かなければならないの？】

瞬示も同じことを考える。そのときふたりの名前を呼ぶ信号が頭の中を通過する。

「瞬ちゃん」

「マミ」

すぐにほかの信号でかき消されてしまう。ふたりは顔を見合わせると今聞いた信号を確認する。そして緊張感を持って自分たちの家に向かう。家の中から人の気配がする。

【誰か、いるわ】

【御陵から戻ってきたのか】

【三人いるわ】

【ぼくの家にも三人いる】

瞬示も真美も一人っ子だ。

【ぼくらに違うない！】

ふたりがそれぞれ自分の家の玄関の前に立つ。家はかなりくたびれてはいるものの手入れはゆきとどいている。インターホンはそんなに古くはないが、慣れ親しんだものではなく明らかに取替えられている。お互い垣根越しに確認しあいながら、インターホンのボタンを押す。

ブーという音ではなく合成された音楽がインターホンから聞こえてくる。そして玄関のドアが開く。

「あ！」

それぞれの家のドアが大きく開くと両方の玄関の中では氷のように固まった自分たちがいる。

【瞬ちゃん！】

【マミ！】

瞬示と真美が同時に強烈な信号を送りあう。瞬示が瞬示と、真美が真美と向かいあう。同じ場所に自分たちがいるのにふたりは消滅することもなく、もうひとりの自分たちと対面する。

「わあ！」

もうひとりの自分たちが大声をあげて家の奥に消える。

自分に出会って強制的に摩周湖上空に瞬間移動させられたのではなく、瞬示と真美は自らの意思でなぜか摩周湖に移動した。しかし、そこは透明な水をたたえているはずの摩周湖ではなかった。

【水がない！】

大きなカルデラにはもとは小さな島だった円錐形の山があつて、申し訳なさそうに囲む白濁色の沼がそのまわりを囲んでいる。

【本当にここは摩周湖なの】

霧をはき出す力を失った摩周湖周辺はすがすがしく晴れわたっている。そして西の空がほの

かに赤味を帯びてくる。瞬示は真美をうながして腕時計をのぞき見る。

【あれから三十七年もたっている。何があったんだ。それともあのふしぎな事件で湖水がなくなつたのかも】

【瞬ちゃん！三十七年もたっているのに、もうひとりのわたしたち、ぜんぜん歳を取っていないかつたわ】

【！】

ふたりとも黙ってしまう。確かに自分たちの世界の地球に戻ったが年代が違う。それが何を意味するのか戸惑うばかりで、御陵に戻るといふこと以外に選択肢がないような気持ちになりかけたとき真美がやつと信号を送る。

【あの民宿に行ってみない？】

意外な選択肢ではあったが瞬示は返事もせずに瞬間移動の体勢に入る。ふたりは摩周湖上空からあの民宿のそばに現れる。しかし、悠々ゆうゆうと水をたたえた川はなく枯れた草原がふたりを包む。

【ここも水がなくなっている】

ふたりは視線を恐る恐る民宿に移動させる。あるにはあるが今にも倒れそうなほど老朽化している。民宿を見つけて安心したのか、その場に座りこんでもうひとりの自分たちのことについて信号ではなく肉声で話しあう。

「わたしが家にいた」

「でも、ぼくらは消えなかった」

「でも、三十七年も年月がたつているのに、まるつきり自分たちそのものだったわ」

「なぜだ！五十九歳（59+37=96）の自分たちじゃなかった」

「お父さんやお母さんも歳を取っていないのかしら」

瞬示は答えようがないのか、少し間を置く。

「……でも駅は高架になっていたし、あの喫茶店もなかった。まわりの環境は数十年の年月を刻んでいた」

「あのまま立ちつくしていたら、どうなったのかしら」

「両方とも消えなかったということは、何を意味するんだろう」

結局、首を横に振ることしかできないふたりはそのまま仰向けになって寝ころぶ。

「御陵がなくなっていた」

「あの緑色の池に見えるのは時間島なのか」

「時間島はあのままなのかしら」

「何か、おかしい」

「あの頭の中に直接聞こえてくる会話はいったい何なの？」

「宇宙戦艦が御陵を破壊したらしい」

「ここは本当にわたしたちの世界なの？」

瞬示も真美もフーッと大きなため息をはくと黙りこむ。ふたりは自分自身を目のあたりにして驚きのあまり摩周湖の上空に瞬間移動してきたが、その摩周湖は単なるカルデラになっていた。三十七年もたっているとはいえ、ここが自分たちの世界だとしても強い違和感を感じる。

しばらくして以前ここへやって来たときにあった川の方からふたりの思考に割りこむような気配がする。ふたりが立ちあがってその方向を見る。急に緑色の川が現れて足元に迫ってくる。しかし、せせらぎの音はないし風の音もない。

【瞬ちゃん！時間島なのかしら】

真美がたまりかねて信号を送る。瞬示はまばたきもせずじっと動かなくなった緑の川を見つめる。

【時間島の色がいつの間にか緑に変わっている】

瞬示も真美もこの川を時間島だと確信する。

【形も変よ】

瞬示は形にはこだわっていない。時間島の形は変幻自在へんげんじざいだからこだわらなければならない。

【御陵の時間島がここへ移動してきたのか】

【何か、いいニオイがするわ】

真美の信号に瞬示は鼻の穴をふくらませる。

【森のニオイだ】

真美が身体を民宿に向ける。

【海辺なのに、森のニオイがするなんて】

【でも、確かに時間島からニオイが出ている】

真美が急に唇に指を一本立てる。

【誰かいる！】

民宿の中を伺うような仕草をする真美に瞬示が相づちを打つと一歩踏みだす。

【確かに誰かがいる】

真美も瞬示といっしょに民宿に向かう。玄関にたどり着くと瞬示はドアに手をかける前に後ろを振り返る。緑の時間島は川の形を取ったまま、流れだす様子もなくじっとして動かない。

【食堂よ。誰かいるわ】

ふたりは玄関横から食堂に向かう。勝手口が開いている。忍び足で勝手口のドアを通りこして食堂の窓にまわる。食堂では老夫婦が今にもつぶれそうなあのかなつかしいテーブルに向かいあって食事をしている。

【一太郎だ！】

【花子だわ！】

ふたりが顔を見合わす。

【すごく歳をとっているけれど間違いない】

【どうして、もうひとりのわたしたちは歳を取っていないの】

真美の強い信号に瞬示が言葉を探そうとすると、一太郎と花子の会話がふたりに直に伝わってくる。ふたりは意識することなく一太郎と花子の泡のように浮きあがる会話を読みとる。

「同じ研究室で働くことになったのには、本当にビックリしたわ」

花子になつかしそうな声を出す。

「あんな突拍子もないシステムをよく開発できたものだ」

一太郎が遠い昔を思い出すようにうつろな目で花子を見つめる。

「また、いつもの話ね」

「歳をとったな。昔話しかできなくなった」

「もうすぐ六十ですよ」

【六十歳！】

真美が驚いて瞬示に信号を送る。瞬示がしーっという仕草を真美に向ける。

「花子の言語学の知識がなかったら、あれは完成していなかったな」

「何を言ってるの。あなたの努力のたまものだわ」

「また同じ話になってしまふな」

「仕方ないわ。三十年以上、必死に走り続けていたんですもの」

「仕事を続けていた方がよかったのかな」

「また同じことを言って。『もういい。やり残したものはない』って一年前に隠居を決めたのは誰ですか」

「ははは、そうだった。一年か……ずいぶん前に退職したような気がする」

「そうね」

花子が壁につるしてある日めくりを見る。

「2048年11月11日……。あなた、今日は退職してからちょうど一年よ」

「そうか、ここへ引越してちょうど一年か」

「でも、ふしぎなものね」

「何が」

「特殊なワープロソフトの開発のために同じ研究室でいっしょに仕事をするようになったんですもの」

一太郎と花子はいつもこのような会話から始まって同じことを語りあう。食事が終わっても座り続けることが苦痛になるまでお茶を飲みながら、昔話をするのが日課になっている。

いつの間にか瞬示と真美は川の形の緑の時間島に身体を預けて気持ちよさそうに一太郎と花子のとりとめもない会話に聞いている。

一太郎と花子の会話は、同じことを繰り返すことが多くてなかなか前に進まない。まるで磨

きあげられてツルツルになった手ざわりのよい丸い石のような会話に聞こえる。瞬示と真美は
気持ちのよい歌を聴いているような錯覚に陥る。

【瞬ちゃん、あのふたり幸せそうね】

【ああ、あんな風な老夫婦になるって何だかうらやましいなあ。でも六十歳と言ってたなあ】

【やっぱりあれから三十七年、たったのかしら】

ふたりはやがて眠るように動かなくなるが、今日の一太郎と花子の会話はいつもの繰返しの
会話の殻を破って、瞬示と真美の心の中で壮大な物語を展開する。

（以下、第三十四章まで一太郎と花子の回想が続く）

第二十九章
無言通信

【時】西暦2030年（前章より約18年前）（一太郎と花子の回想）

【空】ジャストウエーブ社 摩周村

【人】一太郎 花子 山内 小田 ミブ 二天

一太郎と花子がソフト開発会社ジャストウエーブに就職して十七年たった。ふたりは正式に結婚していなかったが社内では夫婦同然に処遇されて特別研究室で寝食をとみにしてそれこそ二四時間三六五日休むことなく、画期的な言語処理システムの開発に没頭していた。お互いの専門分野である脳医学と言語学を吸収しあって、あるいは補いあって、あらゆる言語を翻訳しながら自由に会話ができる無言通信システムのチップの試作と言語処理プログラムの開発するために、自らが被験者となつて人体実験を繰り返していた。もちろん、事の上動物実験はできない。

ここはその特別研究室にある手術室だ。

「まだ、麻酔が効いているのか」

「部分麻酔ですから、意識はあるはずです」

白衣をまとった小田社長がいらだちを隠さずに一太郎と花子が寝ている手術台のそばで先ほどから同じ言葉を何回も繰り返す。

「ただ、無言通信のシステムプログラムのセットアップが始まると、感覚がすべて停止するの
で目を開けても何も見えません」

一太郎の大学時代の後輩で脳外科医の山内も根気強く小田に説明を繰り返す。一太郎より十歳年上の小柄で顔の大きい小田が背もたれのない椅子に座^すってしきりに貧乏ゆすりをする。その両脇には大柄な副社長と専務がまるで子供をはさむように座っている。

無言通信システム開発チームの一員であるミブと二天（にてん）が一太郎と花子の心電図を心配そうにながめる。一太郎の右手がわずかに動く。そのあとまるで心と心で会話するような無言通信を送りあう。

「花子、聞こえるか？」

「聞こえるわ！直に頭の中に声が響いているわ」

「成功だ！」

「ついにやったのね」

一太郎と花子の目が開く。まぶしそうに目を細めると一太郎が自力で手術台から起きあがりながら、喜びを押し殺して不機嫌そうな表情を小田に向ける。

「また失敗です」

花子も一太郎よりもっと不機嫌そうな表情を取りつくろいながらミブに支えられて起きあがる。小田の顔が見る見るまに赤くなつて怒りの表情に変わる。小田は何も言わずにさつさと白衣を脱ぐと床に投げ捨てて出ていく。

一太郎と花子は小田を追いかける幹部の姿が手術室のドアのさらにその外のドアからも消え去つたのを確認してから、疲れ果てたように再び手術台で横になる。

二天がドアを閉めて鍵をかけると一太郎が天井を見つめながら山内とミブと二天を呼びよせる。

「成功した」

全員が感動を押し殺して大きくうなずくと、一太郎が横を向いて念のためにもう一度花子が無言通信で呼ぶ。

「花子、体調は？」

「気分はそう快よ」

ふたりは見つめあうと同時にニヤリと笑う。

「完璧だ」

一太郎が花子から視線を外して山内を見あげる。

「問題はこれからだ」

「そうだ。これからの方が大変だ」

山内が再び手術の準備に取りかかる。

「大丈夫か？」

一太郎が心配そうに山内に声をかける。

「完璧にコツをつかんだ。もう目をつむっていても手術ができる」

山内が手術台から降りた一太郎と花子に笑いかける。

「よし、二天から始めよう。花子、やるぞ」

「はい」

花子がうれしそうに返事をする。二天が緊張した面持ちで上着を脱ぎはじめる。

二天に続いてミブの手術も終わり、最後の山内への手術はそれまで助手に徹しながら山内の手順を事細かく見ていた一太郎が担当した。すべての手術が終了し、五人は無言でお互いの意思を確認しながら次の計画に移る。とつくに真夜中をまわって夜が終わろうとしている。ジャストウエーブ社の本社ビルで電灯が灯^{とも}っているのはこの部屋だけだ。

「社長には申し訳ないが、無言通信システムの恩恵は全人類が平等に享受すべきだ」
一太郎がほかの四人にひとりずつていねいに無言通信を発する。

「無言通信の練習はこれぐらいにしておこう」

山内がやはり無言通信で一太郎に返事する。

ミブがリュックサックを四個持つて、一太郎、山内、二天に手渡す。すぐに花子以外の四人がリュックサックを背負う。五人は用心深く手術室を出て内階段で一階まで降りると社員通用口から駐車場に向かう。

雨が降ったわけではないのに漆黒しつこくのアスファルトが満月の光を浴びて濡ぬれたように輝いている。くたびれた白い乗用車に近づくとも山内はズボンのポケットからキーを取りだしてドアロックを解除する。五人が車に乗りこんでドアを静かに閉めかけたとき、駐車場のすべての照明灯が一斉に点灯する。

「わあ！」

エンジンのかかる音と同時に駐車場の拡声器から怒鳴るような声がする。

「車から降りろ！」

山内はかまわず車を発進させる。少し離れたところにいた数台の車のヘッドライトが点灯する。

「ばれてたのか！」

後部座席の一太郎が叫びながら横で震える花子の手を握りしめる。山内がアクセルを力一杯踏みこんだとき大きな衝撃が走る。すべてのタイヤがパンクした。ハンドルを握りしめた山内はガタガタと音をたてながら走る車にまるでムチを入れるかのようにアクセルを踏み続ける。車ははげしく振動しながら前進する。

「声を出さずに無言通信だ」

二天が落ち着いた信号を送る。

「手はずどおり門の外へ出たらバイクに乗りかえる」

ジャストウエーブ社は小高い丘の上に建っている。周辺には何もなく、なだらかな草原が広がっている。遮断機が降りた正門を突破すると下り坂になる。幸いなことにパンクしていても車は加速して、道路からそれで草むらを転がるように下る。山内が今度は必死になってブレーキを踏む。同時にサイドブレーキをちぎれんばかりに引っぱる。やっとのことで車が斜めに傾いて止まる。五人は何か車から這いだして草むらを前のめりになって降りていく。満月のお陰でマウンテンバイクがすぐに見つかる。

キーをつけたままの四台のマウンテンバイクにまたがるとカン高い爆音をたてながら道路を目指して坂を登る。花子は一太郎の後ろの座席で両腕を回して一太郎の腰にしがみつく。

道路から様子を伺っていた追っ手が異常に気付いてマウンテンバイクの爆音がする方向を見つめる。バイクが追っ手の車の鼻先に出ると一気に加速する。

「バリバリバリッ」

道路はまっすぐ伸びている。バイクも追跡する車もスピードを上げる。しばらくすると右手に側道が見えてくる。先頭の二天とそれに続くミブのバイクはその側道に猛スピードで突っこむ。

「ポイントXで再会しよう」

「幸運を祈る」

山内と一太郎のバイクはまっすぐ走り続ける。二台の車がバイクに離されながらも必死に追いかける。やがて交差点が見えてくる。山内のマウンテンバイクが減速して左に曲がり、再び大きな爆音をたてながら加速する。一太郎も減速する。

「花子、しっかりつかまれ！」

「ハイ！」

一太郎が上体を右に傾けるとハンドルを大きく右に切る。曲がりきるとすぐに上体を元に戻してアクセルをふかす。

追っ手の一台目の車がタイヤをきしませながら左に曲がった山内を追跡する。二台目の車が右にハンドルを切るが曲がりそこねて湿原に突っこむ。バックミラーから車が消えた気配を感じた一太郎が花子をうながす。

「後ろを見てくれ」

一太郎が少しスピードを落とす。花子が首を傾げると車が道路の下に突きささっている。

「曲がりそこねたみたい」

「よかった！」

一太郎が無言通信でまず山内を呼びだす。

「追っ手を振りきった」

「こちらもだ」

一太郎はミブや二天にも無言通信を入れる。

「僕も山内も追っ手を振りきった。そちらはどうだ？」

ミブも二天も追っ手を振りきっていた。一太郎がアクセルをさらにゆるめる。しかし、花子は一太郎にしがみついている両腕をゆるめようとはしない。

広々とした丘陵地帯の中でも、まわりよりも際立つて高い丘に一太郎が双眼鏡をのぞきながら携帯電話で誰かを誘導する。

「もうすぐ僕が見えるはずですよ」

遠くからグレーのライトバンが一太郎のいる丘を目指して近づく。一太郎は双眼鏡でそのライトバンの中を凝視する。

——約束どおり、ひとりのようだ

大きく揺れながらライトバンが一太郎のところから数十メートルまで近づくとき、あきらめたように停車する。タフな四輪駆動車でも凹凸のはげしいこの付近では歩くようなスピードで進むのも困難だ。一太郎は小田にあえてライトバンでここへ来るように指示した。乗用車やハイパーの車だとトランクや床に同乗者がひそんでいても確認しにくいからだ。

ドアが開くと小田が出てくる。一太郎はもう一度まわりを双眼鏡で見渡す。半径一〇キロ以内には一太郎と小田しかないようだ。

「約束は必ず守る」

丘の上を縦横に流れる風にあまり多くない小田の髪の毛がたなびく。

「成功したんだな」

小田が一太郎をにらみながら左手にアタッシェケースを持ってゆつくりと坂を登る。

「姑息こそくな手段は使わない」

小田が一太郎の数メートル手前で草の上に座る。

「おまえの気持ちはよくわかる。しかし、甘い」

一太郎が立ったまま小田を見おろす。

「だから、お呼びしました」

「俺の考えも基本的にはおまえといっしょだ」

「社長には本当にお世話になりました。無言通信システムが完成したのも社長のお陰だと感謝しています」

小田が座ったまま上半身を反らすと力一杯アタッシェケースを一太郎に向かって放り投げる。
「その中に無言通信システム開発後にすべき計画書が入っている。おまえに見せておけばよかった」

「システム開発に没頭していたから、読む暇がなかったかもしれません」

一太郎がアタッシェケースを拾いあげると、パチンと留め金を外す。中には分厚い書類と札束が入っている。

「この金は？」

「買収資金ではない。逃亡資金だ」

小田が大の字になって寝ころんで付け加える。

「この無言通信システムを全人類に普及させるには、金はもちろんのこと、命がいくつあっても足りんぞ」

一太郎は大きくうなずきながら分厚い書類の目次をいちべつすると斜め読みする。小田は何時間かかろうと一太郎の返事を待ち続ける覚悟でクセの貧乏ゆすりもせず、目を閉じる。気の短い小田にしては珍しい態度だ。

小一時間ばかりたつただろうか、一太郎が乾いた声を出す。

「社長、よくわかりました。まったくの誤解でした」

小田がガバツと起きあがるとあぐらを組む。一太郎には小柄な小田がふしぎなほど大きく見える。小柄な人間でも座るとずっしりと大きく見えることを長身の一太郎は今まで経験したことがなかった。

「じゃ、うまく逃げろ」

「えっ？」

意外な言葉に緊張感がするっとほどける。

「ひとつだけ条件がある」

今度は身がまえる。

「俺にも無言通信チップを埋めこんでくれ」

一太郎は即答せずに考えこむ。

「誰にも感づかれずに俺とおまえが連絡を取る方法は無言通信しかない」

「確におっしゃるとおりです。ただ、誰がどこで手術をするかが問題です」

「山内は？」

「山内ならひとりでも手術はできます」

「どこでするかだな？問題は」

「本社ビルは？」

「だめだ。内部に情報をもらす者がいるかもしれない」

「社長に考えは？」

「ない」

素っ気ない返事に一太郎は戸惑う。

「俺の顔は売れすぎている。マスコミを振りきってここへ来るだけでも大変だったんだ」

「社長はあとどれくらい社外に留まることができるのですか」

「正直言つて留守にしすぎている。もう行方不明者リストに載っているかもしれない」

一太郎が目を閉じて山内に無言通信を試みる。すぐに山内との無言通信が始まる。

「わかった。僕の実家ははどうだろう？」

一太郎は山内の実家が摩周湖のすぐそばの村であることをずいぶん前に聞いたことがあった。
「僕の実家はあの摩周湖地震で大きな被害を受けた摩周村だ」

一太郎はあの地震のときに花子と一晩すごした村を思い出す。その村が山内の出身地だったことに何か因縁じみたものを感じる。

「今、無言通信で山内と話したんですが、山内の実家がある摩周村はどうかと言っています」

小田が大きくうなずくと立ちあがる。

「よし、行こう」

「今からですか？」

「そうだ。せっかくマスコミを振りきったんだ。出直すのは無駄だ」

小田の決断力に感心しながら一太郎がすぐに山内を呼びだす。

「わかった。でも社長には手術の成功の確率は五分五分だと伝えてくれ。とりあえず二天とミ

ブにこのことを連絡しておく」

山内の冷静な声に一太郎が震える。そして山内の言葉をそのまま小田に伝える。

「行くぞ」

小田は成功率など気にする素振りも見せずに淡々と車に向かう。一太郎があわてて小田のあとをバイクを押しながらいいていく。小田はドアを開けながら一太郎にきびしい視線を向ける。

「もうバイクはいらんだろ」

一太郎はハツとしてマウンテンバイクを足元に倒すと急いでライトバンの助手席に着く。

「摩周湖に向かえばいいんだな」

「はい」

エンジンがかかると、ふたりはシートベルトをしつかりと身体に密着させる。

「俺が無言通信システムを独り占めにしようとも思っていたのか」

「今はそうは思っていないません。社長の考えがよくわかりました。無言通信システムが国家や軍隊やテロ組織に渡ることだけは避けなければなりません」

車が揺れながらはるか彼方の道路を目指す。

「幸せにするはずの技術が悪用されて人々を苦しめるのは過去の歴史が示している。いや、むしろ現在の方がひどい」

「おっしゃるとおりです」

一太郎は車の揺れに必死に耐えながら齒を食いしぼる。

「おまえの考えは正しいが、やり方を間違えればウイルスを世界中にばらまくようなことになる」

小田がハンドルを細かく、ときには大きく切りながら少しでも平らなところを選んで車を前進させる。それでも車は大きく揺れてなかなか前に進まない。大草原の中で揺れながら少しずつ前進する車に、一太郎はまるで自分そのものではないかと感じながら、小田の言葉に何度もうなずく。小田も一太郎と同じ感覚を共有する。

摩周湖への道と摩周村への道の分岐点でマウンテンバイクのライトが小田と一太郎の車を捕らえる。まわりはすでに陽が落ちて暗い。バイクを乗りすてて山内が運転席のドアを開ける。

「私が運転します」

山内が運転席に座ると小田が後部座席へ移動する。そしてハンドルを握ると摩周村を目指す。「久しぶりだ。この道を走るのには」

山内がなつかしそうにつぶやく。ヘッドライトに照らされていない暗闇までも器用に見つめながら、いくつかの明かりが遠くで灯ともっているのを確認する。一時廃墟はいきょとなったが、村に戻って暮らしている者がいるらしい。そうするとそろそろ摩周村の中心部に到着するはずだ。閑散としているものの、それでも家の明かりが見えるというだけで山内は気が楽になる。

「無言通信チップの埋込手術ができる施設があるのか」

「あります」

小田が後部座席でフーツと息をはく。腹をくくったとはいえ、不安がないと言えばウソになる。山内の言葉に小田の表情がゆるむのも無理はない。

「そりゃ、ありがたい」

「ただし、整備されているわけではありません」

車が本道から脇道に入る。しばらく走るとヘッドライトがさびれた村に似合わない大きな建物物を照らす。

「摩周村診療所です」

車がまわりの静けさに遠慮するようにゆっくりと停止する。

「親父おやじの診療所でした」

事情を知っている一太郎は黙って助手席から降りる。

「地震のあと閉鎖されました」

山内が運転席のドアを静かに閉めると診療所に向かって歩きだす。その山内の背中に小田が声をかける。

「親父おやじさんは？」

「地震で亡くなりました」

「そうか……」

山内が診療所の正面玄関の前に立つとそのまま扉を押す。山内の後ろで再び小田の声がする。
「鍵はかかってないのか」

「この村に泥棒はいません」

山内が慎重に無言通信チップを小田の頭に埋めこむ。外は真つ暗だ。この診療所に電気がきているのがふしぎなぐらい部屋の中は明るい。手術を開始してから一時間ほどたったころ、山内がフーツと一息つく。

「手術そのものより手術後の感染が怖い」

一太郎も山内と同じことを考える。廃墟はいきょとなった診療所の設備は脳手術をするには余りにも

貧弱だ。

「穴はふさいだ。もう少し髪の毛を切っておけばよかった」

「もともと、薄いから大丈夫だろう」

一太郎の言葉に山内が声を出して笑う。一太郎も自分の言葉に思わず笑い声をあげるが、すぐに真顔になって山内に頭を下げる。

「頼りない助手で申し訳なかった」

「いや、先輩は大したものだ。脳外科医として十分やっていける。現に僕に施してくれた手術

も完璧だった」

「問題は古い消毒液が役にたつかどうか」

一太郎が消毒液の入ったビンのふたを開ける。手元が狂ったのかふたがカランという音をたてて床に落ちる。そのとき診療所の外が一気に明るくなる。

「小田社長！それに山内博士、まわりはすべて封鎖した。おとなしく出てこい！」

拡声器からの鋭い声が部屋に侵入する。驚いた一太郎が消毒液の入ったビンも床に落として小さな目を見開いて山内を見る。

「つけられていたのか」

山内が無言通信で一太郎に問う。

「ジャストウエーブ社の者か」

そのとき銃声が一発する。

「ジャストウエーブ社の者じゃない」

「歓迎できる相手じゃないことだけは確かだ」

「命の保証はする。十、数える。出てこなければ少々手荒いことをさせてもらう」

「彼らの狙い^{ねら}は無言通信チップと埋込手術の技術だ。殺されることはない」

「一、」

拡声器を通じてカウントが始まる。

「二天！聞こえるか」

「二、」

「何者かに囲まれてしまった！しかも拳銃を持っている」

「そちらに向かつてます」

一 太郎がミブから、山内が二天からの無言通信を受ける。

「三、」

「真つ暗闇なのでまだ一時間ほどはかかります」

ミブから悲観的な無言通信が入る。

「四、」

「こちらに来てはどうしようもない」

「むしろ、安全なところへ逃げてくれ」

一 太郎と山内が交互に無言信号を送る。

「五、」

小田が苦しそうに寝返りをうつ。

「今、社長を動かすわけにはいかない」

「六、」

「無条件降伏するしかないのか」

山内が粗末な手術服を脱ぎかける。

「七、」

床に落としたビンが急にカラカラと転がりだす。

「地震？」

「八、」

部屋中に小刻みな振動とそれに呼応するように様々な共鳴音が響く。

「九、も、もう待て、ない、ぞ！」

カウントダウンする声も振動する。すぐに地響きを伴った大きな振動が起こると同時に部屋が緑一色に変化する。一太郎が小田を抱きかかえる。カウントが「九」で途切れる。

振動で診療所に向かって投射されていた車の屋根のサーチライトの光線がはげしく揺れる。

男たちは両足を大きく広げると腰を落として、乱れた光線を受けて実際より大きく揺れているように見える診療所を注視する。その診療所が一瞬のうちにがれきとなり、緑の煙幕の中に消える。

第三十章
初对面

【時】西暦2030年（一太郎と花子の回想）

【空】摩周村 民宿

【人】一太郎 花子 山内 小田 ホーリー サーチ ミト 住職 リンメイ

「大丈夫か！」

緑色の煙幕の中を右往左往しながらミトが戦闘ヘルメットの内蔵マイクを通して大声を出す。
すぐにホーリーから元気な返事が届く。

「なんとか！」

サーチライトがその声の主あかしを探すかのように集中する。同時に散発的な銃声が聞こえる。
「伏せろ！」

ホーリーが横にいるサーチの頭を抑えつけて戦闘ヘルメットのバイザーを目元まで下げる。
バイザーを通すと暗闇でも昼間のように見える。立ちこめる緑色の煙でぼんやりしているが、
数台の車と二十人ほどの大柄な男を確認する。

「かなり旧式の銃だ」

ホーリーはレーザー銃を構えるとサーチライト目がけて撃つ。サーチもホーリーより正確にレーザー銃でサーチライトを次々と破壊する。少し離れたミトも応戦する。すぐにまわりは暗闇に支配される。

ミトたちは戦闘ヘルメットの耳元にあるスイッチをオンにする。集音機能が作動してさつきまで銃を撃っていた男たちの会話が聞こえてくる。

「あいつら三人だけじゃなかったのか」

「あの丸いものは何だ」

「地震にしてはおかしい」

「ボスに連絡しろ」

「連絡できません。アンテナがこわれました」

男たちが孤立したことを確認すると、ミトは全員に点呼させる。

「一」、「二」

サーチが「三」を、ホーリーが「四」を、住職が「五」を、リンメイが「六」を告げたあと

「十四」を最後に点呼が終わる。

「少なすぎる」

ミトは不安を覚えながらも、目の前の事態に対処するために命令を下す。

「できるだけ殺さないように始末しろ」

兵士が低い体勢で素早く車に近づく。格闘が始まって銃声がする。

「彼らの武器は我々の戦闘服には無能だ。だが気を抜くな！」

格闘のさなか車が次々と爆発する。ミトがあわてて命令を変更する。

「やつらはそれなりのプロだ！始末しろ！」

兵士が電磁ナイフを手にする。しかし、男たちは抵抗するどころかその場に次々と倒れる。

「全員自害しました」

「奥歯に毒物を仕込んでいたようです」

倒れた男たちの顔に大きな黒い斑点はんでんが浮かぶ。

「何というやつらだ」

「がれきの中で気を失った人間が三人います」

リンメイの報告が入る。ミトがこの三人が自害した男たちの標的だと考えながら時空間移動装置の確認を兵士にうながすと、意外にも住職からの報告を受ける。

「時空間移動装置は三基だけじゃ」

ミトの横をホーリーとサーチが通りぬけて時空間移動装置のそばにいる兵士にかけよる。

「あとの七基は？」

「わかりません」

ホーリーが時空間移動装置に入るとサーチもあとに続く。

「かなりダメージを受けている」

ホーリーが素早くコントロールパネルで時空間移動装置の状態を確認する。サーチは救急バックを取りだすと時空間移動装置から出てリンメイに声をかける。いつの間にかまわりが少し明るくなる。

「救急バックよ」

リンメイがサーチからバックを受けとると気を失った一太郎たちのところへ戻る。

「ふたりは命に別状ないけれど、もうひとりこんすいは昏睡状態です。頭に小さな穴があいているわ」
リンメイが救急バックを開けて消毒液を取りだす。

「とりあえず殺菌するわ」

「ベッドの代わりになるものを作ってくれないかしら」

サーチがそばにいる兵士に指示する。

「サーチとリンメイが救急活動に入りました」

ミトに報告が入るが、そのミトはため息をつくだけだ。ホーリーとサーチと三人の兵士の計五人、ミトと住職とリンメイとふたりの兵士の計五人、そして五人の兵士が乗っていた三基の時空間移動装置だけがここに到着した。

——残りの七基は？

ミトがホーリーの時空間移動装置に近づくと外壁がかなり損傷していることに気付く。陽が

昇りはじめて急にまわりが明るくなるが、急変した事態にミトの表情は暗い。

「どうだ？」

ミトの言葉にホーリーがきびしい横顔でモニターを見つめる。

「時空間移動したんじゃない。もちろん空間移動したのでもない。時間移動しただけだ……」

「土偶と遭遇した場所と同じ場所にいるということか？過去に移動したのか？」

性急なミトの質問にホーリーが大きく首を横に振る。

「過去ではない」

「未来！未来へは移動できないじゃないか」

「もちろん未来でもない」

「ホーリー、はぐらかさないでくれ」

「よくわからない。あえて言えば空間位置は同じままで、まったく違う時間軸へ移動した。崩壊した建物に突っこんだように見えるが、ここは時間移動する前にいた空間座標と同じ座標なのだろう」

「まさか！」

「コントロールパネルの表示を見てくれ」

「！」

ミトの顔から血の気が引く。コントロールパネルの時間を示す部分に砂時計のマークが表示

されている。それは演算できない時間軸に移動したことを示すコンピュータの意思表示だ。

「峠を越したわ。でも、こんな手術の痕跡を見たのは初めてよ」

サーチが額ひたいの汗をぬぐって小田の頭部を見つめる。

「かなり緻密ちみつな手術だわ。筋がいい。手先が器用で訓練を積んだ医者の手術だわ」

リンメイが背伸びをする。サーチはそんなリンメイの背後の景色を見て驚く。摩周岳が見える。サーチは瞬示と真美が現れるのをこの周辺で待ち続けていたことを思い出す。何度も何度も偵察に訪れた摩周湖を望む摩周岳が目の前にそびえている。

「ホーリー！」

時空間移動装置のドア付近でミトと今いる時空間を話しあうホーリーに向かって叫ぶ。

「あれを見て！」

サーチが摩周岳を指差す。ホーリーが頭をあげる。

「摩周クレーターになる前の摩周湖！あの山の手前に摩周湖があるのよ」

ホーリーは時空間移動装置に戻ってコントロールパネルのスイッチを入れるとドアから首を出す。

「サーチ、ミト！偵察だ」

「時空間移動装置は動くのか？」

ミトが大声を出す。

「時間移動はできないが、空間移動ならできる」

ミトが時空間移動装置に乗りこむと続いてサーチも乗りこむ。

「待機しろ」

ミトがサーチと入れ替わってドアから兵士に命令すると首を傾げながら両手でドアを閉める。時空間移動装置が回転を始めると摩周岳の頂上と同じ高さまで急上昇する。回転が止まるとモニターに摩周湖全体が映しだされる。

「地殻変動でもあったのかしら。形が変わっているし、水がほとんどない。でも摩周湖に間違いないわ」

「俺の記憶では何とも言えないなあ」

「私はこの辺に十年以上いたのよ」

「そうだったな」

「ここは西暦2011年の地球だわ」

「違う！」

ホーリーがサーチの言葉をさえぎる。ふたりは同時に腕時計を見る。ミトとホーリーが先ほどまで議論していたふしぎな四桁の数字「2030」が示されている。

「2030」

サーチがつぶやく。

「この世界は俺たちの時間軸とはまったく違う世界だ」

「どういうこと？」

「2030の上についている記号を見ろ」

「S……S2030」

ホーリーはどう説明しようかと、あるいは自分自身どう納得しようかとしばらく黙る。そして、コントロールパネル上に浮いている透過キーボードに触れる。かつて何度も入力した空間座標を思い出しながら慎重にキーをなでる。モニター画面を確認すると操縦席のメインスイッチを入れる。時空間移動装置が一瞬のうちに民宿の海側に到着する。ホーリーは器用に時空間移動装置をあの民宿のすぐそばの海辺に近づける。

「ミトは残ってくれ」

時空間移動装置の損傷がはげしくドアの自動開閉装置がこわれている。ホーリーは仕方なく両手でドアを持ちあげてサーチの手を取って海辺に降りる。

ゆるやかな坂道を登って民宿の勝手口にたどり着く。勝手口のドアには鍵がかかっている。しかし、人気はない。ふたりは食堂に入ると驚いて顔を見合わす。テーブルがこわれ、椅子が倒れている。その椅子の横には包丁が落ちていて調理場では沸騰したヤカンがカタカタと音をたてている。

「ケンタが危ないわ」

「戻るぞ！」

ホーリーが直感的にサーチと意識を共有する。何者かがこの民宿に侵入してケンタをさらったのかもしれないとサーチは想像する。しかし、ホーリーが時空間移動装置に向かって走りながらサーチの想像を否定する。

「ケンタじゃない。俺たちの知らない誰かがほんの数分前に何者かに誘拐されたんだ」

「そんな！ケンタじゃなければ誰なの！」

サーチの叫び声にミトが反応して時空間移動装置のドアを持ちあげる。

「どうだった？」

ホーリーが操縦席に着くと時空間移動装置を上昇させてから回転を落とす。モニターにそれほど遠くないところを走る車が映しだされる。天井にサーチライトを装着している。

「あの男たちが乗っていたのと同じ車だ」

ミトはすべてをホーリーに任せる。

「この道は摩周湖に向かう道よ」

すぐに時空間移動装置が追いついて車の前に立ちはだかる。ドアを持ちあげてミトとホーリーが時空間移動装置から降りるとレーザー銃を構える。急停止した車の窓から銃口が光ると正確にミトとホーリーの戦闘服に命中する。ふたりはひるむことなく窓から出ている銃口を狙っ

てレーザー銃を発射すると銃を持つ手が蒸発する。たまらず四人の男が降りてくる。すぐさま自害する暇を与えることなく射殺する。そしてホーリーが車に飛びこんで気を失った女性を引きずりだすと、おおいかぶさるように地面に這いつくばる。ミトも地面に伏せると車が爆発する。

「ホーリー！」

サーチが時空間移動装置から飛び出す。

「大丈夫だ」

道路の土で汚れた女性の顔をホーリーが無造作に素手で拭く。

「ケンタじゃないだろう」

「会ったこともない女性だわ」

ホーリーの腕の中で気を失った女性があえぐような声を出す。

「一太郎……」

こぎれいに片付けられた民宿の食堂で一太郎と花子、そして山内がいてねいにミト、ホーリー、サーチ、住職、リンメイに礼を述べる。そして摩周村での事件やその事件にいたる経緯を一太郎と山内が説明する。

ミトたちはこの世界がまったく自分たちの世界ではないことに落胆しながら、一太郎たちの

話に驚くだけだった。

一睡もしていない一太郎と山内に疲労の波が押しよせる。サーチが一太郎の言葉が途切れたときを見計らってやさしく声をかける。

「少し、眠った方がいいわ」

「そのとおりだわ」

花子がサーチに同調する。

「そうだ！小田社長の様子が気になる」

小田は二階の客間で眠っている。一太郎、花子、山内がミトに一札すると二階へ向かう。

「ホーリーの言うとおりね。確かにここはケンタの民宿じゃない」

崖^{がけ}の下には時空間移動装置を格納する円筒形の穴もなければ、民宿の奥の寝室にはコンピュータもない。サーチは信じられないという表情を崩さずに言葉を続ける。

「ほとんど、私がここにいたときと同じなのに」

「ここは一太郎と花子の家だ。だが、ここも安全な場所とはいえない」

ホーリーはすでに現実を受けいれていた。ミトは食堂の窓から兵士が民宿のまわりを警備する様子を確認する。

「でもすごい発明ね。私たちの生命永遠保持手術とは比べようがないけれど、無言通信なんて考えもつかない技術だわ」

やつとサーチもこの世界を受け入れる。

「開発したばかりというのに争奪戦が始まっている」

「陽の目を見ることができのかしら」

ミトは未来からやって来たとしか自分たちのことを説明していない。しかし、一太郎たちは意外と素直にミトの話を信用した。彼らの科学的な素養がミトの話に違和感を抱くことなく現実のものとして受け入れた。

二階では意識を取り戻した小田がまだすっきりしない頭で一太郎と山内から報告を黙って聞いていたが、第一声はとがめる言葉だった。

「無言通信のことをなぜ話してしまったんだ」

しかし、一太郎がミトたちが未来からやって来たという話を追加すると小田の頭がフル回転する。すぐ花子に食堂へ案内させる。さすがに一太郎と山内は横になるとそのまま眠ってしまう。

食堂に現れた小田はミトに上体を折り曲げて深々と頭を下げると、自己紹介も省略してすぐに本題に入ろうとする。

「未来へは戻れないのか？時空間移動…何とか言ってたな…そう、そうだ！タイムマシンはこわれたのか」

小田の言葉にミトは驚くばかりで返事ができない。まったく知らない時空間へ来て混乱している自分と小田を見比べて、小田の思考の切りかえの早さに驚嘆する。どんなに大きな変化が起ころうとも小田はすぐに順応して対処しようとする。

「この世界で生きていくとしたら、これからどうするのですか？」

ミトが苦笑しながら小田を見習おうと思いつきながら応える。

「わかりません。我々はこの世界に来てからまだ一日もたっていないのですよ」

性急な小田は質問を止めない。

「私の方は一太郎からの報告を受けて一時間もたっていない。力を貸してくれないか。無言通信システムを公正に世の中に普及させれば、どれだけ平和な世界になることか」

ミトが思わず苦笑いをする。

「参ったな、小田さんには。確かに無言通信システムをめぐって卑劣な戦いが繰り広げられることは火を見るより明らかだ」

「故障したとはいえ時空間……？なんだっけ？空間を自由に移動できる機械があるんだろ。だから力を貸して欲しいのだ」

小田はあきらめずに次々と言葉を繰り返す。ホーリーが小田を制してからミトに話しかける。「小田さん、ちょっと待ってください。ミト、七基の時空間移動装置の行方とそれに宇宙戦艦が気になる」

ミトは小田を無視してホーリーに向きあう。

「宇宙戦艦？」

ミトには残りの七基の時空間移動装置のことだけしか念頭になかった。

「あくまでも推測だが……」

ホーリーは小田が黙りこみミトとの会話を一言も、もらさずに聞く体勢に入ったのを横目で確認してからミトと向きあう。

「あの緑の時間島に宇宙戦艦が割りこむように突っこんだのを覚えているか」

「艦長の命令で宇宙戦艦が時間島に突っこんだとも言いたいのか」

「R v 26なら、考えられないこともない」

ミトがうなずきながらホーリーに次の言葉を催促する。

「時空間移動装置はもちろん時間島も時空間を移動するときに発する特殊な信号のことを知っているか」

ミトがいらだちながら当然だと首をたてに振る。

「三基の時空間移動装置の記録を調べたところ、十基の時空間移動装置全部がこの世界へ移動してきたことは確認できたが、そこまでだ」

「この世界で離ればなれになったということか……それで宇宙戦艦は？」

「戦艦もこの世界へやって来ているはずだ。いや、やって来ていると思う」

「推測の域だな。ホーリー、なぜそう考える？」

「宇宙戦艦の時空間移動時に発する信号の痕跡こんせきは時空間移動装置のパターンとはまったく違う」

ミトは目を閉じるとホーリーの話を掘りさげる必要性を感じる。ミトの心境を察するようにホーリーが一気に言葉にする。

「宇宙戦艦は時間島に割りこみ、そして俺たちに追従しようとした。Rv26なら、そのような行動を取るに違いない。Rv26はアンドロイドというより人間に近い。割りこむには割りこんだが、完全に時間島の時空間移動に追従できなかったのだろう。あるいは時間島に割りこんで時空間移動するのをあきらめて、時間島の信号を頼りに時空間移動したかもしれない。いずれにしても宇宙戦艦が時間島に割りこんだショックで、時空間移動装置は複数のグループに分断されてこの世界に時空間移動したんじゃないかと思うんだ」

ミトが目を開ける。

「残り七基の時空間移動装置はこの世界のどこかに移動してきているが、宇宙戦艦はこの世界に移動してきているかもしれないし、ほかの時空間に移動しているかもしれない。こう理解して差し支えないか」

ホーリーがミトの的確な理解に大きくうなずいてみせる。さすがに女たちの軍隊の司令官だっただけのことはある。そのミトが続けてホーリーに言葉をぶつける。

「素朴で単純な質問をしてかまわないか」

「この世界のことだろ？」

今度はミトが大きくうなづく。

「パラレル・ワールドなのかもしれない」

「パラレル？」

「そうだ。この建物が動かぬ証拠だ。俺たちの世界と並行して存在する別の世界……」

このホーリーの言葉に誰もが納得して黙りこむ。しばらくしてミトが口火を切る。

「まず、七基の時空間移動装置の搜索から始めるべきだな。宇宙戦艦は……」

ミトがすべてを言い終わらないうちにいきなり小田が発言する。

「その搜索に是非協力させてくれ！」

小田が食堂のテレビを指差す。

「全世界の報道機関が発する情報をくまなく収集して異変を見つけだす」

「情報を分析して、その中の重要な情報を即座に我々に伝える方法はあるのか？」

ミトが不満そうに小田を見つめる。

「今、それができる人間は限られているが、信用できる者に無言通信チップの埋込手術を施せば、無言通信ですぐに情報を伝達することができる」

「テレパシーですか」

リンメイが初めて発言する。

「テレパシーではない。無言通信だ」

小田が短いヒザを精一杯繰りだす。

「是非、協力させてくれ」

小田が頭を大きく下げると同時にミトがきつぱりと応える。

「わかりました。その前に無言通信のことを詳しく説明してください」

小田の相好そうこうがくずれる。ミトはすぐさま無言通信のことを説明しようとする小田を制して、苦笑しながらホーリーにまだ残っている質問をする。

「宇宙戦艦の方だが……」

ホーリーがミトの続きのセリフを読みとるように応える。

「宇宙戦艦がもしこの世界に来ているなら、R v 26の方から俺たちを探しに来るだろう」

「そのとおりじゃ。R v 26なら必ずそうするはずじゃ」

やっと状況を把握した住職が力強くホーリーの言葉を後押しする。

「わかった」

ミトが立ちあがって小田に近づくとき手を握る。

「小田さん、作戦をつめよう」

そのとき、兵士が食堂に入ってくる。

「二輪車が二台近づいてきます」

「ミブと二天だ」

小田が叫ぶと外へ出ながら無言通信をミブに送る。ミトも外へ出て兵士に告げる。

「攻撃するな。味方だ」

混乱した状況のなか、異なる世界に生きている人間が、今、手をたずさえた。

第三十章 初对面

第三十一章
特別番組

【時】西暦2030年（一太郎と花子の回想）

【空】京都（壮大寺） 琵琶湖（末寺） 大阪城

【人】一太郎 小田 山内 大僧正 ミブ 二天

ホーリー サーチ ミト 住職 リンメイ 忍者 ケンタ 五郎

京都の双岡^{ならびがおか}というところに樹木がうっそうとしたまるで御陵のようなふたつの小高い丘に建立^{こんりゅう}された壮大寺^{そうだいじ}という寺がある。ミブの父はその寺のトップで大僧正という地位にある。夕方の方の斜陽すら届かない壮大寺の一番奥に時空間移動装置が現れる。回転が止まるとドアが跳ねあがってミブと住職が境内に降り立つ。すぐにドアが閉まると再び回転してすぐに消える。時空間移動装置のドアは修理されてスムーズに開閉するようになった。ミブが住職を連れて庫裏^{くら}に向かう。

「立派な寺じゃ」

羨望^{せんぼう}の眼差^{まなざ}しでまわりを見る。寺を追いだされた住職にしてみれば、これ以上の言葉をミブに伝えることができない。

「大僧正！」

中は真つ暗で薄暗い外から入ってきた者でもまったく何も見えない。

「この時間は庫裏くらにいるはずなのに」

ミブは脱いだ靴をそろえると中に入る。同じように住職もスニーカーをそろえて足元を気づかいながら何とかミブのあとを追う。

「ミブはいずれこの立派な寺を引き継ぐのか、それともジャストウエーブ社で一太郎といっしょに無言通信のさらなる開発に関わるつもりか」

「住職、私は大僧正の実際の息子ではありません。大僧正はこの寺の門に捨てられた赤ん坊の私を育ててくれたのです」

住職はミブの声を頼りについていく。

「そうか。つまらないことを言って申し訳ない」

ミブは別に不愉快な表情もせず軽く笑う。住職の目がやっと暗闇に慣れる。

「大僧正」

ミブがもう一度呼びかけたとき、住職が背中に気配を感じて振り返る。いつの間にかおごりかな僧衣を身にまとった大柄な僧侶が立っている。

「ミブ、いつ戻った？」

ミブは驚くことなく大僧正のそばに歩みよる。

「お聞きしていただきたい重要な話がございます」

暗い部屋の中で息子の真剣な表情がわかるのか、大僧正はまったく音もたてずにミブと住職の間を通りぬけて奥の部屋に向かう。

「まるで忍者のような足取りじゃ」

住職がふしぎそうに大僧正の背中を見つめる。ミブは隣の部屋に住職を案内すると灯明をつけて慣れた手つきで茶碗ちやわんと茶托ちやたくを用意する。

しばらくして質素な黒い袈裟けさに着替えた大僧正が現れる。

「かなり重大なことらしいのう」

大僧正が薄い座布団に腰を落とす。まず住職を紹介してから、ミブはこれまでのいきさつを詳しく説明しはじめる。とどころで住職が補足する。

約一時間、大僧正は一言も口を開かずに首ひとつ傾けることもなく黙然もくねんするかのように聞いていた。ミブの話が終わると大僧正がずっと立ちあがってふすまを開けると背中で応える。

「残りの方々も連れて来きなされ」

「大僧正は？」

「客人を迎える準備をする」

大僧正が奥に消える。住職はその威厳いげんある姿に感動する。一方、ミブは一太郎に無言通信を送る。

「一太郎、ミトに頼んで全員こちらに来てくれ」

「わかった」

すぐさまミブと住職が庫裏くらの外に出る。時空間移動装置が三基同時に暗闇に包まれた庫裏くらの前に現れる。呼吸を合わせたようにそれぞれのドアが跳ねあがる。

「ここは外からまったく見えません。安心してください」

ミブが全員を庫裏くらに招きいれる。

六次元菩薩ぼさつと呼ばれる摩訶不思議まかふしぎな仏像が安置あんちされた一番奥の壮大観そうだいかんという建物の中で大僧正を囲むようにミブ、二天、ミト、ホーリー、サーチ、一太郎、花子、小田、山内、住職、リンメイが数本の灯明に照らされて座っている。

大僧正は小田や一太郎の話を受け入れたあと沈黙を破る。

「無言通信が普及すればより良き新しい世界が生まれるが、新しい難問も起こる。仏に仕える者としては次なる因果に備えなければならぬ」

小田はミトたちに続いて強力な味方を得て手応えを感じる。一方、住職は生命永遠保持手術が普及したことを思い浮かべながら大僧正に語りかける。

「わしにはできなかった。それどころか新しい時代に埋没してしまった。時の流れというものが見えぬ川底で変化したことに気が付かなかったのじゃ」

「戦争には抵抗もできようが、新しい時代の流れには逆らえないものじゃ」

住職が大僧正に二度うなずいてから、自分の寺のことを手短く話す。

「住職のお名前は」

「これはわしとしたことが、大変失礼なことを！申し遅れました。空澄寺くうちようの最海さいかいと申す」

ホーリーとサーチが初めて住職の名前を知る。

「空澄寺？はて聞いたことがない寺の名前だのう」

「生きている世界が違うのじゃ」

「最海殿。これから世の中でどのようなようにして仏の教えを説くか、何もわからぬし、何もできぬかもしれぬ」

灯明がゆらりと一度だけ左右に揺れると大僧正が初めて顔の形を変える。

「いや、大僧正ならたやすいことと思われる」

「なんの、最海殿。仏力ぶつりよくをお貸しくだされ」

「もちろんじゃ。世俗に汚れたわしにはもはや仏力ぶつりよくはないが、もうひと働きしたいと思っておったところじゃ」

そのとき、小田が頭をたたみ畳にこするようにして深く礼をしたあと、大僧正と住職の話に割って入る。

「無言通信チップを脳に埋めこむ手術をする場所について何か妙案はありませんか」

意外にも大僧正が即答する。

「壮大病院を利用すればどうかう」

小田が驚きを隠さずに質問を続ける。

「壮大病院？」

「壮大寺が経営する病院で、この丘のふもとにある総合病院です」

答えたのはミブだった。

「しかし、そのチップとやらはどうやって作るのだ？」

大僧正が首をひねる。一太郎が長い小ひざをたたく。

「それも大問題なのですが、とりあえず百個ほど手元にあります」

一太郎が大事そうにジュラルミン製のアタッシェケースをパチンと開けると、中には指の先ほどの小さな強化ガラス製のカプセルに入れられたチップが並んでいる。

「こんな小さなものに人類が自由に通信できるカラクリが埋めこまれているのかのう？」

大僧正がそのひとつをつまむと両目を鋭く光らせる。

「思ったとおりに、世の中を変えなはれ」

大僧正がカプセルをアタッシェケースに戻すと立ちあがる。そして思案げに天井の一角を見上げる。

「さて、病院長にどう説明するかのう」

小田が両手を握りしめて大僧正とその視線の先を見つめる。

壮大病院内のある部屋が無言通信チップの埋込手術室として確保されて山内の指導のもとサーチとリンメイが手分けして手術を実行する。ホーリーの頭部に要領よく埋込手術をするサーチの手腕しゅわんに山内はただ驚くだけで指導する立場を放棄する。

「何という手さばきなんだ！これはまさに神の手じゃないか」

サーチが逆に驚いて身を引く。

「もう手術の現場から去って数十年たつわ。リンメイはついこの前まで現役だったからすごいと思うわ」

手術を通じてお互い打ち解けて呼び捨てで名前を呼びあうまでに親しくなるが、気楽に会話するのはサーチやリンメイの方で山内や一太郎は驚くばかりだった。

「冗談だろ。数十年というと、どう控えめに見てもサーチが小学生のころじゃないか」

一太郎が笑うでもなくサーチをまじまじと見つめる。横でリンメイが住職の手術をしている。サーチの言うとおり、その手さばきはサーチをはるかに超えている。

「これは参った」

一太郎はサーチの奇妙な言葉も忘れて老女に見えるリンメイにただ感心する。次にミトをはじめ兵士に手術が施される。あつという間に朝から始められた手術が夕刻にいたる十時間程度

で完了するが、リンメイがついに音をあげる。

「寄る年波には勝てないわ」

「そんなことないわ。私の方がクタクタよ」

サーチが手をあげる。異なる世界にいる人間の能力に山内は超人的な感じを抱くが、疲れたというふたりの言葉に何となく親しみを覚える。

「よし、今日はここまでだ」

山内も兵士の手術を終える。山内の助手に徹していた一太郎が大僧正と話しこむ小田を見つめる。どうやら行動を共にしてくれそうな者の人選をしているようだ。

「我らの宗門の者は必ず戒律を守る」

「とにかくジャストウェーブ社の腹心の幹部と部下をここに呼ぶ」

「待ってください」

一太郎が会話に合流する。

「ミトや兵士の意識が戻るのを待って、まず手術の効果を確かめましょう」

「もちろんじゃ。それに彼らの意見も聞かなければならんのう」

大僧正が一太郎の意見に賛同する。

「サーチとリンメイの腕を持ってすれば無言通信チップの手術はいとも簡単に終わる。次を考えなければ」

「チップの量産ですね」

一 太郎の指摘に小田が腕を組む。

「ジャストウエーブ社の設備を利用するわけにはいかない」

「ニュースによれば、ジャストウエーブ社では社長の居所がわからないのでかなり混乱しているようだ」

ミブが小田と同じように腕を組む。

「それにジャストウエーブ社は常時監視されている。悲しいことだが情報をもらす者もいる」

「人選は慎重にしなければならんのう」

「その上で政府の協力を取りつけて、ジャストウエーブ社でチップを量産するしか手はない」

小田は一步踏みだすことを決心する。

「まずは上手に宣伝して、世論を味方にするしか方法はなからう」

大僧正が目を閉じると思いをめぐらす。

「具体的には？」

ミトが大僧正を見つめる。全員、静かに大僧正の次の言葉を待つ。沈黙がしばらく続いたあと大僧正が目を閉じたまま低い声をもらす。

「とりあえず、信頼できる者に今あるチップ全部を埋めこみなはれ。その間に何とか手立てを考えよう」

次の日には手術を受けた者の間で無言通信チップの埋込手術の協議が練習をかねて無言通信で行われた。その間にサーチがリンメイに手術を施したのち、大僧正にも手術を実施した。その直後サーチが過労のためか突然寝こんでしまう。サーチの回復を待って、翌日リンメイがサーチに手術をして全員の手術が完了する。そして残った無言通信チップを埋めこむのにふさわしい人選にかかる。

京都のテレビ放送会社が極秘のうちに特別番組の準備を進める。表向きは「携帯電話とモラル」と題した番組だが、実際はジャストウエーブ社が開発した無言通信システムに関して行方不明の小田社長に直接インタビューするという衝撃的な特別番組で、大僧正がこの放送会社の社長に持ちかけた。インタビューの場所はこれも大僧正が手配した琵琶湖の小さな島にある壮大寺の末寺で行われることになった。

放送会社は、末寺にディレクター、進行スタッフ、カメラマン、そしてジャストウエーブ社に好意的で信頼のおける十人のコメンテーターを送りこむ。「琵琶湖に浮かぶ神秘の島」の取材ということになっているが、実際はここから小田社長のインタビューを生放送するのだ。

夜の九時だというのに花崗岩^{かこうがん}でできた険しい断崖を持つ周囲五百メートル足らずの島が明るく輝いている。すでに生放送の準備はとどこおりなく完了した。

「携帯電話が普及してから三十年たちました。携帯電話の使用についてモラルの低下が指摘さ

れています、この点に関してコメントーターの方々からご意見を伺います」

もちろん、コメントーターに携帯電話のモラルについて意見を述べてもらうのが目的ではない。ディレクターが腕時計をにらみながら司会者に目配せする。

「次のビデオをご覧ください」

小田が到着するまでの時間稼いだ。

「これは二十年前の2010年に特集した『携帯電話とモラル』というテーマで取材したときに、各方面の方々に意見を述べてもらったものです」

ディレクターが外へ出て上空をながめる。満天の星が輝いている。

「極秘番組だからCMは流せない。小田社長はどうやってここへくるのか？」

ディレクターが携帯電話で本社に連絡を取りながら、檻おりの中のクマのように狭い境内を行ったり来たりする。ビデオが終わったのか男性のコメントーターの声が聞こえてくる。

「携帯電話の発達には目を見張るものがありますけれど、マナーの低下には驚きますね。」

「そう言えば大昔、何人もの人が公衆電話ボックスに並んでいるのに、お構いなしにズーっと電話を独占していることがずいぶん非常識だと話題になったこともありました」

「今や、なつかしい話ですね」

「モラルが悪くなるのは携帯電話からの電磁波で頭がおかしくなるからでしょうか」

「携帯電話が悪いのではなく、政治や社会が悪くなったときに携帯電話が普及したためではな

いでしょうか」

風を切るような音が聞こえてくる。ディレクターが数歩さがって寺の門に身を引くと目の前に突然、時空間移動装置が現れる。

「何だ？これは！」

ディレクターはもちろん、そばにいたスタッフもぼう然と時空間移動装置を見つめる。回転が止まってドアが跳ねあがる。小田が降りてくるとディレクターが我に返ったように小田に向かってかけだす。

「小田さんですね。こちらへ！」

小田がうなずくと時空間移動装置を気にするディレクターに案内されて生放送の会場に向かう。すぐに時空間移動装置が消える。

司会者、コメンテーター、カメラマンたちが驚きながら、粗末な会場の入口にいる小田に熱い視線を注ぐ。時の勢いのせいか、一同には小柄な小田がとても大きく見える。

「三、二、一」

進行スタッフがカウントダウンする。

「さて、今日は携帯電話社会に大きな影響を与えるかもしれないジャストウェブ社の小田社長をお招きしております。小田さんはご存じのとおり、身の危険を避けるために潜伏しておら

れますが、ジャストウェブ社が開発した無言通信システムに立ちはだかる巨大な圧力に対抗するため、メディアを通じて訴えるために意を決してお見えになりました」

精一杯の拍手が小田を迎える。

「本日は危険をかえりみず、おこしいただきまして誠にありがとうございます」

司会者が通り一遍のセリフを述べてから小田に会釈する。小田は緊張した面持ちで所定の座席に腰かける。司会者の緊張度も最高潮に達して上すべりした声を出す。

「もう一度紹介させていただきます。無言通信システムの開発に成功したジャストウェブ社の社長、小田さんです」

小田が座りなおして深々と頭を下げる。

「もう皆様方も十分ご承知でしょうが、無言通信システムといっても米粒ぐらいの大きさでそれを脳に組みこむとテレパシーのように誰とでも通信、いえ会話ができるというチップで、しかも翻訳まで行えるのですね」

「そうです」

さっそく小田は内ポケットから大事そうに無言通信チップが入った小さなカプセルを取り出すとカメラがそれをアップで映す。

「すでに実用化されているのでしょうか」

「はい。わたくしの頭の中にもこのチップが入っております」

小田が頭の右側の少し前あたりを指差して言葉を続ける。

「このあたりに言語帯があるのですが、そこに埋めこまれた無言通信チップが言語帯に働きかけるのです。チップはこのあたり、少しハゲているでしょ、ここに埋めこまれています」

コメンテーターは自分たちの役目を忘れて髪を薄くした小田の頭部を戸惑いながら見つめる。

「現在どのぐらいの言語の翻訳ができるのでしょうか」

「約千種類の言語に対応しております」

「すごいですね」

「いいえ、世界で使用されている言語は方言もありますので数え方にもよりますが、六千以上と言われています。まだまだ満足のいく数字ではありません」

「無言通信はどのようにして行われるのですか」

「念ずるような感じで行います。まず無言通信したい相手に心の中で語りかけるように呼びだします。そして応答を待ちます。慣れれば簡単です」

ここで堰^{せき}を切ったようにほかのコメンテーターが小田に質問を浴びせる。

「通信という以上、電波を使うのですか」

「電源はどうなっているのですか」

司会者があわてて質問に割ってはいいる。

「まず、通信の仕組みから説明していただきますよう」

小田は少し苦笑するが、すぐに真剣な表情に戻って説明を続ける。

「相手の信号を受けるとやはり心の中で語りかけるように話をします。相手がアメリカ人と自動的に英語に翻訳されて無言通信が開始されます。相手からの返事も自動的に日本語に翻訳されてこちらに戻ってきます。感覚としては、水中に潜っている状態で頭の中がひっそりと響くような感じを想像してください」

「通信は電波で行われるのですか」

「ジャストウエーブ社のホームページで詳しく説明していますが、通常の電波ではありません。脳波です」

「脳波というのはかなり弱いものじゃないのですか」

「そのとおりです。でも皆さん、例えば怖い夢を見たとき響くような衝撃を受けた経験がありませんか」

小田はいつの間にか落ち着きを取り戻してコメンテーターを順番にながめる。

「私は阪神淡路大震災を経験しましたが、もう四十年以上も前のことなのに、今でもときどきゴーツという地鳴りの中で逃げまわる夢を見ることがあります。その地鳴りが頭に響いて目が覚めることもあります」

初老の女性のコメンテーターが両耳を押さえる。

「人間は大昔、つまり言語を持たない時代にはかなり強い脳波を発して仲間に危険や異変を伝

えていたようです」

小田の説明に男性のコメンテーターが質問する。

「今も科学では説明できない動物たちの行動がありますが、言葉を発明していなかった太古の人類は特殊な通信手段を持っていたということですか」

「そうです。私どももまだそのような人間の能力についてほとんど解明できていないのですが、このチップを埋めこんで組みこまれたプログラムが実行されると、ふしぎなことに脳の中で生成された言葉が増幅されて特定の相手に届くことを発見しました」

「偶然そうなったとおっしゃるのですか」

小田がそのコメンテーターの疑問に答えようと身体をずらす。

「私どもは究極のワープロソフトを作ろうと三十年近く研究しました。究極のワープロソフトとは音声入力で様々な言語に翻訳しながら文章を作るソフトです。どのような言語も基本的なルールがありますが、一方では人間一人ひとりの言語には『ゆれ』が、つまり個性があつて基本的なルールを乱します。私どもの社員にこの言語の基本的ルールと『ゆれ』との間にある規則性を発見し、それをプログラム化した者がいました。複雑と思われる事象は意外と単純な法則で成り立っていることが結構多いのです。企業秘密ですが、私どもは言語に関する法則を発見したのです。すでに開発していた翻訳ソフトが高レベルに達していたので、この法則を組み入れて究極に近いワープロソフトを完成させました。ここまでくると欲が出て音声によらず直

接脳で作られた言葉をアウトプットする方法として、例えば、脳に蓄えられた日本語の文章を英語で直接プリントアウトするとか、つまり信号として取りだせないかと欲張ったことを考えはじめました」

一部のコメンテーターは小田のこの程度の説明はジャストウエーブ社のホームページで予習済みの者もいるが、ほとんどのコメンテーターが興味津々といった顔つきで注目する。

「時間の関係もあり、まだほかにもいろいろお聞きたいこともありますので、少し手短かにお願いできますか」

司会者が小田に告げる。実際のところ時間の制約などあるはずもない。司会者の職業的な口癖なのだろう。

「それでは少しはしりますが、札幌の大学の医学部の協力のもと、猿を使っていろいろ試してみたところ、意外なことを発見したのです。本来猿が持ちあわせていない脳波が測定されたのです。そこでこれは禁じ手なのですが、私どもは社内で特別チームを組んで人間でも同じように特殊な脳波が現れるか実験をしました。結果はさんさんたるもので失敗の連続でしたが、つい数週間前に成功しました。非常に弱い脳波なのですが、それが特定の人間に向けられると強力な脳波となって通信できることが確かめられたのです」

「それが無言通信と呼ばれるものなのですね」

小田はコメンテーターの言葉を気にも止めずにしゃべり続ける。

「このチップを埋めこむ手術もさほどむずかしいものではなく、私どもは一気に実用化の域に達しました」

「ここからが問題なのですね」

司会者がいったん小田をさえぎる。少し興奮気味な自分に気が付くと小田は目の前のペットボトルのふたをひねってコップに注ぐことなくそのまま口にする。

「襲撃された相手に心当たりはないのですか」

摩周村での襲撃事件について司会者の信頼が厚い年配のコメンテーターが質問する。小田が一同に向かって首を横に大きく振る。

「私どもの無言通信システムに大きな関心を持つ者は二種類に分けることができると考えております」

「といいますと」

司会者が小田の言葉を受けとめる。

「ひとつは無言通信システムを自分たちに都合のいいように利用しようとする者です」

小田が「もうひとつは」と言いかけたとき不作法な男性のコメンテーターが口をはさむ。

「このシステムが手に入れば大金持ちになれますね」

お金持論を口にしたコメンテーターを軽蔑する（けいべつ）ように女性のコメンテーターが口をはさむ。

「このシステムを軍隊に組みこめば、相手より素早く情報を集められるわ」

「指揮命令が迅速に、かつ正確に末端まで徹底することも可能だろう」

「ジャストウエーブ社に乗りこんで力づくで奪いとるほどの価値があるわ」

司会者が勢いにのるコメンテーターの話をさえぎる。

「最新の情報によりますと日本政府は陸上自衛隊をジャストウエーブ社警備のために一個師団派遣しようです。すでに東京と大阪の支社にも機動隊を派遣しました。さらに小田社長に身柄を保護するために最寄りの警察に出頭するように勧告しています。」

小田が腕を組んで目を閉じる。より詳しい最新のニュースを無言通信で二天からまさしく今、受けとる。誰も小田が無言通信を受信していることに気付くことはない。

「このシステムを欲しがる者たちばかりではありません」

小田の言葉にあるコメンテーターが素早く反応する。

「つまり、この技術を闇に葬ってしまいたい者がいるということですね」

「そうです！」

「独裁国家なら、このようなシステムが国内に入りこむと体制を維持できなくなるのでは」

「内戦状態にある国もそうだろう」

「いや、内戦状態の国では逆にこのシステムを欲しがらるだろう。先にこのシステムを取りいれた方が内戦の勝者になるはずだ」

「内戦状態でなくても多民族国家ではこのシステムによって分裂するかもしれない」

「逆かもしれない。お互いのこの無言通信の翻訳機能によってコミュニケーションが活発になり、誤解が解けて仲良くなるかもしれない」

コメンテーターの討論がようやく満足のいくレベルに達したことで司会者の出番がなくなる。「携帯電話の製造会社や通信会社から見ればこのシステムは目の上のたんこぶどころか、死活問題になるわ」

「すでに通信関連の企業が大きな打撃を受けている」

「とにかく世界が激変するなあ」

「我々も失業するかもしれない」

何人かの人間が集まるとどうしてもピントのぼけた者が混じってしまうことがある。しかし、このピントのぼけたコメンテーターがずばっと言葉をまく。

「このシステムによって平和な世界になるのか、それとも混乱した世界になるのか、ジャストウエーブ社と日本政府次第だ！」

小田はこのあと根気よく無言通信の有用性を説明する。そしてどのような質問にも誠実にしかもていねいに答弁する。やがてこの番組を通して世論がジャストウエーブ社に好意を持つてくれることを切に願う小田の姿が会場から消えて、迎えに来た時空間移動装置に乗りこむこの小さな島をあとにする。コメンテーターや放送局のスタッフの記憶に時空間移動装置の丸い

形が刻みこまれる。

そのあと入れ替わるようにヘリコプターがライトを地面に向けて慎重に寺の正面に着陸する。カメラマンが機材を肩に背負ってヘリコプターに乗りこむ。ローターを回したままのヘリコプターから吹きだされる強風が、寺のまわりの木々を大きく揺らす。ドアが完全に閉まらないうちにヘリコプターが上昇する。

日本中、この日は眠れない夜になった。生放送のあと数時間後にこの京都の放送会社が配信した録画を受けとった海外のメディアもすぐに翻訳して放映する。これを見たあらゆる人々が改めて無言通信システムに驚くとともにこのシステムが一国に独占されたり、悪意に満ちた者の手に渡ることを恐れる。平和利用を望む意見が大きくなうねりとなってジャストウエーブ社を励ます声が高まる一方、一部に無言通信システムを永遠に葬るべきだと主張する不要論者が出現する。

メディアが無言通信関連の報道を流さない日はまったくないほど全世界の話題を独占する。小田や一太郎は熱い思いを抱く一方でますます表に出る機会を失う。今、おおよけ公の場に出ればどんなに政府が身辺を警護してくれようとも命の保証はないという恐怖感を強く抱く。さらにミトたちの存在が明らかになれば全世界が大混乱におちいることはたやすく推測される。

日本周辺がにわかに騒がしくなる。ジャストウエーブ社の本社には無言通信の数々の資料や

チップの試作品があるが、言語処理プログラムのソースリストは一太郎と花子の頭の中にある。世界中が小田の次の行動を神経質なほど関心を持って見守る。日本政府は小田にあらゆるチャンネルを通じて接触を試みようとするが、小田は沈黙を守り続ける。

小田を中心に、「西暦」の世界の一太郎、花子、ミブ、二天と、「永久」の世界のミト、ホーリー、サーチ、住職、リンメイが、壮大寺で連日今後の方針を議論するが、なかなか具体的な対応策を立てることができずに、ただ時間だけがいたずらに流れる。あせりの色が濃く漂いはじめたとき、ジャストウエーブ社の大阪支社が、機動隊の警備をかいくぐって突入した武装集団に占拠されたというニュースが流れる。

大阪支社の社員を人質にテロリストがたどたどしい日本語で無言通信チップと言語処理プログラムのソースリストを要求する。政府は直ちにテロ対策専門の自衛隊員を大阪支社に派遣する。同時に外国人の入国制限を実施するが諸外国の反発を招く。

一方、事態は最悪の状況となる。大阪支社は大阪城のそばにある九十九階建ての超高層ビルの最上階にあるが、社員が数時間おきにひとりずつ割れた窓から突き落とされるシーンが生中継される。国外からの反発がたちどころに消える。

小田は気が狂わんばかりに動揺する。

「何てことだ！」

政府からの小田に対する呼びかけはますますはげしく、NHK、民放を問わず連絡を取るように伝える。

「とにかく人質を救出しなければ」

ミトを中心に救出作戦をたてようとするが妙案はない。時空間移動装置を使ってビルに空間移動して不意を突くまでの計画はたつが、その後どのようにして社員を救出するのかについてまったくこれといった具体策を構築できない。

「時間がない。またテロリストから一時間後にひとり突き落とすと通告してきた」

一太郎が弱々しくつぶやく。

「時空間移動装置での移動が成功したとしても、素早くビル内に侵入するのがむずかしい」

ミトほどの知将でもテロには打つ手がない。

「ひとりずつしか時空間移動装置から降りることができない」

ホーリーが同じようにため息をつく。

「三基では第一陣として三人しか飛びだせないわ」

サーチが言葉をつなぐ。

「せめてもう二基あれば何とかなるのだが」

ミトが指を二本立てる。

「でも格闘になるわ。レスラーはこちらにはいない」

サーチが首を横に振る。

「やはり政府に連絡して協力してもらおうほかないか」

ホーリーがミトを見つめる。小田が素早く言葉をはさむ。

「時空間移動装置や皆さんのことをどうやって政府に説明するのだ？」

誰からも言葉が出ない。それまで黙っていた二天が発言する。

「俺とミブが先陣を切ろう」

ミトが驚いて二天にきびしい視線を向ける。

「素人が戦える相手ではない」

「いや、俺たちの剣術を持てれば何とかなる」

一太郎が少し意を強くして小田を見つめる。

「全日本剣道選手権の優勝者でもしよせんはスポーツの世界だ。テロリストのショットガンには通用しない」

小田が二天に首を振る。二天は剣聖けんせいと呼ばれるほどの腕前を誇る。ミブはその良きライバルだ。そのミブが決心する。

「ほかに方法はない」

そのとき庫裏くらの外で風を切る鋭い音がする。ホーリーが真っ先に立ちあがって外へ出る。

「時空間移動装置だ！」

ホーリーの叫び声でサーチとミトが飛びあがるようにホーリーのあとを追う。

「二基か」

ミトは庫裏くらの外で時空間移動装置の回転速度が落ちるのを見ながら、指を二本立てて先ほどしていたのと同じ仕草をする。

時空間移動装置から戦闘服を身にとったケンタと父親の五郎そして忍者のアケミとエリカが、もう一基の時空間移動装置からは佐助、お松、才藏と半藏が降りてくる。

「ケンタ！」

サーチが叫ぶとお互いの名前を呼びあう。問われるまでもなく五郎がすぐに事情を説明する。宇宙戦艦の時空間移動装置格納室に潜りこんで密航したまではよかったが、しばらくして宇宙戦艦が自爆しそうなほどの衝撃を受けた。時空間移動装置の操縦は五郎とお松ができるので二基に分乗して宇宙戦艦から離脱すると緑一色の世界に放りだされた。その後、地球上をあちこちら移動して地球連邦政府を探すが当然見あたらない。やがて五郎は今いる地球が自分たちの世界ではないことに気付く。時空間移動の痕跡こんせきを求めながら、地球をくまなく探索してやつとミトたちの時空間移動装置の空間移動の痕跡こんせきを発見してここへ移動して来たと言う。そして忍者が、特に佐助が住職に再会できたことを喜ぶ。

「偵察隊のメンバーから外されたとき、佐助を誘って宇宙戦艦に潜りこむことにしたんだ」
ケンタがいたずらっぽくしゃべりだす。

「父さんに計画がばれたんだけど賛成してくれた。ビックリした」

「無茶をするもんじゃない」

住職が笑いながらケンタの頭にゲンコツをあてるまねをする。ミトが五郎に一步近づく。

「ところで、宇宙戦艦は？」

「わからない」

五郎が当惑して首を横に振る。

「すごい衝撃だった。どうなったのかはわからない。無事だといいいのだが」

五郎はミトの質問から、この世界に宇宙戦艦が来ていないのではと不安げに一番知りたいことをミトにたずねる。

「ここは自分たちの世界ではないと思うのだが」

ミトが残念そうにうなずくと逆に五郎に迫る。

「この時空間移動装置は時間移動できるのか」

「ふしぎなことに空間移動しかできません。エンジンに異常はないのですが、わけがわかりません」

「そうか……」

ミトが肩を落とす。

「我々はこの世界から元の世界に戻ることができない」

ミトの言葉に五郎が声を出さずにただ驚く。しかし、そんな会話を聞いても佐助たち忍者が冷静に身動きひとつせず立っているのにミトが気付く。

「ひよつとして、彼らなら……」

ミトは落とした肩に力を入れてホーリーとサーチの肩を交互にたたくと、ホーリーが真剣な表情のミトを見つめる。そして、ミトの次の言葉を読みきる。

「彼らなら、やれる！」

ホーリーの言葉にサーチもハツとしてミトの意図を確かめる。

「忍者ならできるとでも？」

ミトが大きくうなずくと全員に向かって庫裏に入るよう命令する。

「時間がない。紹介は抜きだ。作戦会議を続行する」

ミトが手短く佐助たちに状況を説明して反応を伺う。急なことに佐助の顔をほかの忍者が見つめる。ホーリーとサーチもじつと佐助を見つめる。

「その建物のこと、そして敵のことを詳しく教えてくれ」

佐助が慎重に口を開く。ミトが顔を硬直させて佐助に頭を下げる。

「ありがとう。それでは説明する」

庫裏に備えられたモニターにジャストウエーブ社の大阪支社が入居しているビルが映される。

「政府に伝えていただきたい。テロリストが次の人質を殺害すると通告してきた一六時のきっかり一分前に、煙幕弾と催涙弾をジャストウエーブ社の大阪支社にぶちこんで欲しいと」

ミブがあの特設番組を制作してくれたテレビ放送会社の社長に無言通信を送る。この会社の社長はすでに無言通信チップの埋込手術を受けている。

「わかった。しかし、うんと言わなければ」

「この事件がどんな形で終結しようとも、必ず小田が政府関係者と会うという条件で交渉してください。もう三〇分も時間は残されていない」

「よく、わかった」

五基の時空間移動装置のドアが何度も何度も跳ねあげられて、忍者がドアから素早く降りる動作を繰り返す。

「ビルの座標の確認は？」

ミトがホーリーに念を押す。ホーリーは緊張した面持ちで時空間移動装置の中でモニターを見つめる。

「これが最後の調整だ。強風さえ吹かなければ誤差は数ミリ程度だ」

サーチが外からホーリーとミトに声をかける。

「佐助が防毒マスクと対催涙コンタクトレンズは不要だと言ってるわ」

「彼らのやり方に任せよう」

二天とミブが真剣を持つて空を切る。佐助が長刀と短刀を持つ二天のその姿をじつと見つめる。二天がそんな佐助に気が付いたとき佐助から手裏剣が二天に向かって放たれる。二天は長刀で手裏剣を払いのけると二天の手から短刀が消える。短刀は佐助が手にした太い棒に刺さる。佐助が低い声をもらす。

「見たぞ。二天一流」

二天はその棒が佐助の正面でないことに驚く。棒でかろうじて防いだのではなく一瞬の動きで二天の短刀を避けていた。そのとき庫裏から大僧正が現れる。佐助の気が二天から大僧正に向かう。大僧正もきびしい視線を佐助に向ける。佐助が身構える。

「二天の負けじゃ」

大僧正は急に表情をゆるめて佐助から視線を外して言葉を続ける。

「二天一流は宮本武蔵しか使いこなせない厄介な武術だ。二天は武蔵の末裔まつえいじゃ」

佐助に驚きの表情がはつきりと現れる。どうやら、西暦の世界にも永久の世界にも宮本武蔵が存在していた。しかも同じ剣豪として。

そばで佐助と二天の一瞬の出来事を見つめていたミブは声も出さずに震えていたが、大僧正に何とか口を開く。

「大僧正、どこへ行かれていたのですか」

「ちよつとな」

そのときミブに放送会社の社長から無言通信が入る。

「政府が了承してくれた」

興奮が冷めないミブは即答できない。

「どうした？」

「社長、ありがとうございます」

「それでは健闘を祈る」

ミブは佐助を見つめると、この作戦は忍者の腕にかかっていると確信する。

一五時五八分五五秒、ジャストウエーブ大阪支社が入居しているビルの最上階の窓にめりこむように時空間移動装置が突然その姿を現す。南側と東側に二基ずつ、西側に一基、大きな音をたてて窓ガラスが割れて落下する。すぐさま時空間移動装置のドアが跳ねあげられて忍者が素早くおどりでる。忍者の腕がぴーんと張ると目にも止まらない速さで身体が宙に跳ねあがって、空中遊泳するかのようにうろたえるテロリスト目がけて突進する。

テロリストがあわててショットガンを構えたときには、忍者は電磁ナイフでその腕を切りおとす。一秒そこそこの出来事だ。

次に二天、ミブ、ホーリー、五郎がマスクをして床に降り立つと混乱したテロリストに襲いかかる。同時に催涙弾と煙幕弾の爆発音がして部屋の中に煙が充満する。

さらに時空間移動装置から飛びだした兵士がサーチとともに、縛られていた社員の縄を解いて社員を囲みながら時空間移動装置に戻る。

忍者はまるで大阪支社に何度も来たような様相で的確に無駄のない攻撃を見せる。自害させないようにすでに戦意を失ったテロリストの後頭部のくぼみに指を突っこんで次々と気絶させていく。

時空間移動装置のドア付近で様子をながめていたミトが次々と無言通信を送る。

「退去！」

無言通信が通じない忍者に二天とミブが「退去！退去！」と叫ぶと、部屋の外が騒がしくなる。時空間移動装置はすでに窓から少し離れて全員が乗りこむのを待っている。支社のドア前のバリケートが揺れはじめる。最後に佐助が時空間移動装置に乗りこもうとする。佐助は割れた窓越しに見える大阪城をいちべつする。

「これがこの世界の大坂城か。小さい、色も違う」

時空間移動装置のドアが閉まって回転が始まる。支社のドアが吹つとぶとマスクで顔をおおった大柄の男たちがどつとなだれこむ。同時に時空間移動装置がこつ然と姿を消す。

時刻は一六時ちょうど。わずか一分と数秒の出来事だった。

第三十二章
宇宙戦艦

前章（第三十一章）までのあらすじ

月で死んだはずの胎児が摩周クレーターに向かったことが判明する。そこでミトは土偶と埴輪の鳥を発見するが、時空間移動装置が緑の時間島に吸いこまれると宇宙戦艦も消える。一方、瞬示と真美が宇宙から西暦の世界の御陵に戻るともう一組の自分たちに出会う。そのあと北海道の民宿に移動すると年老いた一太郎と花子がつとりとめもない会話をしていた。

ジャストウエーブ社に就職した一太郎と花子が無言通信システムを完成させる。摩周村診療所で小田社長に無言通信チップの埋込手術をするが、正体不明の男に囲まれて一太郎に投降を迫る。そのとき時空間移動装置が現れてミトの攻撃で男は全員自害する。

ミトは七基の時空間移動装置が消えていることに気付くと西暦の世界に居ること、時空間移動装置が時間移動できなくなって永久の世界に戻れないことを知る。

琵琶湖の寺で制作された無言通信システムの特別番組が全世界に衝撃を与える。その直後ジャストウエーブ大阪支社を占拠したテロリストが社員を人質に無言通信のチップと言語処理プログラムを要求するが、忍者の活躍で人質救出作戦が成功する。

【時】西暦2030年（一太郎と花子の回想）

【空】硫黄島 北海道（ジャストウエーブ社）

【人】ホーリー サーチ ミト 一太郎 小田 ミブ R v 2 6 浮川（日本の首相）

卵が腐ったような異臭が漂う太平洋上に浮かぶ硫黄島の滑走路に、航空自衛隊の戦闘機に護衛された大型輸送機がおごそかに着陸する。火山活動のため数年前から無人島になったこの小さな島に輸送機から迷彩服に身を包んだ百人を超える自衛隊員が自動小銃を肩に降りる。

しばらくしてやはり戦闘機に護衛された超音速双発ジェット機が滑走路にすべりこむ。ジェット機から立派な軍服に身を包んだ男がふたり、そのあとを黒いスーツに身を包んだ三人の日本政府高官がアタシエケースをたずさえて降りてくる。先ほどの自衛隊員に先導されて簡素な管制塔兼乗客待合用の建物に入る。

そのとき、突然二基の時空間移動装置がその建物の前に現れる。ドアが跳ねあがると、片方からミトと一太郎と小田が、もう一基からはホーリーとサーチとミブが降りる。ミトとホーリーはレーザーバズーカ砲を担いでいる。時空間移動装置は上昇して高度五百メートルぐらいのところで停止する。自衛隊員は初めて見る時空間移動装置に驚くが取り乱すことなく淡々と警

護態勢に入る。

島の周辺にはヘリポートを備えた海上自衛隊のフリゲートと高速水雷艇が展開している。フリゲートから飛びたった武装ヘリコプターが護衛の任務を終えた戦闘機とともに硫黄島上空の警備につく。

すぐに日本政府高官と小田、ミトの間で無言通信システムに関する会談が始まる。このような環境の中で会談が行われることになったのは、ジャストウエーブ社の大阪支社のテロ事件がきっかけであることは言うまでもない。

建物の中の一番広い部屋で政府高官と小田たちが簡単な自己紹介を終えると、粗末な机をさんで着席する。高官がさほど多くない書類を机に並べる。

「本題に入る」

小田が勢いをつけて言葉を続けようとしたとき、ミトに時空間移動装置の兵士から無言通信が入る。

「我々の宇宙戦艦より一回り小さい艦船が五隻、潜航して島に近づいてきます。この世界の潜水艦だと思われます」

「潜水艦を配備しているのか」

ミトが将校に確認する。

「海上自衛隊とアメリカ軍が二隻ずつ、計四隻配備している」

「五隻いるそうだ。この島に近づいているようだ」

将校の横にいる下士官が無線機からの呼び声に素早く反応する。

「海上自衛隊の潜水艦一隻が何者かの攻撃を受けて通信不能。その海域にフリゲートが直行中。国籍不明の大型潜水艦を複数探知！」

「なに！」

政府高官を挟んで座る高官のひとりが怒鳴る。

「情報がもれている！」

すぐさまミトが立ちあがって窓際に向かう。

「フリゲートが攻撃を受けています。真っ黒な戦闘機が海上を低空飛行しています。その数約五十機。航空自衛隊の戦闘機と空中戦に入ります」

遠くで強い光が輝いてはすぐ消える。

「フリゲートが撃沈されました」

下士官が無線の報告をそのまま将校に伝える。全員、窓際に集まって彼方の海を見つめる。

「すべてのフリゲートと戦闘機と武装ヘリコプターとの通信が途絶えました」

遠くに黒いごま粒のようなものが二、三十確認できる。

「会談は中止！すぐこの島から脱出する！」

ミトが小田に告げると時空間移動装置の兵士から無言通信が入る。

「潜水艦が浮上しました」

ミトたちが建物の外に出たとたん、ずんぐりとした真っ黒な戦闘機が向かってくる。

「回避！」

ミトが高度を上げるよう兵士に無言通信で命令すると、上空にいた時空間移動装置が消える。

「隠れるところがない！」

自衛隊員が腹這いになって上空を見上げる。彼らの自動小銃では戦闘機と戦えるはずもない。かといってレーザーバズーカ砲で攻撃するには相手が小さすぎる。

「増波カートリッジに入れかえろ」

ミトに言われるまでもなくホーリーとサーチは手にしたレーザー銃のカートリッジを交換する。そして真っ黒な戦闘機に向かって照準を合わせると一斉に打ちだす。戦闘機の機体に直径数センチほどの穴があくとそこから勢いよく炎が吹きだして滑走路に激突する。

「数が多すぎる」

ホーリーが叫ぶ。しかし、黒い戦闘機からの反撃はない。ミトたちの攻撃を逃れた黒い戦闘機は滑走路のはるか向こうで次々と垂直に降下して着陸する。

「今だ！」

ミトは時空間移動装置の兵士に建物のすぐそばへ空間移動するように命令する。そのときミトの背後で轟音ごうおんがする。ミトが振り返ると黒い戦闘機が飛来する。

「戻れ！命令を取り消す！」

時空間移動装置が姿を現すのを感じながらミトはレーザー銃を構える。二十機前後の黒い戦闘機があつという間に上空を通過する。そしてスピードを落とすとまるでヘリコプターのように旋回してミトたちをにらむように空中で停止する。

「早く移動しろ！」

ミトの命令とは裏腹に時空間移動装置が地上すれすれのところに現れるとドアを少し開く。ミト、ホーリー、サーチが空中に静止した黒い戦闘機に向かってレーザー銃を必死になって発射する。しかし、黒い戦闘機が正確に時空間移動装置に向かってバルカン砲を発射する。時空間移動装置が鈍い爆発音を残して破壊される。少し遅れて黒い戦闘機もミトたちの攻撃で真下に落ちて爆発する。ミトはうなだれて片ひざをつく。

「生け捕りにするつもりか」

建物から出てきた将校がミトたちの攻撃に驚きながらも混乱する自衛隊員に応戦体勢を取るように命令する。

「通信は？」

下士官が将校に首を二度、横に振る。

「潜水空母、それに海中から発進可能な垂直離着陸戦闘機。こんな兵器を持っているのはアメ

リカとイギリスとフランスとロシアとそして中国だけだ」

政府高官は将校の言葉にうなずくだけでオロオロする。

「国籍を隠している。戦闘機から降りたパイロットの顔を見たいものだ」

政府高官が弱々しく応える。

「そんな悠^{ゆう}長^{ちやう}ことがよく言えるな」

「政府はこの異常事態を察知しているだろうか」

将校が高官を見上げたように告げる。

「当然、把握しているはずだ」

つまらない会話に不快感を抱いてミトはホーリーとサーチにカートーリッジを元に戻すように指示する。そして壮大寺に残した三基の時空間移動装置で脱出する方法を考える。

「どうする？」

「すぐ攻撃してくるはずだわ」

ホーリーとサーチがミトの顔を伺う。

「大僧正からの無言通信によれば、政府はいろいろなルートを使って情報収集して対策を検討しているようだが、間に合わないだろう」

小田やミブや一太郎は壮大寺の二天から順番に送られてきた無言通信に天を仰ぐ。

「動かん。上陸部隊を待っているのかもしれない」

将校も腕組みをして動かない。そのとき双眼鏡を持った自衛隊員が叫ぶ。戦闘機を盾にして謎の軍隊が隊列を組んで近づいてくる。ホーリーが肩にレーザーバズーカ砲を載せると建物から敵の隊列に向かって構える。

「やめろ！」

ミトが飛びだすとホーリーの頭を抑えこんで伏せる。戦闘機の機銃が一斉に火をふくとサーチが絶叫する。

「ホーリー！」

ミトとホーリーはかろうじて建物に戻る。ミトたちはレーザー銃のカートリッジを再び増波カートリッジに取りかえる。建物の影から顔だけを出してレーザー銃を構える。

「高価な戦闘機を戦車代わりにして近づいてくる」

ある将校が苦笑する。ミトたちの射撃に戦闘機がたちまち火を噴くと大きな爆発音をあげて吹っつぶ。

「カートリッジのエネルギーがなくなった」

「俺のもだ」

「私のもよ」

サーチがカートリッジをレーザー銃から外すと足元に落とす。爆発した戦闘機の後ろに大型の黒いヘリコプターが現れる。

「いよいよ本隊のお出ました」

将校の言葉を見無視してミブが異変を感じて短く叫ぶ。

「あっ！」

すぐ横にいるミトを見つめる。

「何か揺れていないか」

すでに機銃掃射は止まっているにもかかわらず、珍しくミトが惰性で返事する。

「機銃掃射で建物が振動しているのでは」

ミトの勘違いを見無視して、ホーリーも異変を確認する。

「ミブの言うとおりで！」

やがて立っていることができないほど大きく地面が動く。ミトとサーチが同時に島の中央の山を見上げる。

「噴火の前兆かもしれないわ」

相変わらず戦闘機を盾にして向かってくる敵の兵士の数は増えるが、その兵士も次々と滑走路に伏せる。その兵士を運んできたヘリコプターの後ろは海だが、ミトやホーリーのいるところからは見えないはずの海が急に盛りあがる。その盛りあがった海が滑走路に向かってくる。

「津波？」

津波だとすれば避難すべき高い場所はない。ここは海辺の滑走路だ。強烈な振動で戦闘機が

倒れはじめ、謎の軍隊は腹這いになったままだ。

「ひよつとして運がこちらに向くかも！」

ホーリーの期待を裏切るように、津波と思われた海の盛りあがり^が急に消える。しかし、まるで活火山の頂上にいるような揺れが今まで以上に強くなる。

今度は滑走路がラクダのコブのように大きく盛りあがると、謎の軍隊をふきとばして滑走路の表面を粉々に破壊しながらミトたちに迫ってくる。あと百メートルあるかないかのところで急に速度が落ちると今度はどんどんふくらんで大きくなる。突然、滑走路が裂けて銀色の巨大な塊^{かたまり}が現れると管制塔兼乗客待合用の建物^がくずれだす。

「危ない！」

全員あわてて建物から遠ざかる。敵の軍隊は滑走路に開いた大きな亀裂^{きれつ}の中に吸いこまれるように落ちる。駐機していた大型輸送機や超音速双発ジェット機もずり落ちて亀裂の中に消える。引き裂かれた滑走路から銀色の巨大な物体が上昇する。

「宇宙戦艦だ！」

ミトが、ホーリーが、サーチが大声で叫ぶ。肩の小型通信機が久しぶりに赤く点滅するがミトは気が付かない。ホーリーが手を伸ばしてミトの小型通信機のスイッチを入れる。

「R v 2 6 デス。救出作戦ヲ実行シマス」

R v 2 6 の強烈な声が小型通信機からミトのそしてホーリーの耳をつらぬく。

「ホンノ少シ前ニミト司令官ノ時空間移動装置ヲ追ッテ、緑ノ時間島ニ艦首ヲ突ツコマセマシタ。次ノ瞬間海ノ中ニイマシタ。最大速度ニ達シテイタタメ、ソノ勢イデコノ島ニメリ込ミマシタガ、何トカ地上ニ出タノデス」

宇宙戦艦の艦橋でミトがR v 2 6から報告を受けてうなる。

「まさか！偶然か？」

ミトが驚嘆する。あるときR v 2 6がミトたちの時空間移動装置を追尾しようとしていたことは確かだったが、その時空間移動装置を探知してここに現れたのではない。ここでホーリーがきっぱりと言い放つ。

「いや、俺はそうは思わない。時間島の仕業だと思う」

「時間島が助けてくれたとでも？」

サーチがホーリーの突拍子もない意見に驚く。R v 2 6が無表情のまま艦内のすべてのアンドロイドに命令する。

「損傷ノ状況ヲマトメテ対処方法ヲ報告セヨ」

「これが未来の戦艦か？」

「R v 2 6というのは人間か？」

「すごい科学力だ」

小田と一太郎とミブが次々とミトやホーリーやサーチに質問を浴びせる。ミトは一太郎や小田の驚きを無視してR v 2 6に近づく。

「R v 2 6、潜れるか？」

ミトは宇宙戦艦の損傷の程度を気にしながらたずねる。R v 2 6の耳が赤く輝く。

「可能デス」

「潜航しろ！」

宇宙戦艦が硫黄島上空から海上に出るとそのまま垂直に降下して海中に消える。ミトは謎の潜水空母が地震と勘違いして海中にひそんでいると確信する。

「まわりに潜水艦がないか、探索しろ」

メイン浮遊透過スクリーンに黒い丸みを帯びたものが映しだされる。

「大きさがよくわからない」

「コノ戦艦ヨリ一回リ小サイグライノ大キサデス」

「これが潜水空母か」

「魚雷、多数接近中！」

「回避セヨ」

アンドロイドの警告に小田が叫ぶ。

「大丈夫か？」

「コノ艦ノスピードノ方ガ速イカラ大丈夫デス」

「魚雷より早く航行できるのか！」

小田が信じられないという表情をする。

「R v 2 6」

ミトがR v 2 6を見上げる。

「この戦艦の指揮権を譲ってくれ」

「引キ継イデイタダクタメニ参リマシタ」

R v 2 6 はまるで戦国大名にはせさんじた武将のように仁王立ちする。

「ありがとう」

ミトがR v 2 6 に軽く頭を下げるとすぐさま命令を発する。

「あの潜水空母を破壊せずに浮上させる。適切な攻撃態勢を取れ」

「了解！」

宇宙戦艦は魚雷を避けて反転すると一番近い潜水空母に急速接近する。戦艦の副砲から青い光が発射されると海中を輝きながら突き進んで潜水空母の後尾の推進機に命中する。たまらず潜水空母は浮上態勢を取るとミトの声が響きわたる。

「残りの四隻も浮上させろ」

宇宙戦艦は相手の攻撃に細心の注意を払いながら、潜水空母との距離をつめて先ほど同じ

ように推進機を破壊する。

すべての潜水空母が浮上したのを確認すると、ミトは宇宙戦艦の威力がこの世界の兵器の能力をはるかに上回っていることを確信する。

「こちらの被害の状況と修理の状況は」

「軽微デスガ、一部在庫ガナイ部品ガアリマス。部品ヲ製造シテ補修サセマス。ソノホカニツイテハ直チニ修理ニカカリマス」

ホーリーがポケットから無言通信チップの入ったカプセルを取りだすとRv26に手渡す。

「ここでこれを製造できるか？」

Rv26は急な要求にためらうこともなく、太い指先で器用に小さなカプセルを開けてベルトからケーブルを伸ばすとその先を無言通信チップにあてる。

「複雑ナ集積回路ガ内蔵サレテイマス」

すぐ一太郎がホーリーの狙い^ねを理解する。

「CMOS^{シリコン}型ノ半導体ノチップデスガ、有機体トノ結合回路ガ非常ニ複雑ニ作ラレテイマス」

何度も失敗を繰り返して完成させた脳との連携部分の回路を瞬間的に解明したRv26に一太郎と小田が驚く。ミトも興味を示すが今は艦長だ。

「ホーリー、戦闘中だ」

そのとき宇宙戦艦のまわりで爆発音が断続的にする。そして艦内がびりびりと震える。

「海面より高度一〇〇メートルまで垂直急上昇！」

ミトの命令と同時に高速エレベーターが上昇するような軽い衝撃がする。宇宙戦艦が空中に飛びだしたのに潜水空母はまだ爆雷を投下している。しばらくして潜水空母の機関砲が宇宙戦艦に向かって連射されるとミサイルランチャーが照準体勢に入る。

「球形レーザービーム砲でミサイルランチャーを破壊しろ」

「待ッテクダサイ」

R v 2 6 がミトを強く制する。

「バリアーデ防イデクダサイ」

「時空間バリアーか？」

「今ハ空間バリアーシカ使エマセン。ソレデ十分デス」

ミトはいやな予感を抱きながら R v 2 6 をうながす。

「バリアー作動開始！」

潜水空母からのミサイルが宇宙戦艦に到達する手前で空間バリアーに引っかかってホコリのように消滅する。戦いにならない。宇宙戦艦は悠々^{ゆうゆう}と大空に浮かんでいる。

一太郎がミトの許可を得て R v 2 6 に話しかける。

「このチップについて、さっきの話を聞かせて欲しい」

「有機体トノ信号結合部分ニツイテハ学習ガ必要デスガ、ソノホカノトコロハモット精度ヲ高メテ小型化デキマス。ハイパーテクノロジーC^シM^モO^スSヲ使エバ、コノ一〇〇分ノ一近クマデ小型化デキソウデス」

一太郎はRv26の分析にただ驚く。小田がツバをのみこむと枯れた声をしぼりだす。

「ということは、複製は可能なのだな？」

「ハイ」

「なかに組みこまれているソフトも含めてか？」

「モチロンデス」

Rv26が逆に質問する。

「コノソフトハ言語解析及ビ翻訳機能ヲ合体サセタモノナノデスカ」

一太郎がRv26を改めてしげしげと見まわすと応えるでもなくポツンと言う。

「人間じゃない」

「ワタシハ、アンドロイドデス」

その言葉に小田はいったん目を閉じてから一番近い浮遊透過スクリーンをぼんやりとながめる。スクリーンに映っている潜水空母の甲板上の人間を見てタンが絡まったような声をあげる。

「中国人だ！信じられない！」

すでにジャストウエーブ大阪支社人質事件で同社と時空間移動装置は世界中の注目を集めていたが、宇宙戦艦の出現に全世界が驚きの念を通りこして畏敬いけいの念に包まれる。宇宙戦艦は硫黄島で政府高官と将校や自衛隊員を乗船させて、東京の首相官邸前で下船させるとすぐに北海道を目指す。

どこの国でもそうだが、国民を驚かすような事件は極秘にしておきたい。日本政府も同じことを考えたが、政府高官たちが宇宙戦艦から降りてきたから隠すことはできなかった。しかし、このことが政府に今後の明確な指針を与えることになる。

宇宙人が宇宙戦艦に乗ってやって来たとか、すでにテレパシーを使う宇宙人が人間に化けて地球征服の準備をしているとか、混乱した様々な情報が飛びかっている以上、政府は国民と全世界の国々に極めて正確に硫黄島の事件を伝えた。

さらに日本政府はジャストウエーブ社の本社周辺を陸上自衛隊に今まで以上に厳重に警護させるとともに、航空自衛隊には北海道上空を、海上自衛隊には周辺の海上の警備に当たらせる。浮川首相は国会が開催中であるにもかかわらず、自らジャストウエーブ社に赴いて徹夜も辞さない覚悟で宇宙戦艦の艦長ミトと小田社長に事情聴取を行った。

「無言通信システムの平和的な普及を目指す」

小田の意志を受けて首相はすぐさま世界中に日本政府の方針を発信する。

「無言通信システムは人類始まって以来の大発明だ。この発明によってあらゆるものが一変す

る。この大きな変化を誰も止めることはできない。このシステムについてはすべてジャストウエーブ社に任せる。ただし、それが利益の追求や特定の者のみに利用される場合に備えて監視は続けるが、無言通信の普及を妨げるものではない。さらに我が政府は宇宙戦艦については敵とみなさず、ジャストウエーブ社の協力者として扱う」

しかし、ジャストウエーブ社は上空に浮かぶ宇宙戦艦の空間バリアーに守られていて日本の領土内にいながら独立国のような様相を示す。

「目標はただひとつ。全人類に無言通信チップを埋めこみ平等な意思疎通を図ること。これで地球人としての自覚と連帯感を持って地球上から争いを一掃する」

小田と一太郎のこのスローガンに、長年戦いに明け暮れていたミトやホーリーやサーチは強く賛同する。だが、宇宙戦艦も時空間移動装置と同じように空間移動はできるが時間移動ができない。この世界に留まるしかないと彼らは小田や一太郎や関係者の熱意に敬意を表して、精一杯この世界で自分たちの知識と知恵をささげる決意をする。

無言通信チップはアンドロイドによって髪の毛の先ほどまでに小型化されて、その手術方法も短時間でしかも簡単にできるように大幅に改良された。

手術方法はまず無菌状態のカプセル内で、特殊麻酔した大脳皮質のある部位に空気銃のような装置で無言通信チップを打ちこむ。チップが脳の組織と融合してから実際に無言通信をして

もらうという一連の手続で完了する。この間わずか数十分という短さだ。

あとは個人差があるものの、練習してチップに組みこまれたプログラムを使いこなせるようになる。通訳なしで全世界の人間と会話ができるようになる。テレパシーが夢ではなく現実の技術として使えるようになった。

この作業を担当したのはNS20というアンドロイドだが、NS20は一太郎と花子が書きあげた言語処理プログラムのエンジン部分に異常な興味を持つ。アンドロイドの会話や思考能力の向上にこのプログラムを利用して欲しいと一太郎に要望する。一太郎と花子は小田に相談するが、小田は快諾する。ひよつとするとアンドロイドは一太郎と花子の開発したプログラムで人間に限りなく近づくかもしれない。

一太郎と花子はNS20と合同でチップとプログラムにさらなる磨きをかける研究に没頭する。一方、サーチとリンメイがチップ埋込手術の方法をさらに改良したので、無言通信の普及が加速する。すぐに一人当たりの手術の所要時間が十分を切る水準までにたどり着く。無言通信チップ埋込手術はあらゆる手術の中で一番簡単な手術と言われるまでになる。

日本は何度も国連の安全保障理事会の常任理事国入りを目指しては、何十年間も常任理事国になることができなかったが、やっと全会一致で認められた。あれほど反対していた中国ですら積極的に賛成した。

浮川首相のもと日本の国連大使が一貫して無言通信システムの平和的利用を強調すると、まず各国の国連大使と職員に対して無言通信チップの埋込手術を実施することが賛成多数で承認された。その効果が国連での会議時間の大幅な短縮という形で現れる。一方、独裁国家や治安が不安定な国々からは反対の意見が数多く出される。それは無言通信システムが持つ驚異的な通信能力に危惧するものだった。個人レベルで全世界の人々が無言通信ネットワークに組み込まれると独裁者にとっては言論統制と情報管理が不可能となつて、国体を維持することが困難になるのが目に見えていた。中には国連を脱退して鎖国を宣言する国も現れる。

先進国では情報産業や携帯電話関連企業の危機感が最高潮に達する。無言通信チップ埋込手術が安価で行われると誰も携帯電話を使わなくなる。翻訳の必要もなく世界中の人間が通信費用を負担することなく通話できるとなると通信会社もその存在意義を失う。通信関連の会社の株はすでに紙くず同然まで売りこまれていた。携帯電話製造企業はほとんどが倒産した。

さらにミトと宇宙戦艦の存在が混乱を助長する。中国軍が硫黄島で自衛隊と小田たちを襲撃したことは全世界に知れわたっていた。中国政府は文民統制がくずれて軍部の暴走を止めることができなかったので国連安全保障理事会の常任理事国としての発言力が弱まった。また、全世界の軍隊が結束してもたった一隻の宇宙戦艦を倒すことができないという事実を各国首脳は痛感する。日がたつにつれて宇宙戦艦の存在感がますます大きくなる。

ジャストウエーブ社を国内に抱えているため国連での発言力の強さを肌で感じる一方、自重

することを忘れずに浮川首相は「平和」という言葉を前面に押しだして外交を進める。日本には無言通信システムと宇宙戦艦から発生する混乱を静める責任があると考えた。

「どうということなんだ？宇宙戦艦に搭載された時空間移動装置も時間移動できない」

宇宙戦艦の艦橋でミトは元の世界に戻る方法がまったくないことに改めて落胆する。

「故障デハアリマセン。シカシ、合理的ナ説明ハ不可能デス」

取り乱すミトとは対照的にR v 2 6 が冷静に応える。

「となると、例えば……」

ミトが言葉を選ぶというよりは混乱する思考を何とか正常に戻そうとR v 2 6 に質問する。

「レーザー砲は時間制御できなくなるのか」

「ハイ」

ミトが表現を替える。

「レーザー砲の射程距離が無限になるということだな」

「ハイ」

「エネルギーが遮断されない限り、レーザー光線は永遠に直進するということか」

ミトはR v 2 6 が海中でしかレーザー砲を使用しなかったことと、空中ではバリアーを使つたことを思い出すと時空間バリアーの機能のうち時間バリアーが使えず、空間バリアーしか使

えないことを現実のこととして受け入れる。そして宇宙戦艦に搭載された時空間移動装置に期待していたが、そのすべてが時間移動できない単なる空間移動装置になりさがっていることにその期待も打ち碎かれる。

「時間島が宇宙戦艦に何か細工をしたのか」

「時間島に無理矢理侵入したために宇宙戦艦の時空間移動エンジンが故障したというのならうなずけるけれど、搭載されていた時空間移動装置の時空間移動エンジンも同じように故障するということとはあり得ない。」

ホーリーに向かってミトが大きなため息を出す。

「宇宙戦艦ノ、ソシテ時空間移動装置ノ時間移動エンジンモ故障ハシテイマセン。時間制御デキナイダケデス」

「ホーリー、使用できる武器が限られることになる」

「しかし、この戦艦の威力はこの世界の人間には痛いほどわかったはずだ」

ホーリーにはミトの弱気が理解できない。

「もちろん、この世界の人間が我々に戦いを挑んできたとしても抹殺するなどということは考えていない」

「それなら空間バリアーだけで十分じゃないか」

ミトとホーリーの会話をR v 26が黙って聞いている。ミトが低い声をホーリーに向ける。

「この戦艦の攻撃力が限定されているということに、この世界の人間が気付いたときのことを考えているんだ」

「平和的に解決していけばいいじゃないか」

ホーリーがげんそうにミトを見つめる。

「我々はこの世界に死ぬまで身を置かなければならない。いずれは武器を使用しなければなら
ないときがやってくる可能性が高い」

「そのときはそのときじゃないか」

「発射されたレーザー光線が目標物から外れたとき、何かにぶつかるまでレーザー光線は直進
し続けるのだ」

「！」

ホーリーがやっとレーザー砲をむやみに使用することができないことの重大性に気付く。

「ホーリー、R v 26、もちろんここにいる全員、今の話は極秘だ」

ホーリーがうなずくとサーチの腰に手を回して抱きよせる。

「もし時間島の仕業だとしたら、時間島はいったい何を考えているんだ」

「確かに時間島には意思があるわ」

ミトがホーリーとサーチの言葉にうなずく。そのときR v 26の耳が赤く点滅したあと艦橋
に警報が鳴り響く。

「朝鮮半島カラミサイルガ三発、発射サレマシタ。核反応アリ！」

アンドロイドの鋭い声がする。

「目標は！」

「本艦デス」

「到着までは？」

「二分四〇秒」

「防御態勢完了！」

わずかな余裕しかないが、ミトは迎撃に自信を持つ。

「核兵器だとするとバリアーデ阻止すれば放射能が拡散する。引きつけて球形レーザービーム砲を使うか、それとも主砲でたたくか」

ミトが無言通信でホーリーの意見を求める。

「ミトの言うとおりで。残念ながらレーザーを使わなければならない。引きつけて主砲だ」

「仰角が最大になったときということか」

「そうだ。それがミサイルを消滅させて、かつ直進するレーザー光線を宇宙に逃がす方法だろう」

ミトはホーリーから砲撃手のアンドロイドに視線を移して大きな声で命令を下す。

「全主砲発射準備！仰角最大点でミサイルを迎撃する！」

「それでも宇宙のどこかで我々が発射したレーザー光線に遭遇して誰かが被害を受けるかもしれない……」

ホーリーはミトを制するのではなく不安な気持ちを無言通信で表現する。

「やむを得ない。相手は核兵器だ。この世界ではいとも簡単に最も野蛮な兵器を使うようだ」

「仰角最大点ニミサイル到達マデ五五秒」

アンドロイド特有の抑揚のない声が返ってくる。

「発射シミュレーション開始」

「艦長！」

R v 2 6 がミトを呼ぶ。

「何だ？」

「仰角最大点ノ延長線上ニ月ガ存在シテイマス」

「なに！」

ミトがメイン浮遊透過スクリーンのシミュレーションを見て驚く。

「シミュレーションハ完璧デス。エミュレーション開始。自動発射装置作動！」

「この世界の月には人間は？」

「確かめる時間がない」

ホーリーはメイン浮遊透過スクリーンを見つめたままR v 2 6 にたずねる。

「月のどのあたりに命中するか、わかるか？」

「赤道付近デス」

ミトとホーリーが肩をなでおろす。メイン浮遊透過スクリーンの右半分に月が映される。
「赤道なら問題ないかもしれない」

「自衛隊カラ通信ガ入リマシタ」

ミトがすぐに反応する。

「確実に迎撃する。放射能の心配はないと応えておけ」

メイン浮遊透過スクリーンの左半分に三本のミサイルが映しだされる。

「月の映像を拡大しろ」

艦橋前方の主砲が一点に集中しているのが見える。

「必要最低限の発射砲数は」

「一本デ十分デス」

「仕損じだときのミサイル到達時間は」

「二〇秒デス」

「第一連装の一番砲で迎撃する」

「二番砲、三番砲及ビ第二連装以下、予備体勢ニ格下ゲシマス」

「球形レーザービーム砲をいつでも撃てるようにスタンバイしておけ」

一番砲からレーザー光線が稲妻のように向かうと三発のミサイルが一瞬にして消滅する。

「迎撃成功！」

消滅を確認したミトがアンドロイドに命令する。

「自衛隊に連絡しろ」

「十秒足らずで主砲のレーザー光線が月に命中する」

ホーリーの無言通信にミトは肉声で返事する。

「ああ」

メイン浮遊透過スクリーンに映った月の赤道付近の一点が明るく輝く。

「月の異変は本艦のレーザー砲が原因だと自衛隊に連絡してくれ」

ミトが表情をゆるめてホーリーに感謝する。

「ホーリーがいてくれて助かった」

ホーリーはとんでもないという表情をして無言通信を送り返す。

「艦長のようにトップに立つ者は孤独だ。いずれにしてもこの戦艦の主砲の威力をこの世界の

人間に示すことができた。彼らは宇宙戦艦の主砲が竹光たけみつだと思ふことはないだろう」

ミトがホーリーの見解に意を強くしてうなずくと何かを思い出したような表情をする。

「ところでホーリーはおもしろい武器を開発すると言ってたが、その構想はどうなったんだ」

ホーリーがニヤツと笑いながらミトから離れる。

「おもちゃに見えるかもしれないが、任せてくれるか」

「楽しみにしている」

ホーリーがミトから離れて身体をくるっと回すと右手をあげてサーチとともに艦橋から姿を消す。

第三十二章 宇宙戦艦

第三十三章

お医者さんごっこ

【時】西暦2031年（前章より一年後）（一太郎と花子の回想）

【空】御陵 宇宙戦艦

【人】ホーリー サーチ 住職 リンメイ ミト R v 2 6 大僧正（瞬示 真美）

大僧正の思惑どおりに事が進んで、すでにジャストウエーブ社で無言通信チップの埋込手術を完了した者が百万人を超えた。主に政府要人、大企業の重役、大富豪、宗教家の一部そしてマスコミ関係の人々、そのほかは世界中からできるだけ平等に手術を施した。しかしながら、無言通信を普及させるためには、ある程度社会的地位の高い者を優先せざるを得なかった。それはまるで生命永遠保持手術が開発されたところを彷彿させるような状況だった。

だからというわけではないが、サーチは生命永遠保持手術をしていたことを思い出す。サーチにとって無言通信チップの埋込手術は単純な作業だった。ただ、ふしぎなことに生命永遠保持手術と違って、全人類が埋込手術を熱狂的に受けたいと願ったわけでもなかった。もうサーチやリンメイが埋込手術をすることはないが、常々リンメイとよく話しあうテーマがあった。「私たちの世界に無言通信システムがあつたら、女と男は戦争していたかしら」

「さあ、どうかしら」

リンメイはどちらかというと懐疑的だ。

「言葉の壁を越えて異なる民族や宗教を信ずる人たちの意思疎通が深くなれば、誤解は確実に減ると思うわ」

サーチは前向きだ。そしてほえむリンメイに言葉が続ける。

「私たちもその線は何とか乗り越えてきたわ。でも女と男の戦いは回避できなかった」

「サーチ、女と男の言葉はね、同じ言葉でも意味が違うのよ」

サーチはうなずいてから、夕闇に包みこまれたジャストウエーブ社の窓の外にため息をはき出すとリンメイに背中であらずねる。

「私たちの永久の世界に戻れないとしたら、この西暦の世界で何をして生きていけばいいのかしら」

「そうね、この世界の人たちに私たちの医療技術を教授してあげたいわね」

「同感だわ。そうすれば多くの人が健康的に長寿を全うできるかもしれないわ」

サーチがリンメイの言葉に同意して、振り返りながら首を横に少しだけ振って続ける。

「ただし、生命永遠保持手術はしないわ」

「同感よ。あの手術は人間を幸せにはしない。女と男が戦争に突入した遠縁があの手術だったわ。ところで……」

リンメイが夢見るようなうつろな表情をする。

「……私はこの世界の古代の歴史を知りたい。ホーリーが言うようにパラレル・ワールドだとすれば、私たちの世界の古代の歴史との相違をじっくりと調べたいの」

「この世界にも遮光器土偶は存在するのかしら」

「存在するわ」

サーチが目を丸くして窓際からリンメイに近づく。

「いつの間に調べたの？リンメイ！」

リンメイが顔のシワの一つひとつを伸ばしてサーチにほほえみかける。

「サーチ、御陵に行かない？」

「御陵！この世界にも御陵はあるの？私たちの世界の御陵と同じ形をしているの？」

「ええ。私たちの世界で第五生命永遠保持センターがあつた近くに同じ御陵があるの」

「すごい！リンメイ」

毎日のように様々な医師を相手に講演や指導をしていたのに、リンメイはしっかりとこの世界の遮光器土偶だけではなく、御陵まで詳しく調べあげていた。

ミトの許可を得てリンメイとサーチは住職とホーリーとともに時空間移動装置で御陵に空間移動する。しかし、御陵はまるでジャングルのようにホーリーは仕方なく時空間移動装置を木

々の間に少しだけ沈みこませたところで停止させる。さっそくリンメイがカバンから奇妙な形をした器具を取り出す。

「何だ、それは？」

ホーリーが操縦桿をロックするとその器具を興味深く見つめる。

「三次元重力測定器よ」

「何を調べるのじゃ」

「御陵の地中を測定するの」

「そんな小さな器具でこんな広いところが測定できるのか？」

リンメイがうなずくと、サーチとホーリーがモニターで御陵の近辺を確認する。

「私たちの世界の第五生命永遠保持センターはこのあたりだけれど、この世界では小学校なのね」

「さあ、リンメイの手伝いをしようか」

ホーリーが重力測定器を肩にかける。

「どうやって降りるの」

リンメイがふしぎそうにホーリーを見つめる。

「何とか頑張ってみる」

ホーリーが時空間移動装置のドアを跳ねあげると目の前の大木にジャンプする。

「危ない！」

思わずリンメイは目を閉じる。ホーリーに続いてサーチも軽々と大木に飛び移る。

「無理しないで」

「最近運動不足だから、ちょうどいい。地面に着いたらこの測定器の使い方を教えてくれ」

ホーリーとサーチが器用に降りていく。

「さすがに元戦士だわ。気を付けてね」

ふたりは何とか地面に到達する。

「こりや、ひどい」

「どこにも行けないわ」

ふたりの無邪気な無言通信がリンメイに届く。

「測定器の使い方は？」

「スイッチを入れて、歩きまわるだけよ」

「えーと、このボタンか」

ふたりはゆるやかな斜面をゆっくりと下っていく。しばらくすると坂が急になる。やがて深緑色の堀が見えてくる。その堀をへだてて白い鳥居が見える。その柱の下で幼い男の子と女の子がゴザに並んで座っている。

「あたしがお医者さん」

女の子が男の子に向かって念を押す。

「いい？」

「いやだ」

男の子が口をとがらせるが、女の子は無視する。

「さあ、ベッドに寝て」

「注射はいやだ」

「男の子でしょ」

サーチが笑顔でふたりをながめる。

「お医者さんごっこしているんだわ」

ホーリーも思わず相好そうこうを崩す。

「痛い！」

「我慢しなさい」

「いやだ。いつもママがお医者さんなんていやだ」

ホーリーとサーチの身体がピクツと反応する。

「わがままな患者さんね」

起きあがって逃げだそうとする男の子の手を女の子が引っぱる。

「瞬ちゃん！お薬の時間ですよ」

ホーリーとサーチの顔から笑顔が完全に消える。

「まさか！」

「瞬示？」

「真美？」

ホーリーが両手をメガホンのようにして大声を出す。

「シュンジー、マサミー」

ゴザの上のふたりがビックリして御陵を見つめる。

「ひよっとして本当に瞬示！真美！」

「カメラ、持っているか」

「ええ」

サーチは胸のポケットからメガネのようなものを取りだして耳にかけるとキョロキョロしている幼児を見つめる。サーチの視点に呼応して自動的に撮影が始まる。

「顔立ちがそっくりよ！」

「この世界はあのふたりの幼いときの世界か？」

ホーリーもサーチも今いる世界におおなる興味を抱く。

宇宙戦艦の薄暗い作戦室でミト、ホーリー、サーチ、住職、リンメイ、五郎、ケンタが大混

乱におちいる。先ほどからサーチが撮影した幼い瞬示と真美の顔が浮遊透過スクリーンで大人に成長する過程が何度もシミュレーションされる。忍者は冷静にミトたちやスクリーンを交互に見つめる。

「何度見ても、そっくりじゃ」

「本当にあのふたりなのか調べなければならないが、方法は？」

住職に向かってミトが切りだす。

「大僧正じゃ」

「そうか。大僧正なら調べる手立てがあるかもしれない」

ミトがすぐさま無言通信で大僧正を呼びだす。

「お願いしたいことがあります。今からそちらに伺ってもよいでしょうか」

「どのようなことなのじゃ」

「今、申し上げてもよろしいでしょうか」

「なんなりと」

「あるふたりの子供の身元を調べていただきたいのです」

「名前は？」

「『瞬示』と『真美』といいます」

大僧正からの無言通信が少し間をおいてミトに返ってくる。

「詳しい話を聞きたい」

「少々長い説明になります」

「かまわぬ。続けなされ」

これまで大僧正に話していなかった瞬示と真美のことについて無言通信でミトが長々と説明する。その間に五郎が幼児の資料を時空間移動装置で壮大寺に届ける。

「わかった。重要人物じゃ。すぐ調べさせよう」

サーチがミトと大僧正の無言通信が終了したと思つてミトにたずねる。

「大僧正の返事は？」

「引き受けていただいた」

ミトが一息入れると再び緊張する。大僧正から無言通信が入ったのだ。

大僧正がどのように手配したのかわからないが、すぐにこの幼児の身元が判明する。御陵近くの住宅街で隣合わせに住む園児で名前は「瞬示」と「真美」だった。

大僧正の手際の良さに驚いたあと様々な意見や感想が飛びかう。データの分析が終わると徐々に興奮が冷めて、それまでの混乱が解けだしてふたりの発見者であるホーリーとサーチが言葉交わす。

「まだ五歳か」

「誕生日がまったく同じどころか生まれた時間までいっしょなんて信じられないわ」

サーチが首を振るとホーリーが残念そうな表情をする。

「二十二歳になるまでに一七年かかる」

「ホーリーもあのふたりが二十二歳になったときに何かが起こると考えているの？」

ホーリーがうなずき、サーチも首をキツと固定して再び首を軽く振る。

「でも、ずーっと監視するなんて少し馬鹿げているような気がするわ」

「しかし、重要人物だ。いつどのようにしてあの特殊な超能力を身につけたかだ」

「そうね。今のところは何の変哲もない可愛い子供だわ」

サーチがお医者さんごっこをしていたふたりの姿を思い出してほほえむ。

「なぜ、あのふたりがいる世界に俺たちが移動してきたのか」

ホーリーが遠くを見つめるように作戦室の天井に視線を合わせる。

「あと十七年たてばあのふたりは超能力を身につけるかもしれない」

「なぜ、あと一七年なの？あのふたりがいつ超能力を手に入れるのか、今の段階では不明だわ」

サーチがホーリーの先入観を否定するが、あっさりと冷静さを捨てて興奮する。

「でも、あのふたりの成長の過程がわかればすべての謎も解けるかも」

「時間島だ！時間島の謎に迫ることができるかも」

ホーリーが時間島を想像して付け加えた言葉に今度はリンメイが反応する。

「土偶の謎に迫れるかもしれないわ」

リンメイのくぼんだ目から輝くものが発散する。そしてミトがリンメイの言葉を引き継ぐ。

「仮にあの幼児が我々が遭遇した瞬示と真美だとすれば、そしてこの世界であのふたりが超能力を身につける事件に遭遇することができれば、元の世界に戻るヒントを手に入れることができるかもしれない」

「じゃが十七年後ではわしやリンメイは恐らくこの世界でもなく、元の世界でもなく、あの世で暮らしておるじやろう」

住職が残念そうにリンメイを横目で見つめるとサーチが同調する。

「私たちだってあのふたりが二十二歳になるまで生きているかしら」

ホーリーがやっと天井から住職とリンメイに視線を移して力強く提案する。

「生命永遠保持手術があるじゃないか」

「！」

サーチが驚いてホーリーの顔をまじまじと見つめる。サーチだけではない。ホーリーはいつの間にか自分を注目する複数の視線に戸惑う。確かにサーチとリンメイが協力すれば、生命永遠保持手術は可能かもしれない。

「今の言葉、本気？」

「ああ」

ホーリーの力のこもらない返事がサーチの強い言葉に押し返される。

「もう、生命永遠保持手術は受けないって、言ってたじゃないの！」

しかし、サーチはホーリーのあやふやな返事に、かえって現実味のある手応えを感じる。

住職が口元をもぐもぐさせる。住職の横でリンメイがいったん目を閉じてから、ゆっくりと開いてサーチを見つめる。

「できるかしら」

冷静なリンメイの言葉にサーチが意外にも即答する。

「不可能ではないわ」

「設備がないわ」

まわりの空気が急変していることを肌で感じるとサーチも口を閉ざす。ホーリーがサーチに替わってリンメイにたずねる。

「宇宙戦艦に生命永遠保持手術の設備はないのか」

言い終わってからホーリーはたずねる相手を間違ったことに気付く。リンメイの代わりにミトが短く応える。

「ない」

「必要な設備や手術用の器具を製造できないか」

ホーリーがミトに食いさがるとミトは新しい空気の流れを敏感に感じとる。

「仮にできるとしても、今すぐ手術する必要はないだろう」

すぐさまサーチが何か言おうとするが住職がさえぎる。

「もう一度永遠の命を手に入れることの是非の問題じゃろ？ミトが悩んでいるのは」

ミトが住職の視線にたじろぐことなくうなずく。そのミトが沈黙を守る姿勢に入るのを確認してからサーチが発言する。

「もし、設備があつたとしても私ひとりでは生命永遠保持手術はできないわ。リンメイの協力が必要だわ」

「どういうことなんじゃ？」

住職がミトからサーチに視線を向ける。

「私は手術の現場からずいぶん遠ざかっている」

「だから、何を言いたいのか」

住職の言葉が少しきつくなる。

「リンメイはついこの間まで本部の手術室長だったのよ」

住職がサーチの意図を知りながら繰り返す。

「だからじゃ……」

ホーリーが割りこむ。

「サーチは生命永遠保持手術を実行に移す前提で話をしている」

ホーリーがサーチの意をくむ。

「ホーリーと私はあのふたりに遭遇^{そうごう}した永久の世界の最初の人間だと思うの。それに今回も……」

サーチの声がゆらぐ。住職はサーチもホーリーもあのふたりとの出会いを運命的なものと思いいこんでいることに気付く。そしてミトもあのふたりの力を借りて元の世界に戻ることができればと考えていることにも気付く。

「とにかく生命永遠保持手術が可能かどうかは手術に必要な設備を製造できるかどうかにかかっている。不可能なら議論は前には進まない」

ミトが肩の通信機のスイッチを押して首を少し横に曲げる。

「Rv26、作戦室に来てくれ」

あらぬ方向に、しかも確実に風が流れだした。

サーチがホーリーの腕を取って耳元でささやく。

「あなたの子供がお腹にいるわ」

ホーリーが驚いてサーチの腕を振りほどくと強く抱きしめる。

「これからのこと、じっくりと考えていかなければならない」

「そうね。やらなければならないことが急にいっぱいあふれてきたようだよ」

「精一杯生きる勇気が出てきた」

「うれしい」

ミトや住職やリンメイがふしぎそうにホーリーとサーチの様子をながめる。そのとき大きな足音をたててR v 2 6が作戦室に現れる。すでに質問の内容を理解していた。

「可能デス」

R v 2 6が意外なほど簡単に応える。その言葉にホーリーがサーチから身体を離すといっしょに椅子に腰かける。ミトはもちろん全員がR v 2 6を見つめる。

「製造にどれぐらいの時間がかかる？」

「今スグ、計算デキマセン」

「一年とか二年とかの単位でかまわないから答えてくれ」

ミトが気軽に融通を求めるとR v 2 6の耳が赤く輝きだす。それを見てホーリーが驚く。一方、リンメイが何ともいえない表情をして住職を見つめる。

「中央コンピュータの計算では半年ぐらいです」

「中央コンピュータだって！」

ホーリーがやつぱりという表情をして立ちあがる。ミトが急に興奮したホーリーをふしぎそうに見つめる。

「R v 2 6が言っているのはこの戦艦の中央コンピュータのことだ」

ホーリーは驚きをそのままにしてミトの言葉を押さえる。

「そんなことはわかっている。なぜ、この戦艦の中央コンピュータに生命永遠保持手術関係のデータがあるんだ！」

ホーリーの言葉に今度はミトが驚く。生命永遠保持手術の設備を製造するのはアンドロイドだ。そのアンドロイドが答えるのではなく、しかも生命永遠保持手術とまったく関^かわりのない宇宙戦艦の中央コンピュータがRv26を介して返答したことにまずホーリーが違和感を覚えた。そしてミトもその感覚を共有した。

「なるほどホーリーの言うとおりだ」

Rv26は黙ったまま立っている。よく見るとRv26の耳が点滅することなく赤く輝きっぱなしになっている。ミトとホーリーがRv26の異常に気付く。

「中央コンピュータが皆サンニ話ガアルソウデス」

全員立ちあがる。コロニーの中央コンピュータが人間を招くことは過去にあったが、宇宙戦艦の中央コンピュータが話したいことがあるなど前代未聞のことだ。ミトが何とか冷静さを保ちながらRv26に伝える。

「どこで中央コンピュータの話を聞けばいいんだ？ここでもいいじゃないか」

「コンピュータ室マデ来ルヨウニ言ッテマス」

「言う！コンピュータが？」

ホーリーがRv26の言葉にはげしく反応する。ホーリーの興奮が、リンメイの不安そうな表情に気付いた住職の気持ちを抑えこむ。

中央コンピュータは高さ三メートルぐらいの黒い円筒形で、側壁や天井と数え切れないケーブルでつながっていて、煩雑に様々な色の光がそのケーブルの中を点滅しながら移動する。どこからともなく男とも女とも区別できないが明瞭な声^{めいりょう}がする。

「ミナサン、ワタシハコノ宇宙戦艦ノ中央コンピュータデス。前線第四コロニーノ中央コンピュータカラ受ケトツタデータノナカニ、ミナサンガ必要トスルデータガアリマス」

「例えば？」

ホーリーが待っていましたとばかりに質問を開始する。中央コンピュータはホーリーの期待を裏切らない答えを音声にする。

「生命永遠保持手術、時間島、遮光器土偶、瞬示、真美ニ関スルデータデス」

Rv26を除く全員が驚き、お互いの顔を見合わす。

「いつ、そんなデータを手に入れたんだ？」

「緑の時間島ニ突入スル直前デス」

「なぜデータを受けとれたのだ？」

中央コンピュータが連続するホーリーの質問に即答する。

「送ラレテキタカラ受ケ入レマシタ」

全員、無言のまま考えこむ。「なぜ」この二文字の言葉が全員の脳裏を駆けめぐる。やつとミトが声をあげる。

「我々に話したいことがあるらしいが、それはどういうことか」

「今、才伝エタシタコトデス」

「生命永遠保持手術をするための設備や手術用の器具を製造するために必要なデータが保存されているというのだな」

「アンドロイドニ製造サセルコトガデキマス。ダダシ、ドレダケノ時間ガ必要カトイウ演算ハ非常ニ困難デス。演算スルヨリ製造ニ着手シタ方ガイイノデハナイデシヨウカ」

ミトが生命永遠保持手術の設備の製造にどれくらい時間がかかるか、気軽に概算で求めたため中央コンピュータに混乱が起こった。ホーリーがそのことに気付くと中央コンピュータに詫びるが、何か引つかかるものを感じる。

——『演算するより製造に着手した方がいいのでは』とは？

かみあわせの悪い歯車が急に効率よく回りだしたような感覚がホーリーを支配する。ホーリーの聴覚の遠くでミトの声がする。

「いずれにしても生命永遠保持手術の設備の製造が可能だということに間違いはないな」

「ハイ」

サーチがリンメイを見つめる。リンメイはサーチの視線を受け流して住職を見つめる。住職がリンメイをやさしく見つめるとそのままのやさしさで言葉をかける。住職はリンメイが先ほどから不安に思っていたことすべてを理解していた。

「リンメイ、リンメイ自身が決めることじゃ」

「私の気持ちをわかってくださっていたのね。でも、見解を聞きたいの」

リンメイはまるで子供が親にせがむように目を大きく見開く。老婆となったリンメイだがその瞳ひとみに住職は年甲斐としがいもなくうつとりと見つめなおす。

「賛成、反対という事柄ことごとではないのじゃ。サーチやホーリーに協力するもしないもリンメイの気持ち次第じゃ」

リンメイが首を横に振りながら住職に迫るように近づく。

「協力します。でも、私たちも生命永遠保持手術を受けるべきなのかどうか、それを教えて欲しいの」

住職がリンメイの言葉をのみこむと残念そうな表情をしながらリンメイの手を握る。

「それには明確に反対じゃ」

意外にもリンメイが大きくうなずいて住職を見つめる。

「うれしい！死ぬまでいっしょね。若くなって浮気でもされたらと心配で心配で……」

住職が首を横に振って笑いながら握った手に力を入れる。

「何を言う。死んでもいいしょじゃ。死んでから新しい自由な生活が始まるのじゃ」

住職の胸の中にリンメイがくずれるように倒れこむ。住職の頭全体が真っ赤になる。

「し、しかしじゃ、遮光器土偶に未練はないのか」

「あります。でも生きている間に遮光器土偶の謎がわかればそれはそれでうれしいし、わからないまま死ぬのも仕方がないわ」

住職が大きくなずく。しかし、リンメイと住職の言葉の重みに誰も気が付かない。サーチがふたりに近づいてリンメイの背中を軽くたたく。

「急いで手術を受ける必要はないわ。元の世界に戻る可能性が出てきたら、そのときに受けるかどうか決めれば？ねえ、ホーリー」

サーチがホーリーに同意を求めるが返事はない。

「どうしたの？ホーリー」

ホーリーはハツとしてうわの空で聞いていた会話を取りこむとリンメイにしぼりだすように何とか声を出す

「サーチの言うとおりの機会が来ればそのとき考えればいい」

「いいのよ。私は住職についていくだけなの」

「でも、最新の手術方法は教えてくださいね」

リンメイが照れながら住職から離れるとサーチにというよりはみんなに向かって宣言する。

「私の最後の仕事になるかもしれない。精一杯、頑張るわ」

ミトが中央コンピュータに向かって毅然きぜんとした態度で念を押す。

「私は艦長だ。私の命令に従うように」

「ハイ」

「すぐ生命永遠保持手術の設備と手術に必要な器具の製造にかかる。手配してくれ」

「ハイ」

この返事のあと、中央コンピュータのきびきびとした声が部屋にこだまする。誰も一太郎と花子の協力を得てアンドロイドNS20が作成したアンドロイド用の言語処理プログラムが、中央コンピュータの思考に影響を与えていることに気付かない。いや、ホーリーだけがその兆候を漠然ぼくぜんと感じとっていた。

「作戦室に戻る」

ミトは中央コンピュータに背を向けて誰に言うでもなく、しかし、はっきりとした言葉を残す。

「歳をとらない自分たちにこの世界の人間はどう反応するだろうか」

第三十四章
盗聴

【時】西暦2032年～2048年（一太郎と花子の回想）

【空】ジャストウエーブ社（宇宙戦艦）

【人】ミト ホーリー サーチ 一太郎 花子 住職 リンメイ 二天

西暦2032年～36年

世界中が無言通信システム以上にミトたちの存在と宇宙戦艦の動向にますます注目する。無言通信システムは段階を踏んで公開されるが、宇宙戦艦の情報についてはまったくベールに包まれたままだ。宇宙戦艦がこの世界の人間に危害を加えることはないが、強力な武器に各国政府は無言の圧力を受ける。

無言通信チップの小型化と高性能化そして埋込手術の簡素化はジャストウエーブ社の技術力で改良されたと思う者は誰もいなかった。その改良技術はミトたち未来人だというわさが定説になっている。ミトが全世界の人間に無言通信の恩恵がいきわたるように努力をすればするほど、ミトの評判がよい方向にかわわずに脅威だけが広がる。

すなわち、世界中の人間に無言通信チップを埋めこんだあと、ミトが人類を無言通信でコン

トロールしようとしているのではないかと、まことしやかな流言が広まる。どのように説明しようともその流言を払拭することはできない。

いずれにしてもミトたちは永久の世界へ戻るすべを持ちあわせていない以上、あのふたりの行く末を見届けたいという気持ちを理屈抜きに高める。

ミトたちがこの世界にやってきて五年たった。生命永遠保持手術を受けたミト、ホーリー、サーチ、五郎、ましてや忍者や兵士が表舞台に出ることはない。仮に積極的にこの世界の人々に接触したところで、彼らの評判が良くなることはないだろう。このジレンマを解消する方法をミトは見いだすことができない。

生命永遠保持手術を受けていないのはリンメイ、住職とそのころ二十歳そこそこになったばかりのケンタ、そしてホーリーとサーチの幼い娘の四人だ。妊娠していたサーチは出産後に生命永遠保持手術を受けた。ケンタは住職の考えに影響されたのかとりあえず受ける必要はないと考えた。ケンタが生命永遠保持手術を受けたのはさらに五年たってからだった。

ミトはアンドロイドに生命永遠保持手術を受ける前の自分とホーリー、サーチ、五郎にそっくりなロボットを製造させた。ミトたち四人にそっくりなロボットは、毎年少しずつ歳をとっているように見せかけるため綿密にメイクを変える。生命永遠保持手術を受けたあと歳をとらない姿をこの世界の人間に見せるわけにはいかない。もちろん、このことは小田や一太郎たちにも伏せられた。外部との接触は住職とリンメイとケンタに任される。ミトたちの姿をした口

ボットはジャストウエーブ社の建物内に限られてはいるが、必要に応じて結構それなりに活躍する。

無言通信の普及は各国の政府の対応によって異なつた様相を見せる。携帯電話やインターネットが普及して世の中が変化した以上のスピードで大きな影響を国家や人々に与える。

まず、イスラエルとパレスチナが劇的な動きを見せる。憎しみに憎しみを重ねたユダヤ人とパレスチナ人は無言通信がどのような影響を与えるかを考慮することなく、情報戦に遅れをとることを恐れて積極的に無言通信チップの埋込手術を国民に受けさせた。通訳なしで無言通信によるはげしい感情と感情がぶつかりあつて壮烈な戦いがまさに勃発しかつたとき、ふしぎなことに急に激情が消滅して相互理解を深めるようになった。言葉を共有することによって平和へ向かおうとする無言通信が激増した。首脳同士のかけひきは無視されて、ごく当たり前の意見が大半を占めるようになる。一氣に和平に向かう。歴史的な完全停戦に始まり相互不可侵条約の締結にこぎつける。

一太郎が夢に描いていた姿だ。無言通信が平和を目指して結束しようとする大衆の気持ちをまとめあげた。

イスラエルとパレスチナだけではない。些細なすれ違いが大きな争乱を招いたほかの国や民族に無言通信が言葉を超えた会話の場を提供した。識字率の低さを克服するだけの通信手段を

無言通信が提供した。

大国の中で当初無言通信の普及をしづめていた多民族国家のロシアは、積極的に無言通信の普及を目指したユーロ諸国の結束が強固になるのに耐えきれず方針を転換する。初めは民族間の軋轢あつれきが一気に高まるが、その高まりも持続することなく峠を越すと急速に収斂しゅうれんして落ち着きを取り戻す。

超大国の中国は無言通信の受けいれを強硬に拒否した。このころ十五億人を突破した中国人民すべてに無言通信チップの埋込手術ができないと、人民の間に不公平感が一気に広がって国内が大混乱におちいるというのが表向きの理由だ。しかし、このことが幸いして、中国に供給する予定だった大量の無言通信チップが開発途上国に供給され、開発途上国の無言通信が急速に普及して政治的に安定すると経済発展の芽が生まれる。

めざましい経済発展を続ける中国が世界各国で普及する無言通信に指をくわえて黙っているわけがない。数年前まで携帯電話の生産で世界のトップを走っていた中国はその輸出が急速に落ちこみ、急成長する開発途上国の追い上げもあってさすがに急ブレーキがかかったように経済が沈滞する。人民の無言通信の普及に対する熱望に中国政府もついに重い腰をあげざるを得なくなった。しかし、十五億人分もの無言通信チップを短期間に製造して公平にすべての人民に埋込手術するのは不可能に近い。

日本政府とジャストウェーブ社は中国に無言通信チップの製造技術を移転するため、工場を

中国に数十ヶ所建設するという思い切った方針を打ちたてる。そして、建設に着手するとチップの製造が軌道に乗るまでの間、手術方法を研修させるために大量の中国人医師を受けいれると表明した。

それは軍部の暴走で中国の潜水空母が硫黄島を攻撃してから、ちょうど六年の歳月が流れたときだった。日本国内からはあの六年前の事件を理由に、この方針に反対する声が少なくなかった。しかし、浮川首相は国連での演説で中国に対して無言通信システムの技術移転を打ちだす。

中国での無言通信の普及とほとんどの人がイスラム教を信仰するパレスチナの影響を受けてイスラム世界の人々も雪崩^{なだれ}をうったように無言通信システムを受け入れた。

そして最後まで拒否し続けていた北朝鮮も体制の崩壊とともに韓国の援助で無言通信の普及が始まった。

このころミトは重大な情報をつかむ。中学に進学する瞬示と真美が無言通信チップの埋込手術を受けるという情報だ。その昔、大人しか持っていなかった携帯電話をいつの間にか小学生のほとんどが持つようになったのとそっくりだ。

ミトの部屋にホーリーとサーチが現れるとミトが情報の内容をふたりに告げる。驚きを持って聞いていたが、まずホーリーが口を開く。

「そう言えば、瞬示と真美も無言通信をしていた」

「あのふたりの通信は無言通信じゃないわ」

「いずれにしても瞬示と真美は手術を受けるようだ」

ミトがジャストウエーブ社で言語処理プログラムの改良に没頭する一太郎に無言通信を送る。

「教えて欲しいことがある」

「何でしようか」

「無言通信を盗聴できるか？」

「できないことはありませんが、禁じ手です」

意外なミトの質問に一太郎は引つかかるものを感じて無言通信の内容を花子に伝える。花子は花子でやはり気になってサーチに無言通信する。サーチがすぐにホーリーに耳打ちする。ホーリーが急に血相を変えてミトに近づく。

「ミト、何を考えているんだ！」

ミトがホーリーの急変した態度にうろたえる。

「無言通信チップ埋込手術後のふたりの無言通信を盗聴しようかと思案している」

ミトはごまかさずに真意をホーリーに伝える。

「俺は反対だ」

「私も」

サーチも追従する。ホーリーとサーチの心がひとつになる。

「わかった。正直言つて気が進まなかった。何だかほっとした」

ミトが一太郎にもう一度無言通信を送る。

「盗聴は簡単にできるのか？」

「いや、相手が勘のいい人間なら、盗聴されているとは思わなくても何かおかしいとすぐに気付くでしょう」

一太郎はとりあえず穏やかに返答するが、すぐにその無言通信の口調がきびしくなる。

「もし、盗聴できるといふうわさが広がれば、無言通信そのものが成り立たなくなります」

ミトが大きくうなづく。

「盗聴はしない。安心してくれ」

再び、ミトと一太郎の無言通信の内容が花子を経由してサーチに無言通信で流れる。

「この世界への介入は最小限にしなければならないわ。私たちに危害が及ぶときしか介入は許されない」

サーチがミトにだめを押すとホーリーの手を引っばつて立ちあがる。不機嫌な表情をして部屋を出ようとするふたりにミトが陳謝する。

「すまなかった」

ホーリーが振り返るとミトにあっさりと会釈して部屋を出る。

「わかりました。今の話は忘れましょう」

ミトが椅子に座りなすとフーッと息をはいて苦笑する。

「まるで自分の無言通信が盗聴されていたような感じだった」

西暦2048年

さらに十二年の歲月（ミトたちがこの世界に現れて十八年たった）が流れる。ついに無言通信がすべての人間に受けいれられて一昔前の携帯電話のように日常的に使われる一方、地球がひとつの国になったような平和な時代が訪れる。その象徴として地球連邦政府が成立する。

数年前に首相を退いた浮川は地球連邦政府の設立式典で、無言通信がどれほど平和と幸福を全世界に与えたかを高らかにそして感動的に述べた。浮川ほど日本の歴代首相の中で長期にその席にあった首相は過去にひとりもいなかった。もちろん各国の大統領や首相の中でも浮川ほど全世界のために身をつくしたリーダーはいなかった。この演説に感動した人々の無言通信が地球上を駆けめぐる。人類は自前のネットワークを構築した。

ところがバラ色の世界になったわけではなかった。無言通信に様々な弊害が発生する。

例えば迷惑無言通信が横行する。個々の無言通信は規制になじまないものでどうしようもなかった。また、就寝中に無言通信で呼びかけられることも多発する。時差の関係で地球の反対側

の人と無言通信するときに起こる現象だが、故意に寝ている人の睡眠を妨害する者も現れる。さらに一番始末が悪いのは夢の中で無意識のうちに無言通信を送ってしまうことだ。これが無言通信の最大の欠点かもしれない。

一太郎は脳細胞に含まれるその個人しか持っていない固有の信号で無言通信の送受信時に認証機能を持たせるようにしたが、次々と出現する様々な不具合に対処するためのプログラム改良作業に追われて寝る間もない。通信は自由度が高くなればなるほど悪用される可能性も高くなることを一太郎は痛感する。

もちろん、若いプログラマーが育って一太郎や花子を助けるが、やはりふたりのノウハウには開発者としての重みがある。必然的にふたりの能力にますます磨きがかかる。

無言通信システムが様々な問題を起こすことを予測していた小田は社長を二天に譲ると会長職に留まることもせずに退社した。無言通信の正しい使い方の講座を世界中に開設して無料で教えてきたが、いずれ何らかの壁にぶちあたることを薄々承知していた。使い切れないほどの財産を手に入れた小田は、惜しげもなくその富を無言通信が本来あるべき正しい利用方法の啓蒙に注ぎこみ、側面から一太郎と新社長の二天を支えることに骨身を惜しまなかった。

また、無言通信システムが余りにも風通しのいい環境を作ってしまう。国家や宗教とかの重みが消滅する。解決不可能と思われるいた国家間や宗教間に横たわる難問題が奇跡のように無言通信によって取り払われるが個人間では摩擦が生ずる。こうなると逆に規制を求める声が大

きくなる。どうやら、人類は軽くなると重みを求めるようになるらしい。決して強力なリーダーシップを持った独裁者を求めているはないが、無言通信に関わる問題をテキパキと解決してくれるリーダーを求めるようになる。そして地球連邦の初代大統領に浮川が推されるが、浮川は年令を理由に断る。

このような状況のなか、意外なことにミトが脚光を浴びる。初めは畏敬の目で見られていたミトはだんだんとその存在が忘れかけられるほどまでになっていたが、今度は過度に近い期待を集めることになる。やがてミトを地球連邦政府の初代大統領に推薦する声が起こる。しかし、それは本物のミトではなく初老を迎えたようにメイキャップされたロボットのミトに對してだった。

ジャストウエーブ社の協力もあつてリンメイに研究室が与えられていた。その部屋の陳列ケースには何体かの遮光器土偶のほか埴輪はにわの鳥が一羽収められている。

リンメイはテレビで地球連邦政府設立式の浮川元首相の演説を見ている。そしてその演説が終わって大きな割れんばかりの拍手が聞こえてくるとリンメイも感動のあまり涙を流す。そのうらんだ視線の延長線上にある陳列ケースの埴輪はにわの鳥が動く。リンメイは自分の目を疑いながらハンカチを取りだして涙を拭くと再び視線を埴輪はにわの鳥に合わせる。

「確かに動いたわ」

埴輪^{はにわ}の鳥がリンメイに確認をうながすようにもう一度羽根を動かす。埴輪^{はにわ}の鳥に近づくがもう動くことはなかった。

「！」

リンメイが絶句するのも無理はない。土の成分以外何も検出されていないのに埴輪^{はにわ}の鳥が緑色の涙を流している。すぐさま、リンメイは壮大寺でホーリーとサーチの娘を孫のように可愛がる住職に無言通信を送る。

「すぐにこちらに来てください！」

「どうしたのじゃ」

「急を要します。話はこちらにきてから」

住職がいつしよにいる五郎に頼んで時空間移動装置でジャストウェーブ社に現れる。五郎は孫のことが氣になるのか、時空間移動装置から降りることなくそのまま壮大寺に戻る。

すぐに住職はリンメイの研究室に向かう。ゼイゼイと息をはきながら研究室のドアを開けてリンメイに近づく。リンメイはまだ呼吸が整っていない住職の手を引っぱって陳列ケースに向かう。

「これ」

リンメイが埴輪^{はにわ}の鳥を指差す。住職は荒い息の合間に短く驚きの声をあげる。

「これは」

埴輪^{はにわ}の鳥の目がヒスイのような緑色をしている。住職はリンメイを見つめて続けて何かを言おうとするが声が出ない。リンメイは性急な自分の行動を深く反省して住職の言葉を待つ。声を出す代わりに住職は目の前のリンメイに無言通信を送る。

「ミトには？」

リンメイが小さく首を横に振る。

「ミト！」「ホーリー！」「サーチ！」

住職が順番に無言通信を送る。すぐに三人から異口同音の無言通信が返ってくる。

「どうした？」

「リンメイの研究室に来てくれ！至急じゃ」

「そちらには行けない！」

「そうじゃった」

住職が冷静さを取り戻す。ミトたちは生命永遠保持手術を受けて二十代の姿に戻っている。その姿をジャストウエーブ社の社員に見せるわけにはいかない。

「そっちへ行く。どこへ行けばいいのじゃ」

「宇宙戦艦の作戦室でお待ちしています」

リンメイが陳列ケースを開けて埴輪^{はにわ}の鳥を取りだして白い布でくるむ。

「行こうか」

リンメイが大事そうに白い包みを抱いて住職のあとをついていく。

ミト、ホーリー、サーチが目を見張る。

「あのとき、確か埴輪はにわの鳥が土偶の目に向かって緑の光線を発射した」

ホーリーの言葉に、この世界に来る前のふしぎな光景を思い出して全員がうなづく。あれから二十年近い歳月が流れた。リンメイがミトに埴輪はにわの鳥の目のあたりを指差す。

「この涙のようなもの、分析できないかしら」

ミトが埴輪はにわの鳥を取りあげて緑色の目をにらむ。そして白い紙の上に置くと躊躇ちゅうちよすることなく電磁ナイフで目を削りだす。

「艦内工場へ行こう」

ミトが緑色の粉を包んだ白い紙を大事そうに持つと、四人を先導して艦内工場へ向かう。

工場ではアンドロイドが忙しそうに働いている。ミトが工場長のアンドロイドを捕まえて事情を告げると分析装置のあるところへ案内させる。

工場長が分析装置から金属製の円筒形の容器を取りだし、そのふたを開けてミトの前に差し出す。ミトは白い紙を慎重に開くと容器の中に緑の粉をていねいに最後の一粒まで入れる。工場長が嚴重にふたを閉めると分析装置に容器を入れる。

ブーンという音がするとすぐに分析結果がモニターに映しだされる。それを見たリンメイの

顔のシワが細くなり、若々しい口調で言葉を発する。

「これは……」

サーチとリンメイ以外の者にはモニターに映しだされた数字や記号の意味を理解できない。

「結果は？」

ミトがきびしい口調でリンメイにたずねる。

「一言では説明できませんし、確信があるわけではありませんが」

リンメイが言葉を切る。

「推測でいい」

「有機物です」

サーチもモニターから視線をミトに移してうなづく。ほかの者は声が出ないほど驚く。

「はにわ埴輪も土偶も収集したときに分析したらすべて無機物だったのに」

リンメイの言葉にホーリーがカン高い声をあげて驚くが言葉にはならない。逆にサーチが低い声でリンメイにたずねる。

「私にはこれ以上のことがわからない。リンメイ、何か心当たりでもあるの？」

「生体内生命永遠保持手術をしていたときに……」

リンメイが何かを思い出そうと目を固く閉じる。

「ひとつだけコントロールできない成長ホルモンを胎児から発見したの。人間には存在しない

ホルモンだったわ。いいえ、ホルモンかどうかは……」

リンメイの目がわずかに開く。

「勘違いかもしれないけど、あのホルモンのような成分と同じ組成だわ！この緑の粉は」

リンメイが自分の言葉に確信を持つ。生体内生命永遠保持手術をしていたとき、胎児のある細胞からの分泌物を何度も分析装置にかけたことを思い出す。

ミトはリンメイが持つ埴輪はにわの鳥を手にしてじつと見つめる。何の変哲もない土でできた埴輪はにわにしか見えない。ミトが何かを言おうとする。ホーリー、サーチ、住職、リンメイには察しがついている。

「明日は瞬示と真美の二十二歳の誕生日だ」

うなずきながら、五人は埴輪はにわの鳥の異変が何か重大な事件が起こる前兆に違いないと確信する。

「遮光器土偶にも変化がないかどうか、リンメイの部屋に行って確認する必要がある」

ミトの言葉にすぐさま住職が反応する。

「わしとリンメイに確かめに行けと言うのじゃな」

ミトが住職とリンメイに軽く頭を下げる。

「そのとおりです。遮光器土偶に異常があるかないか、確認してください」

住職は工場室の出入口に向かうのではなく、ミトの方に歩みよる。

「そろそろ二天社長や一太郎に我々の目的を話した方がいいのではなからうか」

ミトが視線をあげて住職の目を見つめると言葉を反すうする。

「今が話しておくべき時期なのだろうか」

「もう少し時間をおいた方がいいのではと、考えておるのじゃろ」

「彼らの混乱がどの程度になるのか読めない」

「混乱の程度の問題ではなからうが」

ミトが住職の言葉にうなずいて両手を広げる。住職も同じように両手を広げて続ける。

「公開内容の程度の問題じゃ」

住職が広げたミトの片手を握って、ミトの胸のところまで押し戻す。

「その程度でいいのじゃ」

ホーリーには住職の言っている「程度」の範囲がよくわからないが、そのことをたずねるのではなく住職に告げる。

「一太郎はもう一年ほど前にジャストウエーブ社を退職しています」

「そうじゃったな」

ミト、ホーリー、サーチが住職とリンメイを先頭にまわりを気にしながらジャストウエーブ社内のリンメイの研究室に入る。すぐさま陳列ケースから遮光器土偶を取りだして目視する。

特に目のあたりを丹念に調べる。しかし、別に変わったところはない。ため息が部屋に流れる。そのときドアをノックする音がして机のインターホンのスピーカーから声がする。

「開けてください」

リンメイがインターホンに手をかける。

「どうしたのですか」

「見かけない者がこの部屋に入ったようです」

警備員の声だ。

「セキュリティシステムには引つかかっているのですが、見かけない者三人がこちらに侵入したらしいのです」

リンメイがミトの表情を伺ったあとドアのロックを外すスイッチを押す。住職がドアを開けるとふたりの警備員が立っている。

「重大な話があるのじゃ。二天社長をここに呼んではくれまいか」

住職がドア越しに応える。

「侵入者は？」

警備員が住職の肩ごしに部屋の中をのぞく。若いミトの姿がチラッと見える。

「頼む。このとおりじゃ」

深々と頭を下げた住職のどこに力があるのかわからないほど力強く警備員を押しだしてドア

を閉める。直後に二天から無言通信が住職に入る。警備員がすぐに無言通信で二天に連絡を取ったようだ。

「侵入者は誰ですか」

ミトが住職に代わって二天に無言通信を送る。

「ミトです。侵入者はホーリーとサーチと私だ」

「えっ！どういうことですか？すぐ行きます」

しばらくするとインターホンから声がもれる。

「二天です」

ドアが開くと二天が部屋に入る。ミト、ホーリーとサーチが二天を迎え入れる。

「これは！悪い冗談はやめてください」

「だますつもりはなかった。許してくれ」

ミトがていねいに頭を下げるとホーリーやサーチはもちろん住職とリンメイも頭を下げる。

二天は若くて初々しいサーチの美貌にうっとりとする。

「狭いところですが」と言ってリンメイが一瞬の恥じらいを見せる。ジャストウエーブ社から間借りしているのに、二天に対しての非礼に気付いたからだ。そしてリンメイが折りたたみの椅子いすを二天に勧める。

「まず、なぜ我々が若い姿になっているか、いや、リンメイと住職は別ですが」

ミトが切りだす。ミトの説明に五十歳そこそこの二天は子供から言い訳を聞いているような錯覚を覚えるが、次第に納得も疑問も起こらないままじつと聞いている。

第三十五章
誕生日

これまでの主な事件

西暦2030年 無言通信システム完成

摩周村診療所事件（永久0255年からミトたちが摩周村に到着）

ジャストウエーブ大阪支社事件

硫黄島事件

西暦2031年 幼い瞬示と真美をホーリーとサーチが発見

西暦2048年 11月11日

瞬示と真美が地球に帰還

もう一組の瞬示と真美の二十二歳の誕生日

【時】西暦2048年11月11日

【空】宇宙戦艦 北海道（民宿、摩周湖） 壮大寺

【人】ミト ホーリー サーチ 住職 リンメイ ミブ

瞬示 真美 一太郎 花子

瞬示と真美は民宿の近くで川の形をした緑の時間島と同じ色に身体を染めて一太郎と花子の長い思い出話（第二十九章（前章））を聞いていた。それはまるで千夜一夜物語のようで、ミトが、ホーリーが、サーチが、住職が、そしてリンメイが生命永遠保持手術のことや遮光器土偶のことを二天に説明する話が最後だった。それは一太郎がすでにジャストウエーブ社を退職したあとで二天から聞いた話だった。

ふたりのまわりから泡がいくつも生まれては時間島の表面にたどり着くと音もなく消える。それはふたりのため息のようにも見える。

【ぼくらよりずいぶん前にホーリーたちがこの世界に来ている】

【花子と一太郎が無言通信を発明したなんて】

ふたりは意外と冷静に一太郎と花子の話を受けとめていた。

【心の中をのぞかなくても簡単に物語が聞けてしまった】

これまで聞いた話は瞬示と真美が一太郎と花子の心の中から引きだしたものだだったが、ふたりはそうは思っていない。

【サーチたちに会いに行く？】

瞬示が間をおく。

【マミ、時間島は何を考えているんだろうか】

【わからないわ。瞬ちゃんにはわかるの】

【ぜんぜん】

真美ががっかりすると真美のまわりで緑の液体のようなものが少し揺れる。

【時間島はまったく動かないなあ】

すぐに揺れが止まる。

【あっ！また無言通信が聞こえるわ】

【一太郎や花子のものじゃない。ミトだ】

【瞬ちゃん、何かおかしいと思わない】

【思うよ】

【時間島ね】

【そう、時間島だ】

【時間島がこの世界の数十年間の出来事を一太郎や花子や、そして今度はミトの信号に見せかけてぼくらに送っているんだ】

【わたしもそう思うわ】

ミトの無言通信のかけらを取りこむと、ふたりはミトの心の中に侵入する。

十七年間もいたジャストウエーブ社の上空から宇宙戦艦が離脱する。移り気の早い世間から

はすでにジャストウエーブ社や宇宙戦艦のことが記憶の片隅に追いやられていたが、再び世界中の注目を浴びる。

ジャストウエーブ社は急成長して世界株式市場に上場されるほどの大きな会社になったが、各国に設立された現地法人のシンボル会社に過ぎない。むしろ中国ジャストウエーブ社の方が規模からいって数十倍も大きい。

この日のちょうど一年前に一太郎と花子が退社して花子の実家の民宿で余生を送っている。社長を二天に譲った小田は世界中で無言通信のモラル向上のためのボランティア活動が続いている。ミブは大僧正が謎の失踪しっそうをしたあと、やむを得ず壮大寺の大僧正となった。そして前大僧正ほどではないが、ミトたちの求めに応じてあらゆる情報を提供する。

九十歳になった住職はおとえることなく、そして生命永遠保持手術を欲することもなく、七十五歳になったリンメイとともにジャストウエーブ社から壮大寺に居を移していた。

今日二十二歳の誕生日を迎えるこの世界の瞬示と真美を監視し続ける壮大寺の僧侶からミブへ報告をミトがその都度無言通信で確認する。

「まったく、あのふたりに変化はありません」

「発進！」

ミトは、ジャストウエーブ社を護衛するという役割が事実上なくなったこと、この世界の地球の未来にこれ以上の介入は避けなければならないことを理由に宇宙戦艦を月に向かわせる。

もちろん、本当の目的は月からこの世界の地球を含む宇宙に何らかの異変が現れるのかどうかを見極めるためだ。

宇宙戦艦は北海道上空から瞬間的に月に移動する。すぐさま地球連邦政府に対して月に到着したことを伝えると、全世界がその恐るべき科学力に改めて驚く。

「何も起こらない」

ミトはがっかりする。そのときアンドロイドの鋭い声がする。

「未確認物体を発見！二二時の方向です」

メイン浮遊透過スクリーンに猛烈なスピードで地球に向かう緑の光球が映ると、ミトの目が輝く。

「時間島か？」

ミトが見たことのある時間島は黄色でヒモのように長かったが、今、目の前に見えるものはぼろ丸い形で色は緑だ。すぐさまホーリーに無言通信を送る。

「艦橋に来てくれ！いや……」

そのとき、時空間レーダー担当のアンドロイドの報告がミトの頭をつらぬく。

「日本に向かって移動しています。時空間にゆがみはありません」

このころになるとアンドロイドの言葉は人間と変わらないほどに進化していた。アンドロイ

ドは一太郎の言語処理プログラムを完全に使いこなしている。

「予想到達点は？」

ホーリーとサーチが艦橋に現れる。

「どうした！ミト」

「ホーリー、緑色の物体が地球に近づいてくる。時空間移動装置で待機してくれ！」

ミトがホーリーとサーチに強い口調で命令する。ふたりは時空間移動装置の格納室に向かいながら重大なことが起こりつつあると興奮する。

「日本に向かって発進！」

宇宙戦艦が一瞬大きく揺れる。ミトの命令を受けたRv26が付け加える。その言葉は人間の直感に近い。

「巡航速度まで加速。最短距離で日本の上空へ移動せよ」

ミトは心の高まりを覚える。

「やはり、何かが起こる！」

時空間移動装置の格納室に到着したホーリーとサーチは壁のモニターの前で立ち止まる。そのまま丸い緑色の物体の映像に釘付けになる。しばらくしてホーリーがそのモニター下のケースを見て驚く。

「どうしたの」

サーチがケースを開けるホーリーをふしぎそうに見つめる。ケースの中には反^そりのない直刀が六振り納められている。

「ずいぶん前に俺が開発した電磁レーザー忍剣だ。ここに置いていたことをすっかり忘れていた」

「電磁レーザー忍剣？」

サーチがつぶやく。そのとき、艦橋のサブ浮遊透過スクリーンでふたりがまだ格納室にいるのに気付いたミトが強烈な無言通信をホーリーに送る。

「ホーリー！何をしている！時空間移動装置の中で待機しろ」

「わかった。五郎とお松たちを連れて行く」

ホーリーとサーチがすぐさま五郎とお松を別々に無言通信で呼びだす。サーチが五郎にケンタとともに、そしてホーリーがお松にほかの忍者や兵士とともに時空間移動装置の格納室に来るよう指示する。ホーリーはケースから六振りの電磁レーザー忍剣を取りだして両脇に抱えこむ。

宇宙戦艦の前を緑に輝く球体が通過するが、その速度はかなり落ちてゐる。その中に瞬示と真美がいることなどミトにはもちろん誰にもわかるはずもない。艦橋のメイン浮遊透過スクリーンが地上をズームアップする。

「大阪城」

画面上方に大阪城が見える。しかし、大阪城が予想到達点ではないらしくスクリーンからこぼれるように消える。すぐに手前の方から御陵の全景が現れる。その御陵の上で赤い点滅信号が輝く。

「あの物体の到達地点の座標を時空間移動装置に！」

「まだ空間移動の準備ができていません」

アンドロイドの報告を無視してミトはホーリーに無言通信を送る。

「早くしろ！時間島らしき物体の到達点がわかったぞ」

「時間島！」

四基の時空間移動装置が回転を始める。

緑の時間島から赤く輝く塊かたまりが分離すると時間島はそのまま御陵に衝突する。しかし、ミトは分離した赤い塊に気付くことなく、時間島が御陵に衝突したというよりは吸いこまれるように消えたという感覚を抱く。

「時間島らしきものが御陵に到達した」

ミトは状況を正確にホーリーに伝えようと衝突という言葉を避ける。ホーリーはそのミトのニュアンスから、手動で空間移動地点を御陵のすぐ真上に修正する。

格納室から時空間移動装置が消えて御陵の真上に現れるが、そのまま突然ホーリーたちの時空間移動装置がすべて御陵上空から消滅する。

「時空間移動装置が消えました！」

すぐさまミトが無言通信を試みるが返事はない。

「ホーリー！どうした！返事をしろ」

続けてサーチにも無言通信を送る。アンドロイドが詳しい報告を追加する。

「時空間移動装置が時間島らしき物体の到達地点上空に移動しましたが、すぐ消滅しました」

「移動先を探索しろ……」

ミトは言葉を切るとつぶやく。

「ホーリーはいったい誰を連れて行ったんだ？」

四基といえば時空間移動装置の定員からして二十人だ。ミトは佐助にも無言通信を送りながらアンドロイドに搭乗者を調べさせる。しかし、佐助はもちろん、ほかの忍者からも返信はない。ミトの目の前のモニターに搭乗者名簿が映される。

「ホーリー、サーチ、五郎、ケンタ、佐助、お松……」

ミトは途中で読みあげるのをやめる。忍者も兵士も全員ホーリーたちと御陵に向かったことがわかってモニターから視線を外す。

「人間でこの艦に残っているのは私ひとりか」

ミトは第二陣の時空間移動装置を御陵に送りこむことを断念する。

「あのふたりに変化はないのか」

ミトはミブへの報告を求めるといふより、独り言のような無言通信を発する。

「ありません」

ミブから素っ気ない無言通信が返ってくる。

――変化があつたのはこちらの方だ

ミトが本当の独り言を発すると肩を落とす。

――判断ミスだ。必ずあのふたりに変化が現れると思ひこんだのが誤りだった。二十年近くも待ち続けてあせつてしまった。いや、もうろくしたのか」

ミトは艦橋の強化ガラスの窓に映る自分の姿を見つめる。

「住職、知恵を貸してください」

返事が来るまでの間、アンドロイドに御陵から目を離さないように命令する。

「どうしたのじゃ」

ミトはRv26に艦長の権限を委譲すると、事細かく指示してから時空間移動装置に乗りこむ。住職はリンメイとともにミトの時空間移動装置が到着するはずの庫裏の前で待つ。目の前に時空間移動装置が現れるとすぐに回転が停止してミトひとりが降りてくる。住職はミトの肩をポンとたたいて庫裏に向かう。中ではミブ、ジャストウエーブ社に差し向けられた時空間移動装置で空間移動してきた二天が出迎える。

「わしひとりの知恵では足らんと思って呼んだのじゃ」

「先に皆さんにお詫びを申し上げなくてはならない」

「瞬示と真美の件じゃろ」

「住職はお見通しなのですね」

ミトが苦笑する。

「いや。ところで何が起こったのじゃ。ホーリーやサーチは？」

「みんな、消えました」

「なんと！」

ミトがつい先ほどまでの出来事を説明する。

「緊急ニュースを見てまさしく時間島が現れたと驚いておったところじゃ」

リンメイがやさしくミトに声をかける。

「ところが、ミブによるとあのふたりに何の変化もないの」

ミブがリンメイの言葉に小さくうなずく。

「予想が外れたということじゃな」

ミトはうなずきながらホーリーたちのことを心配する。

「あのふたりが二十二歳になったら、何か事件が起きると考えてしまった」

「勝手に思いこんでしまったのじゃ」

住職とリンメイが同時にホーリーとサーチの一人娘のことを気にする。

「あれから、埴輪はにわの鳥や遮光器土偶に変化は？」

「ありませんわ」

「あのとき埴輪はにわの鳥は何らかの行動を起こそうとしたが、何らかの理由で中止した。それと今の時間島の到来とは何か関係があるのでしょいか」

ミトが住職に乞うようにたずねる。

「わからん」

住職はできるだけやわらかく答えようとしたが、出た言葉は素っ気なかった。会話が途切れると、ミトは目を閉じて行き場のない考えをめぐらす。

リンメイがテレビをつける。御陵に突っこんだ物体が単なる水のような物質であると説明されている。ボーツと緑に輝く御陵の遠景が映っていて周辺は立入禁止になっている。放射能が検出されたとか様々な乱れた情報が流されているが、画面は一向に変わらない。

ミトは宇宙戦艦に戻るが、それで降何の変化もないし、ホーリーたちの消息も不明のままだ。意気消沈したミトは疲れてときどきまどろむが、そのとき誰かが自分の心の中をのぞきこんでいるような夢を見る。

瞬示がノブを回すと簡単に民宿の玄関のドアが開く。

「お邪魔します」

返事はない。奥の食堂の方で人気がある。真美が大きな声をあげる。

「お邪魔します」

ガタガタという音が聞こえる。ふたりは食堂に向かって廊下を歩く。食堂の入口には老夫婦が立っている。ふたりは背の高い老人とふつくらとした老婆のすぐそばまで近づく。

「瞬示」

「真美」

「無事だったか？ご両親は？」

瞬示と真美がそろって首を傾げる。

「御陵が大変なことになったわね」

花子がキョトンとするふたりにやさしく声をかける。

「しばらく会わないうちに立派になったな」

「そう言えばもう十年も会っていないのかしら」

「よく似ているな。そっくりだ。ちょっと待てよ。なぜ、ここに？」

一太郎と花子が瞬示と真美を顔から足の先までなめるように見つめる。

【もう一組のぼくらと勘違いしている】

「花子！」

「一太郎！」

老夫婦がふたりの呼び声にうろたえる。昔、瞬示がそして真美が一太郎と花子を呼んだ声そのものがよみがえる。花子はくずれるように一太郎にもたれかかる。瞬示と真美は一瞬、生命永遠保持手術の機能が停止して老人となったカーンの姿を思い出す。一太郎も花子もふたりを見つめたまま動かない。やつとの思いで一太郎が声を出す。

「本物の瞬示か？」

「本物？」

瞬示が聞きかえす。

「学生時代、摩周湖へ旅行したことを覚えているか？」

一太郎の目が年とし甲斐がいもなく輝く。

「もちろん！あれから、どうなったんだ」

「それはこちらが聞きたいことだ。あのとき、死んだんじやなかったのか？」

「え！」

話がかみ合わない。

「花子の方が死んだと思ってたわ」

花子が一太郎にもたれたまま首を小さく何度も横に振る。

民宿の食堂で今にもつぶれそうなあのなつかしいテーブルで四人が向かいあう。お互いたず

ねたいことがいっぱいあるのに、何から聞けばいいのかわからないほど混乱する。

少し落ち着いたらしく花子がお茶をふるまう。そのお茶を一太郎が震える手で口に少し含むとしゃべりはじめる。今までそつなくお茶をふるまっていた花子の手も震えだして、茶碗ちやわんを口元まで持つていくこともできない。瞬示と真美はお茶に手をつけることもなく黙って一太郎の話を聞く。それはあのときの摩周湖での話だった。

展望台にいる四人は身近な自分たち以外、霧で何も見えない。視点の定まらない力の抜けた目で空間をながめる。濃霧の中で瞬示が真っ先に異常を感じる。

「揺れている」

「ほんと！」

真美も花子もほぼ同時に応える。

「地震だ！」

一太郎が展望台の手すりをつかむ。

バケツ一杯の水が振動でこぼれるように摩周湖から大量の霧が流れだす。もしこれが霧でなく水だったら、四人は間違いないのみこまれて溺おぼれてしまうほどの速さで流れる。四人は霧の中で重々しい響きを感じる。やがて足元から左右に揺れる震動がはつきりと伝わってくる。

「戻ろう」

瞬示が叫ぶとさらに大きな揺れが四人を襲う。一太郎は手すりをつかんでいた片手に満身の力をこめるともう一方の手で浮きあがった花子の身体を抱きよせる。

「あー」

瞬示と真美は霧で色が消えたスローモーションビデオのように地上から一メートルほど浮きあがると、手すりを超えて摩周湖に落ちていく。

「瞬示！」

一太郎が絶望的な悲鳴をあげるが、花子の身体を長い腕の中に引きいれて両手でしっかりと手すりを握る。花子も一太郎の腕の中から片腕を伸ばして何とか手すりをつかむ。その手すりも大きく揺れている。手すりが地面から抜けたら、ふたりも瞬示と真美のように摩周湖に落ちるのかもしれない。

いつの間にか振動がおさまり、ふしぎなことに霧も晴れる。一太郎と花子はかなり長い間振動が続いたような錯覚におちいる。しかし、それは一瞬の出来事だった。いつの間にか陽が一太郎と花子のまわりを明るく照らしている。

「真美」

花子がへなへなと地面に座りこむ。一太郎は手すりを持ったまま足元の摩周湖をのぞきもうとするがすぐにあきらめる。ズボンの尻のポケットから携帯電話を取りだしてボタンを押すが途中でやめる。

「圏外か」

花子が一太郎の手を握りしめて立ちあがる。ふたりはくずれた階段を用心深く降りる。振り返って展望台を見たい衝動にかられるが、そんな余裕はない。やっとの思いで駐車場にたどり着く。売店が倒壊して一太郎と瞬示が乗ってきた白い小型のレンタカーが横転している。花子の赤い車は止めてあったところからずいぶん離れたところに何事もなかったように駐車している。無数の亀裂をまたぎながら何とか赤い車にたどり着く。

「急ごう！日が暮れる」

「私が運転するわ」

気丈夫にも花子は運転席のドアを開けてエンジンをかける。一太郎が首を横に振って花子を見つめる。

「この辺の道路は私の方がよく知っているわ」

うなずいてから一太郎が助手席のドアにまわる。花子の車は四輪駆動車だが、ともに走行できる保証はない。これから先の道はとも道路と呼べるものではない。

「まるで浦島太郎だ」

瞬示が天井の裸電球を見つめる。花子がゆっくり立ちあがって壁のスイッチを押すとお互いのこわばった顔が浮かびあがる。花子がうつむいたまま炊事場に入るとポットを持つてくる。

「お茶、飲まないの？」

「わたしはいい」

花子がふしぎそうに真美と瞬示を見つめてから、空っぽになった一太郎と自分の茶碗ちやわんに茶こしを通して湯を注ぐ。

あるときにお互い信じられない、しかも異なる事件が起こったが、まさしく別々の現実が合流して目の前で新しい現実となる。

「展望台で地震が起こったときに、それぞれの世界が別々に引き裂かれてしまったのか」
湯気が出ている一太郎の茶碗ちやわんを瞬示と真美が見つめる。

一太郎の世界では、瞬示と真美は地震の大きな揺れにバランスを崩して摩周湖の展望台から真つ逆さまに転落したことになる。その後の捜索でもふたりの死体は発見されなかった。
花子が一太郎に替わって話を続ける。

一太郎と花子は摩周村に向かうが、道路に亀裂きれつが入っていてなかなか先へ進めなかった。日が暮れる少し前に何とか摩周湖に一番近い民家にたどり着いたが、その民家は壊滅かいめつ状態だった。一太郎が再び携帯電話の電源を入れるが、地震の混乱で回線がパンクしたのかどこへも連絡は取れなかった。

仕方なく、ふたりは村人が避難する摩周村診療所にたどり着くと、駐車場に車を止めて余震が続く一夜を車内で明かすことになった。その診療所が親友の山内の父親の診療所であるとは、

そしてそこで小田に手術をすることになろうとは、そのときの一太郎には知るよしもなかった。ふたりはエンジンを切らずに暖を取りながらうつらうつらと夜を明かして、日の出とともに花子の民宿へ向かった。

瞬示と真美がときどきうなずきながら花子の話を聞く。

その後鉄道が復旧すると、一太郎は花子の両親からいくらかのお金を借りて花子に最寄りの駅まで送ってもらって札幌に向かった。一太郎は再び学生生活に戻り、同じく再び大阪で学生生活に戻った花子とは、お互いの消息と瞬示と真美の不慮の死を悼む内容の電子メールをときどき交わす程度の付き合いをただで、そのうちメールのやりとりもなくなってしまった。悲しい出来事から逃避したかったからだ。

「それから僕は大学を卒業して札幌のジャストウエーブ社という元気のいいコンピュータソフト開発会社に就職した。ところがなんとその会社の入社式で妻と再会したんだ」

「本当にビックリしましたわ」

瞬示が手をあげて花子の会話を制する。一太郎は医学部の学生だったのに、なぜコンピュータソフトの開発会社に就職したのか釈然としなかったからだ。

「一太郎は脳外科医になるんだと言ってたじゃないか」

「いや、脳外科とまったく関係がないわけじゃない。僕は脳に損傷を受けてしゃべることができない人が意思疎通ができるような研究をしたかったんだ」

瞬示は一太郎の言葉をそのまま受け入れることができないと首を傾げる。一太郎が花子をやさしく見つめなおしてから言葉を続ける。

「高度な次世代ワープロソフトの開発のために花子と同じ研究室で仕事をするようになった」
「本当にビックリしましたわ」

花子がいつもの言葉を繰り返す。それから一太郎と花子がたどった人生についてはすでに瞬示や真美にはわかっている。瞬示が再び花子の言葉をさえぎって重要な質問をする。

「もうひとりのぼくらは何者なんだ」

「もちろん瞬示と真美の両親の子供だ」

「いつ生まれたの」

真美が食いつくようにたずねる。

「ご両親は真美、瞬示の死をひどく悲しんでいたわ。あれはいつでしたか、あなた」

「確か、無言通信システムの開発計画をたてたころだったから2026年の秋だ」

「そうだったわ。確か真美と瞬示が死んだとされた日のちょうど一五年後の同じ日の同じ時刻にそれぞれの両親から生まれたと聞いたわ」

「そうだ！その日は亡くなった瞬示たちの誕生日だとも言ってたな」

瞬示と真美が驚く。摩周湖である事件に遭遇した日は自分たちの誕生日だった。

「あれは確か2011年、一五年後にぼくらの両親は出産した」

「かなりの歳よ！」

真美が瞬示の言葉にはげしく反応する。

「ぼくらの両親は四人とも同級生だった。ぼくらは確か両親が二十三歳のときの子だった」

一太郎と花子はさほど驚かない。

「摩周湖にいたとき、両親は四十五歳ということになる。十五年足すと、えーと……」

「六十歳で出産！」

真美が驚いて言葉を止める。

「すごい高齢出産じゃないか」

瞬示の驚く声に一太郎が子供に説明するように口を開ける。

「医療の進歩やそのほかいろいろな要因で、今や七十歳での出産例もある」

「そう言えば、いつか六十歳を超えて出産したというニュースを聞いたこと、あるわ」

真美が納得する。

「その生まれてきた子供が死んだ瞬示と真美の生き返りのようだとご両親がおっしゃっていたのを覚えてるわ」

「名前は？」

「もちろん、真美、瞬示と名付けられたわ」

「ときどき、ご両親から写真や動画の添付されたメールが送られてきたな」

一 太郎が席を立つと棚から薄っぺらいノートパソコンを手にする。

「メールでのお付きあいは年賀状代わり程度でしたけれど、一度お会いしなければと」

ノートパソコンが立ちあがると一太郎がキーボードをなでる。

「これだ。今年の正月に送られてきたメールの添付動画だ」

この世界の瞬示と真美が、それぞれの家の前で撮影された短い動画がノートパソコンのモニターに映しだされる。瞬示と真美が一太郎の後ろに立つ。

「そっくりだわ！」

「マミそのものだ」

「さあ、今度は瞬示の話を聞こう」

一太郎の言葉にふたりは顔を見合す。

「驚かないでね。途方もなくふしぎな話だから」

念を押すように真美が言葉を開くと瞬示が続ける。

「信じてもらえないかもしれない」

まず摩周湖での出来事から話すことにする。瞬示と真美の長い話が始まる。いつの間にか一太郎と花子は瞬示と真美の話が確かにとてつもなくふしぎなものだと戸惑う。平然と聞ける話ではないが様々な苦難を経験したふたりは終始驚きながらも何とかついていく。それどころか一太郎の目がときどき子供のように輝く。

民宿の外から波の音が聞こえてくる。少し荒れているようだ。さすがに花子の目がうつろになる。しかし、一太郎の目から眠気は感じられない。

「この辺にしておこうか」

「そうだな」

一太郎が花子の肩に軽く手をのせる。こつくりこつくりとしていた花子が反射的にすーっと立ちあがる。

「布団の用意をしますわ」

「花子、いいわ」

「えっ」

「わたしたち眠ることはないの。普通の人間のようにね」

「少し散歩してくる」

瞬示が立ちあがると一太郎も立ちあがる。

「散歩？外は真っ暗だぞ」

「ぼくらには関係ない。暗闇でも物は見えるんだ」

真美も立ちあがって柔和な表情を花子に向ける。

「続きは明日^{あした}ね」

「このまま消えてしまうということはないだろうな」

「太郎が不安そうにふたりを見つめる。」

「大丈夫！おやすみ」

瞬示が太郎と花子を安心させるために精一杯の笑顔を見せる。そして真美とともに勝手口のドアに立つと足元をスニーカーが包む。そのふたりの背中に太郎が声をかける。

「この辺は泥棒がいないからドアに鍵はない。いつでもどこからでも入ってきてくれ」
「はい」

真美の返事が花子の耳に心地よく伝わる。

「この世界では、ぼくらは死んだことになっている」

「もう一組のわたしたちは、わたしたちじゃない」

「偶然なのか。まったく同じぼくらが生まれている」

ふたりは今すぐ両親に会って自分たちが生きていることを知らせなくてはという思いを持つ。

「でも、これまでのこと、どう説明するの」

瞬示がうなずきながら、指を一つひとつ折っていく。

「お父さんもお母さんも八十二歳だ。とても理解してもらえないかもしれない」

「わたしたち、生きてますって、目の前に現れたらショックで倒れるかもしれないわ」

「でも、ぼくらの両親、ふしぎな親だと思わないかい？」

「会わない方がいいのかしら」

急にふたりの気持ちがしぼむ。

「花子も一太郎も生きていてくれてよかったわ」

話をそらすつもりではなく、真美が素直な言葉を瞬示に向ける。

「一太郎も花子も意外と冷静だったなあ」

「本物かって言ってたわね」

ふたりはフーッと息をはいてから胸いっぱい空気を吸いこむとまわりをゆつくりと一巡する。

「何も変わっていない」

真つ暗闇なのに、ふたりには苦もなく民宿の周辺の様子がよくわかる。

「ここで信じられないような様々な事件が起きたわ」

ふたりはゆつくりと海辺の崖^{がけ}に向かう

「ほんの少し前の出来事に思えるんだけどなあ」

「そうよ。ずいぶん前のような気がするけれど、ほんの一週間か十日ぐらい前のことだわ」

「でも、ここでは三十七、八年もたっている！アインシュタインの相対性理論ってよく知らないけれど、宇宙を旅して帰ってくると地球上の時間が宇宙旅行した人の時間の何倍も進んでいるという」

すぐに真美が拒絶反応を起こす。

「でも、あの時空間移動装置が格納されていた穴はない」

徐々に空が明るくなる崖がけの下の海辺をふたりが見つめる。振り返ると民宿がさびしそうに建っている。よく確かめずにここへやって来たが、瞬示や真美の家も老朽化していた。鉄道は高架になっていた。小学校は建てなおされていた。しかし、自動車はエアカーではなかったし、電信柱も昔のままだった。一方喫茶店はなくなっていたし、それに御陵は消滅して池になっていた。

「テレビ！」

ふたりは民宿の食堂に戻って液晶テレビの前に立つ。リモコンを探す真美を尻目に瞬示が直接電源を入れる。ちょうど朝一番のニュースの映像が流れる。

「超大型時空間移動船！？」

瞬示と真美が身動きひとつせずにテレビを見つめる。

「大砲が御陵を狙ねらっているぞ」

「これ、ニュースなの」

「朝からSF映画を放映するテレビ局なんて聞いたことがない。わあ、レーザー光線が！」
瞬示が叫んだあと画面が変わって男性のニュースキャスターの声が流れる。

「このあと宇宙戦艦が消えるのですが、別のカメラがふしぎな映像を捕らえています。これは

御陵近くのビルの屋上に備えられたビデオカメラが偶然に撮影したものです」

空の一角から緑に輝く丸い光の塊かたまりが御陵を目指して突進する。緑の光の塊かたまり、すなわち緑の時間島が御陵にぶつかる手前で赤い光が分離して御陵の上を通過する。これは瞬示と真美が時間島から離れて小学校に向かったことを示している。映像はあまり鮮明ではない。

「瞬ちゃん！緑色よ！時間島が緑色をしている」

真美の言葉に瞬示も驚きながら首をたてに振る。

緑の時間島が御陵におおいかぶさる。御陵は緑の光の塊かたまりに抑えこまれてキラキラ輝く無数の緑のホコリを残して消滅する。ほんの数秒間の出来事だ。霧のようになって舞いあがったホコリが徐々に晴れていく。ここで映像が上空から撮影された鮮明なものに変わる。巨大な鍵穴の形をした緑色の池が画面いっぱいに映しだされる。

「ぼくらが緑の時間島でこの世界に戻ってきたことは間違いない」

「御陵にぶつかる直前にわたしたちは小学校に移動した」

同じ映像が繰り返し幾度も流れたあと男性と女性のニュースキャスターが交互に解説を始める。

「未来人ミトは宇宙戦艦で未来に戻ったのでしょうか」

【未来人？】

【ミト！】

瞬示と真美はニュースキャスターの声をもらさず聞くために会話を信号に変える。

「これをご覧ください」

女性のニュースキャスターがボードを自分の前に置くとカメラがそのボードを画面いっぱいにアップする。

「これはミトたち未来人が地球にやって来たときから今日に至るまでの彼らの行動を年表にまとめたものです」

【西暦2030年にやって来た？】

【ミトたちって、ミトのほかはこの世界へやって来た者がいるということだわ。キャミ？】

【こんな大事件を一太郎も花子も何も言ってくれなかったな】

年表を見て驚くばかりで何も考えることができない。やっと真美が信号を発する。

【誰がミトといっしょにやって来たのかしら】

【宇宙戦艦と言ってた】

【ここは本当にわたしたちの世界なの？】

【あの宇宙戦艦から大砲を取りのぞいたら、キャミやミトが地球を脱出したときの超大型時空間移動船とよく似ている】

しばらくするとふたりは信号を交わすこともやめてニュースキャスターの解説に神経を集中させる。すべてを理解するとふたりは一太郎と花子の心の中をのぞく。ぐっすりと眠っている。

【起きそうにもないな】

【ふたりが目覚めますまで、沼みたいになった摩周湖を調べに行かない？】

【ひよっとしたら摩周湖に何かヒントがあるかもしれない】

瞬示が真美の手を取って摩周湖に瞬間移動する。

摩周湖の周辺がうっすらと明るくなる。わずかに残った湖水の付近はまだ真っ暗だが、ふたりには鮮明に見える。

「あんなに水をたたえていたのに」

変わり果てた摩周湖の上空から、もはや湖と呼ぶにはふさわしくない白濁色の沼を見つめる。

「底はどうなっているんだろう」

「降りてみる？」

真美はそうしたいわけでもないが瞬示に提案する。

「そうだな」

瞬示も気乗りしない返事をする。ふたりが徐々に高度を下げて水面下に沈んでいく。心が痛むほどのやせた水がふたりを包む。

【何も見えない】

白濁した水の中ではさすがにふたりの視力を持ってもぼんやりとしか見えない。やがて

徐々に視界が広がる。底の方は透明度が高く水中にいるような感じがしない。

【あれは何かしら】

瞬示が真美の信号からその方向を見つめる。

【丸い緑色の……まさか大型のマリモじゃ？】

ふたりが沼の底に到着する。

【これは！】

目の前には緑の時空間移動装置が転がっている。

【どうしてこんなところに】

【一、二、三、四……】

真美が数を数えはじめる。七基の時空間移動装置が身を寄せるように沈んでいる。

【中に入るぞ】

瞬示の手をあわてて真美が握る。ふたりは一番近い時空間移動装置内に瞬間移動する。

【うっ！】

なんと時空間移動装置の中は宇宙そのものだ。瞬示も真美も瞬間移動を間違えたのかと錯覚する。ふたりは次々と別の時空間移動装置の中に移動して六基目の時空間移動装置の中にいる。どの時空間移動装置の中にも宇宙が広がっている。しかし、六基の時空間移動装置の中の宇宙はそれぞれまったく異なる宇宙に見える。ある時空間移動装置の中の宇宙には近くに赤い星

が見えるのに、ある時空間移動装置の中ではほとんど星が見えなかったりする。同じ宇宙の異なる場所を示しているのか、それともまったく別の宇宙空間を示しているのか。

ある部屋で南側の窓を開けると山が見え、北側の窓を開けると海が見え、東側の窓を開けると月が見え、西側のドアを開けると夕陽が見える。しかし、それぞれの窓の外の世界が同じものかどうかかわからないということだ。そして窓の外の景色が山や海であれば驚きもしないが、逆に外から窓を通して家の中を見たら、そこに山や海や夕陽や月が見えるようなもので、ふたりはしばらく信号どころか声も出ない。これは時空間移動装置が時空間移動に失敗したときに起こる現象だが、ふたりにそんなことはわからない。

【時空間移動装置の中が宇宙になっている】

【わたし、頭が変になりそう】

まるでエベレストのふもとの山小屋のドアを開けて部屋の中に入ったら富士山のもとに立っているというような感覚を瞬示と真美が共有する。

ふたりはいつの間にか展望台のベンチに腰かけている。東の空がうつすらとピンク色に染まると美しい朝焼けがふたりの顔をピンクに染める。

【摩周湖に時空間移動装置が沈んでいるだけでもふしぎなのに】

【どこから来たんだろう】

【誰が乗っていたのかしら】

【緑色、ホーリーじゃないだろうな】

【いやなこと言わないで】

真美が機嫌をそこねる。

【ホーリーは今どこにいるんだろうか】

【ニュースで聞いた感じでは宇宙戦艦にいるんじゃないのかしら】

【あ、そうだ！まだ、もうひとつ時空間移動装置の中を確認していない】

【もう、いいんじゃない。どうせどこかの宇宙なんでしょ】

【そうだと思うけれど確認しておこう】

真美があきらめて同意するといっしょに七基目の時空間移動装置の中に瞬間移動する。

【わあ！何だ？】

これまでの時空間移動装置の中と違って赤や黄色の華やかな色彩の世界にふたりは包みこまれる。

【ここは……寺の境内じゃないか】

これまでとまったく違う世界にふたりはただ驚くばかりでしばらくの間その光景に釘付けになる。境内は紅葉狩りの人々で賑わっている。

【ここは壮大寺って紅葉で有名な京都のお寺よ。一度来たことがある。間違いないわ】

【どうということなんだ】

【七基目の時空間移動装置の中だけが地球上のしかも京都の寺だなんて……】
真実が腕時計を確認する

【西暦2048年11月11日12時】

【わたしたちが地球に戻ってきた三時間ぐらい前の世界よ】

【どんな風にぼくらが地球に戻ってきたのか確かめることができるぞ！】

【民宿に戻るっていう約束は？】

【一太郎にはいつでも会えるさ】

ふたりは壮大寺の境内の鮮やかな紅葉に誘われて奥の方に向かって歩きます。

第三十六章
関ヶ原

第三十二章から前章（第三十五章）までのあらすじ

硫黄島で日本政府高官との会談が始まったとき謎の潜水空母から戦闘機が飛来してミトたちを追いつめる。そのとき滑走路が盛りあがるとRv26の宇宙戦艦が現れる。

御陵の鳥居の下でお医者さんごっこをしていた幼い瞬示と真美の成長を見届けるために生命永遠保持手術の設備を宇宙戦艦内の工場で製造して手術を受ける。その瞬示と真美の二十二歳の誕生日の前日、埴輪の鳥が涙を流す事件が起こる。

その後宇宙戦艦が地球から離れると瞬示と真美が宇宙から御陵に戻ってくる（第二十八章）。一方、ミトの命令で御陵に向かったホーリーたちの時空間移動装置が消滅する。

時間島の中で瞬示と真美は民宿の食堂にいる一太郎と花子の話を聞いていたが、直接対面して両親が自分たちとそっくりな子供を産んだことを知る。そして変わり果てた摩周湖の湖底で行方不明だった七基の時空間移動装置を発見したあと壮大寺に向かう。

【時】 永久紀元前400年

【空】 関ヶ原

【人】ホーリー サーチ ケンタ 五郎 忍者 明智光秀

ホラガイを吹く音に絡みながら、大地を揺るがす軍団の高揚した武士の声に関ヶ原に響きわたる。

「光秀！覚悟！」

馬に乗った十数人の武将とともに桐の紋を染め抜いた旗を背中に巻きつけた百人ほどの足輕が手薄になった明智光秀の陣地に叫び声をあげながら突進する。そのとき、陣地と十数騎の武将のちょうど中間あたりに突然四基の青い時空間移動装置が回転しながら現れる。

馬がいなくなきながら後足で立つて背を伸ばすと、こらえきれず何人かの武将が落馬する。時空間移動装置の回転が止めると着地する。かろうじて落馬を免れた数人の武将の「ドウドウ」という声が響くだけで、あたりには何とも言えないふしぎな静けさが漂う。

余りにも突然の出来事に光秀やそのまわりを固める武将、足輕、そして攻めこんだ武将もまるで時間が止まったように動かない。ホラガイの音も怒濤どとうのようにうねる大きな声もすべて消える。すべてが凍りついて時間が止まる。

時空間移動装置のドアが跳ねあがると、止まっていた時間が勢いよく流れだすように佐助以下六名の忍者が地上に降り立つ。すでに抜刀した忍者が生き返ったように動きだす馬上の武将

に向かって風のように近づく。ホーリーが制作した電磁レーザー忍剣で忍者が武将の鎧よろいを次々と切りさく。さらに十字手裏剣を投げつけると足軽が顔を押さえながら倒れる。何とか忍者の攻撃をかわした三人の武将が馬にムチを入れて光秀に槍やりを向ける。

半蔵と才蔵が光秀の陣地に急走するが、光秀は応戦するのが手一杯のところまで追いつめられる。そのとき馬上の武将の鎧よろいがはじけ散る。ホーリーとサーチのレーザー銃が命中したのだ。

「どうなっているの！」

サーチが大声を発する。ホーリーも大声をあげる。

「とにかく、忍者に加勢するんだ」

五郎やケンタや兵士がライフルレーザーを手には時空間移動装置から降りる。ホーリーの言葉を受けて光秀を討ち取ろうとする足軽にライフルレーザーを発射する。

「光秀殿」

「安心せい！」

光秀の方から忍者に近づく。

「おまえは！四貫目！生きておったのか」

「このとおり」

「あの者たちは？」

「仲間でござりまする」

やっど桔梗ききようの紋を染め抜いた旗を持った光秀の軍勢が大声をあげながら戻ってくる。

「殿は無事だ！」

「秀吉め、やってくれるわ」

光秀はペツとタンを吐きすてる。そのタンには鮮血が混じっている。

「深追いしすぎました。申し訳ござりません」

戻ってきた騎乗の武士の中で一番豪華な甲かっちゅう冑を身にまとった大男が馬から飛びおりと片ひざをついて光秀の前でひれふしてから横目でホーリーたちをにらむ。

「小奴らは？」

光秀はこの大男が忍者のことをたずねているものと思いこみ「四貫目よ」と応える。

「四貫目！」

驚きの声を大男があげるが、彼がにらみつけているのは当然四貫目ではない。その視線に光秀が気付いて告げる。

「四貫目の仲間じゃ」

「仲間？忍びの者にしては奇妙な服を着ておるぞ」

引き返してくるときに忍者はもちろんのことホーリーたちの戦いぶりをつぶさに見ていたこの大男はそれ以上のことを口にせず、黙ってホーリーと時空間移動装置を交互に見やる。

光秀の脳裏に大坂城に現れた瞬示と真美の姿が浮かぶと無言のままホーリーとサーチを見つめる。大男が沈黙を破る。

「どうしまする」

「まずは体制を整えよ」

光秀が我に返り、何とか平常心を取りつくろう。

「おう」

大男はくると光秀に背を向けると続々と集結する五百騎ほどの騎馬隊にこれ以上の声が出ないほどの大声をあげる。

「陣を組め！油断するな！」

佐助、いや四貫目が光秀の質問に応じる。一方、ホーリーが才蔵、半蔵に質問を浴びせる。

「ここは関ヶ原というところ」

「我が以前大風に乗って大坂城上空の時間島に吸いこまれたところ、この関ヶ原での合戦の準備をしておりました」

才蔵の言葉にホーリーとサーチは瞬示や真美から聞いた話を思い出す。時間島で永久紀元前400年の大坂城に時空間移動したときの話だ。

「御陵の時間島に接近したとたん、ここへはじき飛ばされたということなのかしら」

「少なくとも映画の撮影現場でないことだけは確かだ」

「私たちの世界ではこの関ヶ原の合戦で明智軍が豊臣軍を打ち破ることになっているわ」

「確か、瞬示は自分たちの世界とぜんぜん違うと言ってたな」

「あのふたりの世界では豊臣軍が勝ったのかしら」

「わからない。もつとほかの展開になったのかもしれない」

「どうするの、ホーリー」

「どうするって、佐助の味方になるほかないだろう」

ホーリーとサーチの会話に五郎が加わる。

「ということは当然、光秀が勝利することになる」

「ということは、ここは私たちの世界の永久紀元前400年ということになるのね」

「もし光秀が敗れると、ここは瞬示たちの世界になってしまうのか」

ホーリーが話を打ち切って、才蔵の持つ電磁レーザー忍剣を取りあげて束のあたりを指差しながら説明を始めると、半蔵は自分の忍剣で操作のひとつひとつを確認する。光秀が四貫目とともにそんなホーリーのところにゆっくり近づく。

「頼もしい助っ人だ」

光秀がうれしそうにホーリーを見つめると急に余裕と自信を持つ。

——確かに御陵の神が守ってくれた

光秀が心の中でつぶやくとまわりに響くような声をあげる。

「この方々に無礼はならんぞ！」

そのときホーリーの近くで強烈な白い輝きが発生する。

「何事じゃ」

四貫目がホーリーにかけよる。

「簡単だろ」

ホーリーが才藏、半藏や女の忍者に電磁レーザー忍剣の詳しい使い方の説明を終える。

「ホーリー」

四貫目がホーリーの前に立つ。

「佐助にも新しい忍剣の使い方を説明するときが来たようだ」

「新しい使い方？電磁レーザー忍剣だとは聞いていたが、今まで使っていた電磁ナイフとはまったく違うのか」

ホーリーが忍剣を抜くような仕草をして四貫目をうながす。四貫目が背中中の電磁レーザー忍剣を抜く。

「単に斬^きるだけの道具ではない。束にある青い鍵型の部品をずらしてロックを解除すると、黒いボタンを押せるようになる。そのボタンを押すところなる」

ホーリーは四貫目の持つ忍剣に手をそえて数メートル先の岩の方に刀の切り身側を向けなが

らボタンを押す。切り身側全体から鋭い光線が発射されて、岩をまっふたつにする。

「まるで斬鉄剣だ」

「佐助ならすぐ使いこなせる。切り味が悪くなったら陽にかざせばエネルギーが補充される」
四貫目がひとりで試してみる。才蔵や半蔵も同じように刀を抜いて構える。

「レーザー銃の代わりにこれを使ってくれ」

「わかった。ところでわしのことは四貫目と呼んでくれ。佐助という忍者は豊臣方の忍者だ」

「住職に初めからちゃんと名乗っていればよかったのに」

サーチがからかうように四貫目から才蔵に目を向ける。

「才蔵たちは？」

「名はあつてないようなものだ。今までの名で呼んでくれ」

才蔵が恐縮しながら応える。

「四貫目は中忍でわしらは下忍なのだ。下忍にはあだ名しかない」

四貫目が才蔵に心付ける。

「もうそのような区別はない。それにしても貴重な武器をちようだいした。心して使うのだ」

ホーリーとサーチそして五郎とケンタに五人の兵士が小高い丘に陣取る。

「あのような場所で敵を迎え撃つのはいかがなものか」

先ほどの大柄な武士が光秀に耳打ちする。

「やつらにはやつらのやり方があるのだろう」

「しかし、鉄砲で狙われたら身を隠すところがない。しかもキラキラと青色に輝く丸いものでそばに置いておる。狙ってくれと言わんばかりでござります」

「放っておけ。それより我らの体制は整ったか」

光秀の言葉にまわりの武士が大合唱する。

「よーし！」

光秀がそう叫んだとき丘からはるか彼方の豊臣軍に向かってライフルレーザーが静かにまぶしい光を一斉に放つ。生命永遠保持手術を受けたホーリーたちの射撃は正確で無駄がない。

「あまりエネルギーを消費するな。相手は何百年以上も前の軍隊だ」

ホーリーが大声をあげる。射程距離がせいぜい五、六十メートルの鉄砲に比べ、レーザー銃の射程距離は無限だ。数キロ先の豊臣軍の騎馬隊を次々と仕留めていく。

「出陣！」

光秀の声がホラガイの音にかき消されると、すぐにおびただしい数の馬のひづめの音とどろく。すでに忍者の姿はない。

戦いは数分もたたないうちに明智軍の圧勝に終わる。豊臣軍は全滅に近く、残った兵は文字どおりチリチリとなって関ヶ原から姿を消す。勝ち関が怒濤のごとくあがる。

「エネルギーカートリッジの残量が半分を切りました」

兵士がホーリーに報告する。

「あまり気持ちのいい戦い方じゃなかったな」

ホーリーの言葉にサーチがうなづく。

「忍者たちは？」

ケンタがむなしそうに空を仰ぐ。そのとき五郎の鋭い声がする。

「ホーリー！」

ホーリーが振り向くと時空間移動装置が回転している。四基すべてが回転している。

「止める！」

ホーリーが叫びながら胸ポケットからリモコンを取りだしてボタンを押す。

「どういうことだ！とにかく止める！」

やっと回転が止まる。

「ドアを開けろ！」

ホーリーがわめきながらリモコンを操作する。時空間移動装置のドアが跳ねあがると直感的に命令する。

「乗りこめ！忍者はどこにいる？」

サーチがホーリーに追いついて時空間移動装置に乗りこみながら忍者一人ひとりに無言通信

を送る。

「戻ってきて！時空間移動装置の様子がおかしいの」

「わかりました」

まず、お松から無言通信が返ってくる。五郎やケンタや兵士がそれぞれ近くの時空間移動装置に次々と乗りこむ。自動的にドアが閉まり時空間移動装置は四基とも回転を再開する。装置内のモニターに関ヶ原が映っていたが、ホワイトノイズの画面になってからうっそうとした森の画面に変わる。

「勝手に移動している！」

ホーリーの取り乱した声がする。サーチはホーリーと違って冷静にモニターを観察する。

「あれは？」

「御陵じゃないか」

「いいえ、半球の形をしている。円墳なのかしら。人工的なものに違いないわ」

ホーリーが肩にかけたライフルレーザーを降ろすのも忘れて、サーチの横に移動してモニターを凝視する。

「そうだな。御陵は前方後円墳だ」

時空間移動装置が丸い森の真上から少し横に移動する。

「よく見て。四角い台の上に円墳が載っているように見えるわ」

まわりを口の字型の堀に囲まれた正方形の土台の上に丸い円墳が載っている。時空間移動装置がそばに着地するとドアが跳ねあがる。

「全員……」と、言いかけてホーリーは黙ってしまう。忍者がいない。

「四貫目！」

ホーリーが無言通信を送る。

「ホーリー！どこにいる？」

四貫目の無言通信を受けてとりあえずホーリーは安堵あんどの息をはく。

「四角い堀に囲まれた大きな古墳のそばにいる」

「四角い堀！それは御陵だ」

ホーリーたちは永久紀元前400年の御陵の前にいる。

急に地響きがすると木々がざわざわと揺れだす。無言通信が途切れる。

「地震か」

誰もが地面に伏せる。時空間移動装置が地面を止めどもなく転がる。

「御陵が！御陵が動いている！」

円墳部分が台からずれ落ちるようにホーリーたちの方に落ちこんでくる。古墳を囲む堀の一边を埋めながらゆっくりと移動する。

「危険だ！さがれ！時空間移動装置を上空に退避させろ」

ホーリーが地面を這いながら古墳から遠ざかろうとする。サーチがホーリーに手を伸ばすが、ホーリーはそれを見做して胸のポケットからリモコンを取り出して操作する。五郎や兵士もリモコンを操作する。円墳部分が、そして堀からあふれた大量の水がホーリーたちに迫る。

はげしい震動と迫る円墳に圧倒されて振り返る余裕などなく必死で逃げようとするが、あふれた水のせいで乾いた土がぬかるんですべって転ぶ。

地響きと揺れが続く。ホーリーはライフルレーザーを肩にかけていることに気付く。うつぶせのホーリーは両腕に力を入れて顔をあげ、首を思いっきり背中に向けると仰向けの姿勢を取る。すぐそこまで土煙をあげながら円墳が迫る。ライフルレーザーの台座にあるスライドボタンを「拡散」側にずらして構える。小山ひとつぐらいはふきとばせるだろうが対象が余りにも近すぎる。ホーリーはここでライフルレーザーを発射すれば自分も無事で済まないことを覚悟する。ホーリーの足元の地面が不気味に盛りあがる。これしかない！とホーリーは唇をかむと引き金に指をかける。すると急に地響きが鳴りやみ震動が止まる。

ホーリーはライフルレーザーの引き金をロックすると立ちあがって走りだす。ピチャピチャと音をたてながら少し先にいるサーチやケンタに追いつくと大声を出す。

「できるだけ離れる！」

泥だらけになった全員が足元を気にしながら走りだす。十分距離を確保したところで立ち止まって円墳を見上げる。

「山に追いかけられるなんて」

サーチがへなへなと座りこむ。ホーリーがリモコンを捜査して時空間移動装置を地上に降ろす。

「ここで待て」

首を横に振るサーチの手を振りはらってホーリーが時空間移動装置に乗りこむと開閉スイッチを押してドアを閉めようとする。サーチがかるうじて閉まりかけるドアから時空間移動装置にすべりこむ。ふたりが乗りこんだ時空間移動装置が御陵の上に移動する。

「前方後円墳になっているぞ！」

方形部分の円墳側の肩の部分がかなりくずれている。方形側にはまったく樹木はない。樹木があるのは丸い方だけで全体の形は鍵穴のような感じだ。堀の水がその鍵穴の形をした御陵を囲むと、まだ落ち着かないように小さな波をたてている。

泥だらけの顔で唯一汚れていないサーチの口が大きく開く。

「あれは？」

御陵の側面から無数のキラキラ光る糸のようなものが見える。先端は堀の水を目指して震えるように揺れながら伸びる。

「御陵の堀に近いところから数えきれないほどの管のようなものが出ている。戻った方がいい」

地上の五郎からも異常な状況を知らせる無言通信が入る。

「わかった」

ホーリーは素直に五郎の意見を受け入れる。ホーリーとサーチが乗った時空間移動装置が五郎のそばに着地する。すでに御陵から伸びた無数の透明の管が堀を埋めつくす。

「まるで生体内生命永遠保持手術のような光景だわ」

サーチの言葉にホーリーは生命永遠保持機構の本部で見たガラス容器の中の胎児のことを思い出す。

「この御陵の中に巨大土偶がいるんじゃないのか」

「そうだとしたら巨大土偶が現れるのかしら」

誰も御陵の側面から出ている無数の管が堀の水につながっている奇妙な光景に声も出さずに立ちつくす。そのときホーリーたちに悲しそうな無言通信が届く。

「子供が生まれる前に死んでいく」

「何万、何億、何兆と死んでいく」

「永遠に生きるために死んでいく」

「子供のいない永遠の世界」

「男女のいない永遠の世界」

数回繰り返えされる。

「これは瞬示や真美が住職に話していた言葉だ！」

サーチがホーリーにしっかりとうなづく。

「この中に巨大土偶がいるんだわ」

サーチが相手を特定せずに無言通信を試してみる。

「教えてください。誰なのですか」

わずかに後円部分の木々が揺れるが、その後何の反応もない。ホーリーは時空間移動装置に手をあてて見上げる。

「時空間移動装置が誰かに操られていた。あっ！」

ホーリーが急に笑いだす。しかもその笑い声がだんだんと大きくなる。サーチが心配そうにホーリーをながめる。ホーリーがサーチを抱きあげる。

「サーチ、ミリンに会いにいこう」

ミリンはホーリーとサーチの娘だ。もう一七歳になった。サーチに似て美人だ。壮大寺の病院で看護師になるための勉強をしている。

「ホーリー、気でも狂ったの」

ホーリーがサーチを地面に降ろす。

「サーチ、まだ、わからないのか」

サーチはもちろん五郎やケンタもホーリーにげんな表情を向ける。

「俺たちは空間移動だけじゃなくて、時間移動もできるんだ」

「えー」

サーチのホーリーへの視線がまともなものに戻る。

「関ヶ原の戦いで光秀が勝ったということは、ここは俺たちの時空間だし、現にこの時空間移動装置で俺たちの世界の永久紀元前400年に来ているじゃないか」

サーチが何とかホーリーの言葉をのみこむ。

「あつ、そうか」

サーチがやっと相づちを打つ。

「ずーっと時間移動できないと思いきんでいたわ」

ホーリーがニヤツと笑う。

「どうやら緑の時間島が御陵に突っこんだとき、俺たちは西暦の世界から永久の世界にはじき飛ばされたのかもしれない」

「Rv26が言っていた時間のロックが解けたのかしら」

サーチがにつこりとホーリーにほほえむ。

「ただし、この時空間移動装置が俺たちの言うことを聞いてくれるとすればだ」
時空間移動装置のドアが跳ねあがる。

「まず、佐助、いや四貫目たちを迎えにいかなければ」

〔四貫目〕

ホーリーが四貫目に無言通信を送る。

〔四貫目だ〕

〔迎えにいく〕

〔重要な報告があります〕

〔何だ〕

〔黒い時空間移動装置が現れてしばらくして消えました〕

ホーリーがサーチにたずねる。

〔黒い時空間移動装置って知っているか？〕

〔黒い？心当たりはないわ〕

ホーリーが再び四貫目に無言通信を送る。

〔詳しい話を聞きたい〕

〔我らは今しばらく光秀殿の動向を見守りたい〕

〔わかった。俺たちは先に宇宙戦艦に戻る。とりあえず宇宙戦艦の時空間移動装置の格納室の時空間座標のデータをセットした無人の時空間移動装置をそちらに空間移動させておく。何かあったら、その時空間移動装置で宇宙戦艦に時空間移動するんだ！〕

〔わかった。宇宙戦艦だな〕

第三十六章 関ヶ原

第三十七章

ふたりの身体

【時】西暦2048年11月11日

【空】壮大寺 御陵

【人】瞬示 真美 ホーリー サーチ ミリン ケンタ 五郎
住職 リンメイ ミト Rv26 忍者 大僧正

瞬示と真美が赤と黄色の光に満ちた壮大寺の境内に現れる。

「住職がいた寺と比べたら、ここは重々しいな」

それは単に桜と紅葉の違いなのかもしれない。

「紅葉もみぢがきれいね。あつ、瞬ちゃん！」

急に真美が瞬示の腕を引っぱって強烈な信号に変える。

【あの子！】

【サーチ……じゃない】

【似てるわ】

【白衣を着ている】

真美がサーチに似た少女の心の中をのぞく。

【しきりに『お父さん、お母さん』って繰り返している。あつ、住職のところへ行くみたい。この近くに住職がいるんだわ！】

瞬示も少女の心の中をのぞく。

【間違いない！あとをつけよう】

少女が本堂裏側の白壁のすみっこにある小さな木の扉を押して向こう側に消える。瞬示と真美も扉を押して入ろうとするが鍵がかかっている。仕方なくまわりに人がいないことを確認してから壁の向こう側に瞬間移動しようとする。

【！】

【移動できないわ】

ふたりは何度か瞬間移動を試みるが、金縛りにあったように身体が動かない。しかも目の前の白壁がいつの間にか黒壁に変わっている。真美が目眩を感じて倒れる。

【マミ！】

瞬示も真美の横に倒れこむ。

【瞬ちゃん！】

瞬示が目を開けると真美の心配そうな顔が飛びこんでくる。

【わたしたち、気を失ったみたい】

【ここは？】

【あの壁の向こう側よ】

【何かが立ちはだかっていたような感じがした】

瞬示が立ちあがると服に付着した土を払う。

紅葉が美しい深い木立の中を少女はどの方向に走り去ったのか、ふたりは慎重にまわりを見渡す。木々は乱雑に生えていて道がないように見えるが、少女がたどった道があるはずだと確信する。よく見ると薄暗い林の中に陽が落ちる直前に現れる燃えるようなオレンジ色の木漏れ日がところどころに見えて、その鮮やかな木漏れ日を結んでいくと曲がりくねったやわらかな曲線が浮かびあがる。

瞬示が真美の手を引くとオレンジ色のイメージを送る。

【瞬間移動だ】

今度は難なく瞬間移動する。

「瞬示、真美！」

住職が腰を抜かさんばかりに驚いて急に目の前に現れたふたりの名前を泡を吹きながら呼ぶ。

「住職！」

住職を呼んだのは瞬示と真美ではなく、ふたりの後ろにいる少女だった。その少女も急に現

れたふたりの後ろ姿を見つめて立ちつくす。

「ミリン」

住職が少女の名前を呼んだとき、瞬示と真美が住職の背後に黒い影を感知する。

【誰だ！】

瞬示が強烈な信号を発すると、ただならぬふたりの顔色に住職が振り返る。住職には何も見えない。住職の後ろに黒い袈裟を身にまとった僧侶が瞬示と真美をにらみつけるように立っているが、その僧侶が壮大寺から失踪した大僧正だとふたりには知るよしもない。大僧正のきびしい視線が柔和なものに急変する。瞬示と真美は違和感を持ちながらじつと大僧正の視線を受けとめるが、同時にふたりの警戒心が洗いがされるように白紙に還元される。大僧正は満足した表情をするとそのまま庫裏くらの中の暗闇に溶けるように姿を消す。ふたりは我に返っていつしよに言葉を出す。

「ミリン？」

そしてミリンと呼ばれた少女をしげしげとながめる。

瞬示と真美を見つめたまま固まって動かなくなつた住職にミリンが心配そうに近づく。ふたりは先ほどとは打って変わってサーチと瓜二つのミリンをまぶしそうに見つめる。

「住職」

少女の呼び声に住職が我にかえると、しげしげと少女を見つめる瞬示と真美の心の中をのぞ

きこんだように応える。

「ホーリーとサーチの娘じゃ」

「えー」

ふたりはまだミリンを見つめたままで、特に瞬示はミリンの美しさに魅了される。

【瞬ちゃん！】

真美は瞬示の頭が破裂しそうなほどの強烈な信号を送る。思わず瞬示が両耳を押さえる。

「住職！早く連れて行つて！お父さまたちのところへ」

ミリンの声も真美の信号に負けないぐらい大きい。住職が両耳を押さえるような仕草をしてミリンにやさしく返事する。

「あわてなさんな。お父さんもお母さんも宇宙戦艦に戻っておる」

「よかった！」

ミリンはこれ以上ないという満面の笑みを浮かべる。

「だから呼んだのじゃ。宇宙戦艦に向かうためにリンメイが時空間移動装置で待機しておる」

「住職、この方たちは？」

ミリンがうれしそうな表情のまま瞬示と真美をふしぎそうに見つめる。

「お父さんとお母さんの大事な友人じゃ」

「そうだったの！ミリンと申します」

ミリンが礼儀正しく深々と頭を下げる。

「ところで、瞬示、真美」

真剣な表情で住職がふたりを直視する。

「あんたらは自由にあっちこっち移動できる瞬示と真美じゃな？」

「はー？」

瞬示と真美が顔を見合わす。

【わかった。もう一組のぼくらかどうか確かめているんだ】

「今、この世界にも瞬示と真美がいるのじゃ。そのふたりはどうやら自由に移動はできないよ
うなのじゃ。あんたらは急に目の前に現れたから、いわゆる本物じゃ。そうじゃろ」

住職はふたりがうなずくのを見てフツと息をはき出して心底安心して笑顔を見せる。

「いっしょにどうじゃ」

「驚かしてごめんなさい。もちろん、行くわ」

真美が即答すると急にはしやぎだす。

「時空間移動装置に乗るの、初めてだわ。ねえ、瞬ちゃん」

「本物の瞬示と真美を連れてきたぞ」

宇宙戦艦の時空間移動装置の格納室に住職の大きな声がこだまする。

「瞬示！」

「真美！」

ホーリーとサーチは我が娘より先にふたりの名前を大声で呼ぶ。ミリンが少しふてくされて背中の腰のあたりで手を組む。

「住職、なぜ先に知らせてくれなかったんだ」

「それは無理というもんじゃ」

「ついさっき会ったばかりなんですよ」

リンメイが住職に替わって応えると、ホーリーは興奮を隠さない。

「やっぱり、二十二歳の誕生日に何かが起こると予想していたとおりだ」

ホーリーがいつもの人なつこい表情で瞬示と真美に近づいて握手を求める。

「久しぶりだな。たっぷりと話を聞かせてもらいたいけれど、時間がない」

ふたりは違和感なしに再び若くなったホーリーの温もりのある手を交互に握る。ホーリーの後ろからやはり若くなったサーチの手が伸びる。瞬示がサーチの手を握りながら住職の横にいるミリンと目の前のサーチを見比べる。サーチとミリンが双子のように見える。

「ミト、時空間移動装置格納室に来てくれ！瞬示と真美が住職といっしょだ。あの瞬示と真美じゃない。本物の瞬示と真美だ。やはり、何かが起きる！」

ホーリーがミトに無言通信を送る。その通信に瞬示はサッと視線を真美に向ける。

【これが無言通信か】

【花子や一太郎もこれができるんでしょ】

【そりゃ、そうだろう】

【でも一度も聞かなかったわ】

やっとホーリーとサーチがミリンを交互に抱きしめる。

「本当に心配したんだから」

ミリンの声が泣き声に変わる。

「悪かった。許してくれ」

ホーリーが両手の親指でミリンのホッペタを押さえる。

「瞬示！真美！」

格納室の上方からミトが螺旋階段らせんを降りながらふた리를確認すると途中で立ち止まる。

「ここではなんだ。作戦室に来てくれないか」

ミトは瞬示と真美が大きくうなずくのを見て再び階段を上っていく。

「案内しよう」

ホーリーが瞬示に顔を向けてからリンメイに近づく。

「リンメイに教えて欲しいことがある」

小首を傾げるリンメイを無視してホーリーがミリンと並んで階段を上りかけているサーチに

目配せする。

「そうなの。リンメイ、教えて欲しいことがあるの。御陵のことで」

「わかったわ」

リンメイの顔が軽くケイレンする。サーチが螺旋階段らせんの中段あたりから住職を見おろす。

「それに住職にもお聞きしたいことが山ほどあるのよ。明智光秀の時代の御陵でこんな言葉を聞きました」

サーチが続けて言葉をつなぐ。

「子供が生まれる前に死んでいく」

「何万、何億、何兆と死んでいく」

「永遠に生きるために死んでいく」

「子供のいない永遠の世界」

「男女のいない永遠の世界」

ホーリーのそばにいる瞬示と真美が驚く。住職がじつとサーチを見上げる。

宇宙戦艦の作戦室でミトが瞬示と真美に簡単な質問をすると、ふたりも簡単に答える。

「気が付いたら地球に戻っていたの」

「この時代のもう一組のぼくらの二十二歳の誕生日を祝うために戻ってきたんじゃない」

誰もが苦笑するだけで納得しない。特にホーリーが強い調子でふたりに迫る。

「偶然とでも言いたいのか！」

「そうとしか答えようがないわ」

仕方なくミトが映像を使いながら自分たちがこの世界で経験してきたことを話し始める。説明が進むにつれ、瞬示と真美がまったく質問しないことに誰もが気付く。むしろミトたちの周辺に起きたことをほとんど知りつくしているような雰囲気を持つふたりに、ミトはもちろんホーリーやサーチや住職たちが驚く。すべてお見通しの雰囲気にミトが説明を中断してたずねると、はぐらかすような答えが返ってくる。

「実は古い友人に聞きました」

「古い友人？」

「そのうち、明かします」

そんなふたりの応答の繰返しにうんざりしたサーチがリンメイに御陵のことをたずねる。

「古墳にはいろいろな形のものがあるの？」

「古墳が造りはじめられたときには正方形の土台の上に半球を載せたものだったわ。それがいつの時代か前の方を少し細長い台形にしてその後ろに半球の丘を配置した鍵穴のような形になったの。前方後円墳と呼ばれているものよ。でも、これは私たちの世界の話で、西暦の世界ではまったく違うの」

「私たち、方形の上に円墳が載っていた古墳が前方後円墳に変化するのを見たの」
「古墳が自ら動いたとでも？」

リンメイが気色ばむとホーリーが付け加える。

「時代は明智光秀がほぼ天下を統一したころだった」

リンメイは目を閉じて何かを考えるように瞑想^{めいそう}する。

「ぼくらの世界とはぜんぜん違うな」

【でも、わたしたちも光秀に会ったわ】

【あのとき御陵の状況を確認したことはなかった】

目を閉じたままのリンメイがすぐに発言しないと見て瞬示は手をあげる。

「ぼくらは古墳時代に前方後円墳が結構あちこちに造られたと教わったけれど」

「確かに瞬示の言うとおりだ」

天井の浮遊透過スクリーンに御陵の近辺を上空から撮影した鮮明な写真が現れる。鍵穴の池になった御陵の周辺には大小様々な古墳があるがすべて前方後円墳だ。

「これはいつの時代の写真なんですか」

瞬示が特に意識せずにミトにたずねる。

「つい先ほど撮影したものだ」

やっとリンメイが目を開ける。

「サーチが見たように私たちの世界では古墳自体が移動して前方後円墳に変化した……」
続きは心の中で叫ぶ。

——古墳が自らの意思で形を変える！何のために！

そして声にする。

「でも、よくわからないの」

誰もがリンメイの言葉に失望する。特にサーチがリンメイの言葉に歯切れの悪さを感じとる。
「リンメイにはわかってるんでしょう？想像でもいいから、教えて」

サーチに続いてみんなが哀願するように次々と言葉を発する。瞬示がリンメイをボーッと見つめる真美をにらみつける。

【やめろ！】

かろうじて真美がリンメイの心の中をのぞくのをやめる。

リンメイが口のまわりまでシワだらけの顔を引きしめて浮遊透過スクリーンの前方後円墳のひとつを指差して静かにしゃべりだす。

「これだけは言えるわ。よく見て。前方後円墳は遮光器土偶の外形とそっくりだと思わない？」

リンメイの言葉が終わると瞬示と真美の姿が消える。

* * *

上空から瞬示と真美が腹這いの格好で陽の光を受けてキラキラと輝く堀の水と御陵を見つめる。確かにリンメイの言うとおり御陵の形は巨大土偶とそっくりだ。丸い頭と首から下はスカートのようなものをはく巨大土偶がそっくりそのまま御陵の中に仰向けに寝ていても不自然ではないような感覚を抱く。

ふたりは御陵を透視する。徐々に巨大土偶が仰向けに寝ている輪郭が浮かびあがる。まばたきもせずにじっと透視を続ける。少しでも気をゆるめると巨大土偶の輪郭がぼやけてしまう。ふたりは全神経を何度も何度も集中させる。疲れると少し休息して再びさらに強く全身の神経を集中させる。

【見えた！】

瞬示がそう叫んだとたん、ふたりの視野から巨大土偶の鮮明な輪郭が一瞬にして消える。真美がまるでずぶ濡れになった犬のように首から下をぶるぶると震わせる。瞬示もケイレンしている。

【巨大土偶がいるわ】

【もう少しではつきりと見えたのに】

瞬示が大きなあくびをする。ふたりは先ほどの透視で全エネルギーを使い果たして、身体をダラダラと降下させる。

【疲れた】

【瞬ちゃん、だるいわ】

真美が目を閉じる。

【だめだ……眠っちゃ】

瞬示のまぶたも閉じられる。ふたりはお互いを求めるように手を差し出す。降下速度が加速すると堀の水が急に波立つ。ふたりの両手が連結すると御陵から消える。ふたりは何とか瞬間移動した。

宇宙戦艦の作戦室に戻ってきた瞬示と真美が折り重なるように倒れこむ。

「衰弱しているぞ」

「医務室に運べ！」

ミトに命令されるでもなくR v 2 6が瞬示を右手で、真美を左手で抱えあげると作戦室から出ようとする。

「待って！」

リンメイが素早くR v 2 6に近づくと、まず真美の手首を握って脈を取る。

「脈がない！」

今度は瞬示の手首を取る。

「ない！」

続いてリンメイがふたりの額^{ひたい}に手をやる。

「熱い！急いで医務室へ」

R v 2 6 が瞬示と真美を抱えなおすと走りだす。そのあとを全員が追いかけていく。その中でサーチとミリンがR v 2 6 を追いこして全速力で医務室に向かう。

R v 2 6 がていねいにふたりをベッドに寝かすと、サーチがベッドを全身スキャナー装置の中に入れてスイッチを押す。ふたりの身体の内部が壁面のモニターに映しだされる。

「これは！」

スキャンが続くモニターにサーチが、そして荒い息をしながら遅れて医務室に到着したリンメイが映像に釘付けになる。

「関節という関節にある薄いピンクの丸いものは何かしら？」

「わからない！」

スキャンが終了して全身の透視立体画像が現れるとサーチとリンメイがいっしょに叫ぶ。

「人間の身体じゃないわ！」

ミトやホーリーたちにもふたりの身体が人間とはまったく異なることは容易に理解できる。骨格は素人目には人間と同じように見えるが、臓器がほとんど見あたらない。

サーチが別のベッドに寝ころんで叫ぶ。

「ミリン！私をスキャンして」

サーチを乗せたベッドが瞬示のベッドと入れ替わって全身スキャナー装置に入る。ミリンがサーチの言われたとおりにスキャンする。やがてサーチの全身の透視立体画像がモニターに現れる。サーチがベッドから降りるとモニターを見つめるリンメイの後ろに立つ。

「スキャナー装置は正常に作動しているわ」

サーチはモニターに近づいて真美の脳と各関節に点在する薄いピンク色の丸いものを丹念に見比べる。

「脳が身体中のすべての関節に存在しているわ！」

リンメイがサーチの断定的な分析に強くなずいたとき、部屋のどこからか声がする。

「ソノトオリデス」

全員その声のする方向に視線を移す。R v 2 6 が低い声を出す。

「私ではありません。中央コンピュータです」

R v 2 6 の言葉は人間と変わらないほどに上達している。

瞬示と真美はベッドの上でまったく動かない。しばらくしてふたりの身体がにわかにつつとピンク色に輝きだすと濃紺のジーンズが溶けるように消えはじめる。

「服が消える！」

誰もがそう叫んだあと、息をひそめてふたりを見つめ続ける。

第三十七章 ふたりの身体

「まるで幼い少年と少女のよう」

リンメイが枯れた声を出す。ふたりの身体の大きさは大人そのものだが、幼い少年、あるいは少女がそのまま成長したように見える。

「性器が成熟していないわ」

「いいえ、退化したのかもしれないわ」

リンメイがサーチの見解を否定する。

ふたりの頭部が輝きを増す。全身の関節という関節に存在する小さな脳が頭部の輝きに呼応するかのように明るくなる。全身がピンクから薄いオレンジ色を経て黄色へと変化する。しかし、ふたりの身体はまったく動かない。そのまま黄緑色になり、透き通るような緑色に変化する。

「電圧降下！電圧降下！」

警報のあと医務室の照明が一斉に消える。暗闇の中でふたりの身体が蛍のようにうつすらと輝く。

「非常電源ニ切りカエマス」

中央コンピュータの声が響く。全員が金縛りにあったように動けない。しかし、部屋は暗いままだ。

「R v 2 6 ! 状況を把握しろ」

ミトが闇の静けさを破るように叫ぶ。リンメイが突然震えだす。

「あのとときと同じだわ！」

興奮してガクガクと不規則に震えるリンメイの身体を住職が強く抱きしめる。

「リンメイ！落ち着くのじゃ」

「何か起こる！大変なことになるわ！」

リンメイは気が狂ったような声をあげる。

瞬示と真美の緑の輝きとR v 26の耳の赤い点滅だけが部屋の中の唯一の明かりとなる。

「中央コンピュータ停止。エネルギーノスベテが消滅シマス」

これを最後に警報も停止する。補助灯はまったく点灯する気配がない。宇宙戦艦自体が何か大きな衝撃を受けたように一度大きく揺れる。全員が床に倒れると今度は浮きあがる。ホーリーが直感的に叫ぶ。

「急降下している！」

「見て！」

サーチがホーリーの腕を取って何とか身体を支えながら叫ぶ。瞬示と真美の身体が緑色に輝いたまま宙に浮いている。ホーリーがふたりの姿を見ながら絶叫する。

「墜落するぞ」

再び大きな振動が起こる。少し浮き気味の全員の身体が床にたたきつけられる。部屋の中の

照明が一斉に輝くとまぶしさのため誰もが思わず目を閉じる。再び目を開いたときには瞬示と真美の姿が見あたらない。

「消えた！」

ミトが床に手をつけて身体を起こすと額の汗をぬぐう。その横でリンメイが全身をケイレンさせて倒れている。さすがの住職もなすすべがない。

「中央コンピュータ作動開始」

「電圧正常。警報解除」

誰ひとり声をあげる者はいない。モニターにはグレーのノイズが流れている。

「みんな、大丈夫か」

ホーリーがやっと声をあげる。住職もひざまずいてリンメイに声をかける。

「大丈夫か？わしはあまり大丈夫じゃないが」

リンメイが住職の顔に手を伸ばす。その指に長い髪の毛が一本まとわりついている。もちろん、住職の髪の毛ではない。

宇宙戦艦が御陵のすぐ真上まで急降下したとき、堀を満たしていた緑色の水が一斉に緑から黄色に変化しながら舞いあがると集合して巨大な時間島になった。そして銀色の宇宙戦艦が黄色い時間島に一瞬にして包みこまれた。本来は瞬示と真美だけを包みこむはずだったが、余裕

を持った大きさまでふくらんで宇宙戦艦を完全に包みこんだ。そして宇宙戦艦は地表すれすれのところで急停止して墜落を免れた。

「本艦ハ時間島ノ中ニイマス」

中央コンピュータの音声が医務室に流れる。すぐミトが医務室を出て艦橋に向かう。ホーリーや五郎、ケンタもミトのあとを追う。サーチは留まってミリンに指図する。

「住職を起こしてあげなさい」

サーチはリンメイが立ちあがろうとするのを助ける。ミリンは住職に近づくが、その前にRv26が住職を起こす。

サーチが注意深くリンメイと住職の様子を伺う。医務室を出ようとするRv26の背中にサーチが声をかける。

「Rv26、このモニターに艦橋のメイン浮遊透過スクリーンと同じ映像を映せますか」

「はい」

Rv26はそう答えるとそのまま歩きですが、しばらくすると医務室のモニターに戦艦の側側の映像が分割されて映しだされる。どの画面も緑一色だ。

「時間島は黄色なのに」

サーチはRv26に同意を求めるように言葉を向けるが、Rv26はもういない。

「歩けるかしら」

「大丈夫よ」

リンメイが言葉と裏腹な表情を見せる。

「今は興奮しているから痛みを感じないかもしれないけれど、かなりきつい打撲を受けているはずだわ」

生命永遠保持手術を受けているサーチでさえ腰の強い痛みで顔をゆがめる。少々の衝撃を受けても物が散らばらないように格納されているはずなのに、薬品や医療器具が床に散乱している。サーチたちはお互いに助けあいながら医務室を出る。

「これは巨大土偶じゃないか」

いつの間にか宇宙戦艦を包んでいた時間島が消えて、メイン浮遊透過スクリーンには仰向けの巨大土偶が映されている。

「真下から攻撃を受けたら、ひとたまりもないぞ」

「動く気配はないな」

「どうする」

ミトはすぐに巨大土偶から離れることを選択する。

「上昇！」

「御陵の真上から巨大土偶の頭部の方へ三〇度ずらしながら高度二千メートルまで上昇」

ミトは巨大土偶の目から発射されるかもしれない光線を意識する。しかし、巨大土偶は動く気配をまったく見せない。そこへサーチたちが艦橋に現れる。リンメイが痛みを感じさせない足取りでメイン浮遊透過スクリーンの真下に近づく。

「なぜ、ここにいるの」

サブ浮遊透過スクリーンでは宇宙戦艦を見上げる人々の姿が間近に見える。それを見たミトが大声をあげる。

「高度二千メートルと言ったはずだぞ！」

宇宙戦艦はまったくといっていいほど上昇していない。

「巨大土偶に引きよせられているんだ」

ホーリーが叫ぶ。しかし、ミトはそうは思っていない。

「おかしい」

ミトがホーリーに無言通信で送る。

「何が」

「無言通信を使い！」

ミトは無言通信を送りながらホーリーをにらむ。

「操舵^{そうだしゅ}手の舵^{かじ}の取り方が変だ」

「どこが変なんだ」

「上昇しろと命令したのに舵は上を向いていない」

確かに操舵手のアンドロイドが握るハンドルはどう見ても上には向いていない。

「上昇だ！」

ミトが操舵手に近づいて再度命令する。しかし、アンドロイドは反応しない。

「R v 26、説明しろ！」

「ワタシが艦長として指揮をとります」

「なに！」

そのとき、ミトたちに無言通信とは異なる強烈な信号が届く。

【みんな、R v 26の命令に従うんだ。従うふりをして時空間移動装置で脱出しろ！】

それは無言通信に似せて送られてきた瞬示からの信号だった。ミトだけではなく全員に同じ信号が届く。ふたりが無事であるということを楽しむ余裕などなく、誰の視線も統一性を失う。

【急いで！】

今度は真美からだ。ミトはただならぬ様子を感じとるとホーリーに無言通信を送る。

「ホーリーにも届いただろ。瞬示の言うとおりに、みんなを連れて脱出してくれ」

「ミトは？」

「ここに残る。R v 26の様子がおかしい。確かめる。アンドロイドに気付かれないように行動しろ」

ホーリーはミトの気迫に押されて同意する。ミトは瞬示や真美からの次の信号を期待しながらR v 2 6にできるだけ穏やかな声を出す。

「わかった、R v 2 6。それでどうするんだ。まさか巨大土偶を攻撃しようとしても？」

「そうです」

「えっ！」

ミトはホーリーたちが艦橋を出ていくのを横目で見守りながら、できるだけ感情を押さえてR v 2 6を直視する。

「御陵のまわりには人間があふれているし、少し離れたところには民家が建てこんでいる。それに上空には警察やテレビ局のヘリコプターが飛行している」

「関係ありません」

さすがにミトは驚いて叫んでしまう。

「何だって！」

「中央コンピュータの命令です」

巨大土偶の目が開く様子がメイン浮遊透過スクリーンに映る。R v 2 6がミトを無視して耳をしきりに点滅させる。

「R v 2 6は巨大土偶と戦ったことはあるのか」

ミトが必死に食いさがる。

「アナタが巨大土偶と戦ったときのデータを持っています」

斜めの体勢を取る宇宙戦艦のすべての主砲が御陵に向けられる。

「なぜ、攻撃するのだ」

「時間がロックされる危険性があるからです」

「ホーリーの報告によれば、時空間のロックは解除されている」

「それは承知しています。だから再びロックされる前に攻撃するのです。なぜ、皆さんはロックが解除されたときにこの世界から脱出しなかったのですか？」

ミトがR v 2 6の言葉にうろたえながらも反論する。

「どうしてロックが解除されたことを知っているんだ」

「ホーリーの時空間移動装置が関ヶ原から戻ってきたときにわかりました。それより先ほどの質問に答えてください。答えによつては今後の方針を変更しなければなりません。それにもう時間がありません」

R v 2 6は無線でアンドロイドに命令を送りながらメイン浮遊透過スクリーンの右上の方を指差す。ミトが驚いて目をこらす。

「あれは」

埴輪^{はにわ}の鳥が二羽飛んでいる。

宇宙戦艦の第一連装の三本の主砲が御陵に向かって極端に角度をつけると、二羽の埴輪^{はにわ}の鳥

から緑の光線が御陵の後円の中心に向かって発射される。

「左舷三十度まで傾斜。第一連装の主砲照準急げ！」

明らかにR v 26はあせっている。

「急げ！」

宇宙戦艦は巨大土偶側に左舷を傾けたまま、砲塔を下げて御陵の後円部分、すなわち巨大土偶の頭部に照準を合わせる。と同時に主砲が火を吹く。

「離脱！」

主砲の発射で宇宙戦艦が大きくゆらぐ。メイン浮遊透過スクリーンがチリに包まれたような茶色になる。

ミトがよろめきながら腰のレーザー銃を握るとホーリーに無言通信を送る。

「ホーリー！」

メイン浮遊透過スクリーンから巨大土偶の姿が消える。R v 26は宇宙戦艦の大きな揺れにバランスを崩すことなくミトに近づいて腰のホルダーに手をかける。

「もう時間がロックされることはありません」

R v 26がミトのレーザー銃を取りあげて先ほどと同じ質問をする。

「あれほど自分たちの世界に戻ることを切望していたのに、なぜすぐにこの世界から時空間移動しなかったのですか」

ミトが今度は即座に応える。

「あのふたりの謎を解くためだ」

「瞬示と真美のことですね。それほどまで大事なことなのか。人間の考えることはよくわかりません。いずれにしても永久の世界へ時空間移動します」

「ホーリー！」

「ロックされている」

ホーリーが一言だけミトに無言通信を送るとレーザー銃をドアの取っ手に向ける。

「ドアから離れろ」

ホーリーがレーザー銃の引き金を引く。バチツという音とともに鋼鉄製のドアがあきらかめたように開く。眼下の時空間移動装置格納室には数人のアンドロイドが震動で転がった時空間移動装置を基台に戻す作業をしている。しかし、ホーリーが格納室に入るとアンドロイドの耳が急に赤く点滅する。そしてライフルレーザーがかけてある壁に向かって走りだす。すぐさまホーリーとサーチがその壁に向かってレーザー銃を発射する。ホーリーが先頭になって螺旋階段を降りる。

「私たちはいいからホーリーたちだけでも逃げて」

「そうじゃ。年寄りには先に死ぬのじゃ」

「そうはいきませんよ。住職やリンメイに教えてもらわなければならないことが山ほどある」
アンドロイドは武器を持たずに螺旋階段の下に集結する。

「時空間移動装置発進の準備をしろ」

無駄を承知のうえでホーリーが階下のアンドロイドに命令する。予想したとおりアンドロイドはホーリーの言葉を無視して螺旋階段を上ってくる。

「人間の命令を無視するのか」

ホーリーがレーザー銃の台座のボタンを押しながら階段を降りる。

「サーチ、五郎、集中側にシフトさせて撃て」

拡散側でレーザーを発射すると足元の螺旋階段まで破壊する恐れがある。また時空間移動装置にもレーザー光線が当たる可能性がある。ホーリーが至近距離で発射した糸のように細いレーザー光線がついそまできているアンドロイドの胸に命中すると鉛筆の芯ぐらいの小さな穴があく。アンドロイドがバランスを崩して倒れると後続のアンドロイドにまともにぶつかって将棋倒しのように転げ落ちる。

ホーリーは螺旋階段の途中で飛びおりて、倒れたアンドロイドの胸部を次々とレーザー銃で撃ちぬく。そして螺旋階段を見上げて最後尾にいるケンタに叫ぶ。

「ケンタ！後ろだ」

螺旋階段の最上段にライフルレーザーを持った数人のアンドロイドがいる。ケンタはミリン

をかばいながら振り向くと腰からホーリーが改造した電磁レーザー忍剣と同じ性能を持つ電磁レーザーナイフを抜いてアンドロイドに向かって斬りかかる。電磁レーザーナイフの切り身から白い幅のある光線が弧を描いてアンドロイドに向かう。アンドロイドの腹のあたりをはくように光線が通過すると上体が下半身からずれてそのまま格納室の床に落ちる。同時に格納室入口の螺旋階段らせんを固定していた鋼鉄製の基礎部分も切りさかれる。階段がゆっくりと傾く。

五郎、住職、リンメイがかるうじて床に到達する。サーチが階段途中で身をのりだしてジャンプして見事に着地する。ケンタもミリンを抱きかかえるとやはり身をのりだして飛びおりようとする。

「高すぎる！」

ホーリーはケンタが飛びおりる地点にかけこむが、ふたり分の体重をまともに受けて吹っ飛ばす。ケンタが腰からくだけるようにひっくり返る。

「大丈夫か！」

五郎とサーチがホーリーやケンタとミリンのもとにかけよる。

「大丈夫だ！」

ケンタが大声で返事をして立ちあがる。

「お父さん」

ミリンが顔をゆがめるホーリーのそばにひざまずく。

「武器を捨てろ」

その声にサーチが振り向くと住職とリンメイが両手を高くあげて立っている。その後ろに十数人のアンドロイドがライフルレーザーを構えている。奥から両手を頭の後ろに回してミトがレーザー銃を持ったふたりのアンドロイドにつきそわれて住職とリンメイに近づく。

「これまでか」

ライフルレーザーを構えたアンドロイドがミリンと倒れたホーリーの前に立つ。床に落ちるレーザー銃の音が格納室に響く。と同時にその音をかき消すように大きな爆発音が格納室全体を揺るがす。

青い時空間移動装置が一基、格納室に現れる。回転が急停止して一瞬格納室内が静寂に包まれる。ドアが勢いよく跳ねあがって電磁レーザー忍剣を握った忍者が次々と飛びだしてくる。目にも止まらぬ速さで忍者が散っていく。忍者は数人しかないはずなのに十数人いるかのように見える。分身の術だ。

ミトが肩からアンドロイドに体当たりする。サーチや五郎が素早くレーザー銃やレーザーナイフを拾う。遅れてホーリーがレーザー銃を構えたときには目の前のアンドロイドの胴体が上下に分離されて床に転がっている。忍者がすべてのアンドロイドを電磁レーザー忍剣で切り捨てていた。鋼鉄の身体を持つアンドロイドでさえ電磁レーザー忍剣の前ではひとたまりもない。

「時空間移動装置へ！」

ミトが叫びながら時空間移動装置のドア横の溝に手を入れてノブを引っばる。ドアが跳ねあがったとき格納室に警報が流れる。

「本艦ハマモナク時空間移動体勢ニ入リマス」

この警報を聞いたホーリーが叫ぶ。

「急げ！時空間移動体勢に入ると移動できなくなるぞ」

ケンタが足を引きずっている。ミリンがホーリーを時空間移動装置に乗せるとケンタのところに戻って肩を貸す。

「ミリン！早く」

サーチはケンタが片足を引きずりながらドアに近づくのを見て叫ぶ。

「生命永遠保持手術の効果が消えている！」

サーチがケンタの腕を引っばりあげる。

「壮大寺へ」

ミトがホーリーや五郎に次々と無言通信を送る。時空間移動装置の回転が始まる。共鳴するような音が格納室に響きわたると、格納室から三基の時空間移動装置が消える。その数秒後宇宙戦艦も御陵の上空から消える。

第三十八章

DNA鑑定

【時】西暦2048年11月13日（前章より二日後）

【空】壮大寺 札幌の大学

【人】ホーリー サーチ ミト 住職 リンメイ 一太郎 花子 山内

Rv26の反乱がミトやホーリーたちに重々しくのしかかる。宇宙戦艦が姿を消したあと身を寄せるところといえど、壮大寺を除いてほかにない。まして重傷を負ったケンタの治療となれば、壮大病院に頼るしかない。ミトたちは壮大寺の一番奥の庫裏に大僧正ミブの好意でかくまってもらう。

第三十八章 DNA鑑定

「ケンタの骨折がすぐに治らないということは、生命永遠保持手術の効果が失われたからだわ」

「あのとき宇宙戦艦が時間島に包まれたからか」

ホーリーも格納室での戦いで受けた腕の傷口を気にする。

「そうとしか考えられないわ」

ホーリーとサーチの会話をミトが黙って聞く。

「いずれ私たち、老夫婦になってしまおうね」

「ミリンはどう思うだろうか」

「ケンタも三十代半ばぐらいじゃないのかな」

「症状が落ち着いたら、ここへ連れてこないと病院だと大騒ぎになるかもしれないわ」

世間は巨大土偶と宇宙戦艦の戦闘で大混乱しているが、閑静な壮大寺の薄暗い庫裏^{くら}でホーリーたちは何とか落ち着きを取り戻す。

しかし、ミトは余りにも突拍子もない事件の連続で錯乱状態に近い。ミトの頭の中で様々なことがとりとめもなく駆けめぐる。たまらず立ちあがると畳^{たたみ}の上でサーチと並んで寝そべるホーリーに声をかける。

「疲れているのに申し訳ないが、調べて欲しいことがある」

ミトが庫裏^{くら}の玄関に向かおうとする。

「私も行くわ」

先に立ちあがったホーリーから差し出された手をつかんでサーチも起きあがる。

「何を調べる？」

ホーリーがミトの背中にたずねる。

「宇宙戦艦の時空間移動先を知りたい」

「なーんだ。そんなことか。それはもう調べてある」

「どこへ移動した？」

ホーリーは感情を害しているのを見抜いてミトの肩をたたく。

「あわてるな。ミトには休息が必要だ。少し休んだらどうか」

ホーリーとサーチが再び寝そべると、半ばやけくそのミトもその横で仰向けになる。しかし、すぐ起きあがってホーリーに頭を下げる。

「頼む。教えてくれ」

「宇宙戦艦が時空間移動する前に出した移動先の時空間座標の信号を時空間移動装置のコンピュータに保存しておいた」

「さすがホーリーだな」

ミトがホーリーのすぐ横に上半身を寄せる。

「ただ、その座標が示す時空間がどのようなところかは、行ってみなければわからない」

「むろん、そうだろう」

「単純に宇宙戦艦を追って時空間移動すべきかどうか……」

「ホーリーの言うとおりだ。我々は生命永遠保持手術の効果を失った。アンドロイドと戦うには余りにも非力だ」

「生命永遠保持手術を受けようにも、その設備そのものが宇宙戦艦とともに消えたわ」

サーチが目を閉じてつぶやく。

「悲観的になることはないが、宇宙戦艦が移動した時空間先が俺たちの現実時間の世界だった

らカーンやキャミはひとたまりもなくアンドロイドの攻撃にやられてしまうだろう。でも俺たちはその世界へ確実に時空間移動できるだけのデータを持ちあわせていない」

「時空間移動が可能になったはいっからだ？」

「恐らく、あのふたりが緑の時空間島で御陵に到達したときだと思う。そのとき俺たちは永久の世界の関ヶ原にはじき飛ばされて時空間移動が可能だと初めて気が付いた」

ホーリーはミトがうなずくのを確認して言葉が続ける。

「ところで宇宙戦艦のほかに時空間移動の痕跡こんせきを示す信号がふたつあった」

「なに！」

ミトがホーリーの視線をしっかりと受けとめる。

「ふたつとも時間島のものだ。時間島が残す信号は特殊なのですぐにわかる」

「時間島がふたつも宇宙戦艦と同時にしかも時空間移動したのか！」

ミトが興奮して今にもホーリーの胸ぐらをつかみそうに腕を伸ばす。

「いや、ふたつとも宇宙戦艦の時空間移動よりも少し前に時空間移動した」

「そこまで調べあげていたのか」

腕を降ろしてミトは冷静になろうと努める。

「ひとつは多分、巨大土偶のものだろう」

「宇宙戦艦にやられたんじゃないの？」

サーチは宇宙戦艦の攻撃のあと御陵に何も残っていないのでてっきりそう思った。そのときミトが急に思い出したことを口にする。

「実は宇宙戦艦が巨大土偶を攻撃するほんの少し前、例の埴輪はにわの鳥が現れた」

「えっ！」

リンメイがミトの言葉に強く反応すると忍者との会話を中断してホーリーたちの会話に割りこむ。ミトがそんなリンメイに向かって先ほどの言葉を繰り返す。

「R v 2 6 は埴輪はにわの鳥が再び時間をロックするかもしれないと恐れていた」

「だからR v 2 6 は巨大土偶を攻撃したのじゃ」

ミトの言葉に住職も得心して会話に加わる。

「住職の言うとおりだとするとR v 2 6 に非はないわ。それに宇宙戦艦の中央コンピュータも私たちを抹殺しようとしたのではなく、全員を連れて永久の世界に戻ろうとしただけだったのかもしれないわ」

ミトがサーチにゆっくりと首をたてに振るとホーリーが付け加える。

「今まで巨大土偶は単独で時空間移動するものだと思っていたが、巨大土偶自体が時間島なのかもしれない」

リンメイがさらに割りこんでくる。

「そんなこと、考えられないわ」

「巨大土偶が時間島と同じような時空間移動をしないのなら、ほかの種類の時空間移動の痕跡こんせきを示す信号が残っているはずなのにそんな痕跡こんせきはなかった。つまり時間島ではない別の種類の信号の記録は残っていない」

「ふたつとすれば、あのふたりじゃないの」

「あのふたりは今まで必ずひとつの時間島を使って時空間移動していた。別々に移動することはなかった。ひとつの星さえ時空間移動させることができる時間島に別々に入って時空間移動するなんて考えられない」

「仮にあのふたりがひとつの時間島で時空間移動したとしたら、もうひとつの時間島はやはり……」

「巨大土偶しか考えられないんだ」

「わかった」

ミトもリンメイも納得する。

「これからどうするの？ 私たち」

サーチがホーリーを見つめる。

「だから、とりあえず休息だ。今、あわてて時空間移動する必要はない。しばらくこの世界でじつくりと考えた方がいいだろう」

ミトはホーリーが意外と冷静に現状を把握しているのに驚く。

「ホーリーのように冷静にならなければならない」

「もうミトは司令官でも艦長でもない。これからのことをじっくりと考えた方がいいんじゃない？
…これは俺の意見ではない。住職の考えだ」

住職がミトの肩に手を置く。

「今は潮目じゃ。大きな魚は眠っておる」

ミトがフーツと息をはく。

「そうだな。少しゆっくりしよう」

ケンタのギプスを外す時期がくる。ミリンの愛情がその時期をかなり早めた。ミリンに生命永遠保持手術の説明を交えながら忍者以外の者がこれから徐々に老^ふけていくことが告げられる。忍者は宇宙戦艦が時間島に包まれていたとき関ヶ原にいて、時間島から抜けだしたあとの宇宙戦艦に戻ってきたので、生命永遠保持手術の効果を持續している。

ミト、ホーリー、サーチ、ミリン、五郎、ケンタ、忍者、住職とリンメイが庫裏^{くら}の大広間でこれからのことを話しあうために円陣を組むように座る。

大僧正ミブがミトをうながすとミトが切り出す。

「アンドロイドが人間に反乱を起こしたこと、いやアンドロイドではなく宇宙戦艦の中央コンピュータが反乱を起こしたことが一番目のテーマだ」

「R v 26 は時空間がロックされることを極端に恐れていたことは確かだ。いや中央コンピュータが恐れていたのだ」

ホーリーの意見にすぐさまミトが追加する。

「もう二十年近く前のことだが、この世界に来る前、摩周湖に偵察に行ったことを覚えているか」

ミトはそのとき居合わせたホーリーとサーチと住職とリンメイの四人の顔を順番に見る。

「ええ。埴輪はにわの鳥が緑の光線を土偶の目に発射した直後に『時間がロックされた』とR v 26 が言っていたわ。どういう意味かよくわからなかったけれど」

「時間がロックされて宇宙戦艦や時空間移動装置が空間移動しかできなくなった」

ホーリーも思い出す。そして、誰もがはるか昔の出来事の記憶を必死でしぼり出す。

「じゃが、R v 26 の行動は少々乱暴じゃった」

住職の言葉のあとでリンメイが学者らしい言葉を並べる。

「あらゆる分析をしてから対応策を考えるという雰囲気ではなく、すぐさま攻撃を開始したという印象を受けたわ」

ホーリーとサーチが交互に発言する。

「中央コンピュータやアンドロイドが意識を持ったのかも」

「そうね。アンドロイドの会話と思考能力が格段に向上したわ」

ミトもサーチの意見にうなずく。

「言葉そのものと言いまわし方が人間と変わらない」

「棒読みのような話し方がいつも間にか抑揚よくようある言葉使いになったわ」

サーチがだめを押す。

「しかし、アンドロイドの胸に組みこまれたちっぽけなCPUで人間のような言語処理能力を持ちうるとは考えにくい」

ホーリーが軽く反論する。

「中央コンピュータなら？無言通信のプログラムを使い始めて中央コンピュータが意識を持つたと考えられないかしら」

ホーリーが首を横に振ってから、サーチに苦笑いする。

「中央コンピュータのしゃべり方は昔のアンドロイドよりひどい」

「それはアンドロイドがいつでも人間と会話しているから上手になったんだわ」

「なるほど」

ホーリーがサーチの意見に納得する。しかし、リンメイはサーチと異なる見解を披露する。

「中央コンピュータは会話より意識の獲得を優先させたのかもしれないわ」

「否定したいけれど、肯定した方が無難かな」

ホーリーがリンメイの意見に賛同すると、サーチも素直にうなずく。

「そうだとしたら、中央コンピュータがアンドロイドを介してミトの命令を無視するということも可能だわ」

「意識を持つということは価値観を持つということじゃ」

住職がサーチの考えを補強すると横のリンメイに視線を向ける。

「一太郎からこんな話を聞いたことがあるわ。植物人間になった人に無言通信チップを埋めこんで、赤ん坊に接するような会話を通じて気長に治療していくとやがて意識が目覚め、普通の人と変わらないほど回復した事例がいくつもあると。会話から思考能力が目覚め、意識が復活する。高度なコンピュータならおおいに可能性があると思うわ」

「すごいものを開発したんだなあ、一太郎は」

ホーリーが一太郎に尊敬の念を抱く。

「アンドロイドにはプログラムしか組みこまれていない。大脳的能力を引きだして通信するという、つまり脳と連係プレーするためのチップは組みこまれていないわ」

リンメイの言葉を受けてホーリーがすぐさま発言する。

「アンドロイドはお互い無線で通信ができる。もちろん電波の届く範囲に限られるが、無言通信のように一対一ではなく、一対複数の通信が可能だ。それに混信しなければ複数対複数の通信だって可能だ」

「ホーリー！」

サーチの呼びかけにホーリーが驚いてサーチを見つめる。

「あなた、いつか瞬示と真美の通信は無言通信が進化したものではと言っていたこと覚えてる？」

「ああ」

「それにあのふたり、人の心も読めるわ」

「サーチは何を言いたいのか？」

住職が興味を持って割りこむ。

「あのふたりの通信は人間の無言通信とアンドロイドの無線通信の両方の長所を持っていると思わない？ ねえ、ホーリー、そう思わない？」

「サーチ！」

今度はホーリーが叫ぶが、応じたのは住職だった。

「そのとおりじゃ」

そしてホーリーがサーチに大きくうなづく。

「あのふたりの通信を盗聴することはできない。ところがアンドロイドの無線通信を盗聴することは可能だ。マシン語の会話を盗聴すると0と1の羅列^{られつ}にしか見えないが、それでも解析すれば何を話しているのかはわかる」

ミトが付け加える。

「一太郎の話では無言通信も盗聴できないことはないが、盗聴されないように通信することは可能らしい」

ホーリーがミトに確認する。

「一太郎の見解からすると、もしアンドロイドやコンピュータが我々を征服しようとする、人間の無言通信システムが邪魔な存在になるということか」

「実際、宇宙戦艦から脱出するときに俺たちの無言通信にR v 26、いや中央コンピュータは適切に対処できなかったじゃないか」

ミトとホーリーがお互いの意見に驚きながらも合意する。

「瞬示と真美の身体についての見解を聞きたい」

ミトがサーチとリンメイを交互に見つめる。

「一言で言えば脳が全身に分散しています」

リンメイが言いきる。

「私もそう思います。このヒントは一太郎からいただきました」

サーチがリンメイの意見に賛成する。リンメイがサーチに軽く首をたてに振ると続ける。

「あのときもつと時間があつたら……スキャナー装置に表示されたスペクトルから見てあの小さな塊かたまりはすべて脳とまったく同じものだったわ」

「あれがすべて脳だとすれば、フル稼働するとかなりのエネルギーが必要になるわ」
サーチが新たな問題を浮上させる。

「でも、あのふたりは食事をしないどころか水分を補給することもないわ」
リンメイがサーチの顔を伺う。

「内蔵はほとんど見あたらない。それどころか骨のように見えているものが骨なのかどうかわからないし、血管がまったく存在していない」

サーチの言葉に一同がうなる。

「どのようにしてエネルギーを手に入れて利用するのかふしぎだわ。あっ！」

リンメイが悲鳴に似た声をあげる。

「あのとき……宇宙戦艦が御陵に墜落しそうになったのは、ふたりが戦艦の全エネルギーを吸い上げたからではないのかしら」

突拍子もないリンメイの見解を否定する者はいない。

「俺たちの身体とは次元が違うということか」

ホーリーの直感の方が当を得ているかもしれない。沈黙がしばらく続いたあとミトに進言する。

「一太郎を呼んで意見を聞いては？」

ミトが返事をする前に、その一太郎からホーリーに無言通信が届く。

「無事だったか。宇宙戦艦が消滅したニュースを聞いて心配していたんだ」
「みんな無事です。ところでミブ大僧正から聞いていると思うが、瞬示と真美というふしぎな人間がいるんだ。一太郎の……」

ホーリーがそう言いかけたとき、一太郎から強い無言通信が届く。

「瞬示！真美！古い友人だ。昨日、突然現れた」

「何だつて！とにかく時空間移動装置を差し向ける。民宿にいるんだな」

「そうだ」

ホーリーがすぐさまみんなに無言通信の内容を伝える。ミブはホーリーに顔を向けただけで返事をしない。一太郎からの無言通信を受けている。

「ミブ、あのふたりは古い友人だ。死んだと思っていた」

「どおりで瞬示と真美の話が出てこなかったわけだ」

ミブが納得すると、一太郎が精一杯申し訳なさそうな感情をこめて無言通信を送る。

「決してふたりのことを避けて話さなかったわけではない。すまなかった」

ミブが無言通信を切るとホーリーに告げる。

「すぐに一太郎と花子を迎えに行ってください」

「この世界にいる瞬示と真美もそれぞれ同じ両親から生まれてきた」

ホーリーが一太郎と花子に確認する。

「僕は札幌の大学の医学部にいた。瞬示は工学部で学部は違っていたがなぜか気があって、よくプログラミングを教えてもらった。それが僕の進路を変えるきっかけにもなった。僕もコンピュータのプログラムに興味を持ったんだ。自慢するわけではないが、瞬示のプログラミングはかなりのレベルだったけれど、そのおかげですぐに瞬示を追いこしてしまった」

一太郎が、次は花子の番だと言わんばかりの目配せをする。

「私は北海道から大阪の大学に入学して一年先輩の真美と知りあったの。でも真美はごく普通の女子大生だったわ」

一太郎と花子がポツポツと瞬示と真美のことをしゃべりだす。

「瞬示と真美は死んだと思っていた。それぞれのご両親の悲しみようはすごかったな」

「一人娘と一人息子を失ったんですもの」

「しばらくはそれぞれのご両親と交流していたが、就職して無言通信の研究が忙しくなると年賀状のやりとりぐらいになっちゃった」

「そのうち、奇妙な年賀状が来たわね」

「そうそう。両方のご両親から出産を知らせる年賀状だった」

「高齢出産だからビックリしたけれど、同じ日の同じ時刻に瞬示のご両親からは男の子、真美のご両親からは女の子が生まれたって」

「それに死んだ瞬示と真美が生まれた月日、時間がまったく同じだとも。ふしぎな偶然が二回も続くとは！」

「もちろんご両親は瞬示と真美という名前を付けて、あのふたりの生き返りだと非常に喜んでいたわ」

「毎年、子供の写真を年賀状に焼きつけて送ってくれた」

「摩周湖で死んだふたりにますます似てきたと、いつのころからか年賀状ではなく電子メールと添付ファイルの画像が正月になると届いてましたね」

「ご両親が似ていると言ったのは単にそう思いこもうとしているものだと思っていたが、添付ファイルの画像や動画と学生時代のアルバムの瞬示の写真を比べると確かに瓜^{うり}ふたつだった」

「真美もだわ」

一太郎と花子は目を閉じてから話をいったん打ち切る。その間^まを利用するようにサーチがミトに早口でたずねる。

「瞬示と真美の両親は普通の人間なのですか」

「別に変わったところはないようだ」

一言も口をはさまずに聞いているミブにミトが視線を移すとミブが首をたてに一度だけ振る。そのとき、一太郎が花子にたずねる。

「生まれ変わった瞬示と真美に会ったことをあのふたりに話したっけ？」

「いいえ、まだ話していないわ」

「そうだった。次の日にでもと思って眠ってしまった」

「次の日には真美も瞬示も民宿から消えてしまったわ」

「えっ！どういうこと！」

サーチが大声を出して一太郎と花子に迫る。

一太郎と花子が五十九歳になったとき、前代未聞の夫婦でノーベル平和賞、医学賞のダブル受賞を授与されることになったが辞退した。この謙虚さがかえってふたりを有名にした。ふたりはさすがに戸惑い、人知れず残りの人生を静かに暮らしたいと真剣に考えた。そしてジャストウエーブ社を退職すると、放置されていた花子の実家の民宿で隠居生活に入った。そして退職からちょうど一年後に突如瞬示と真美が現れて、一太郎と花子は突拍子もない話を聞かされた。もし、早期退職していなければふたりが一太郎と花子の前に現れなかったかもしれない。

いずれにしても一太郎と花子は退職して暇を持てあますようになると急に瞬示と真美の生まれ変わりのふたりに興味を持ちはじめた。さっそく無言通信でふたりの両親に連絡を取るとすぐに快い返事が返ってきて、わくわくするような気分を抱えながら御陵の近くに住む両親の家を訪ねた。花子にとっては学生時代下宿していた街なのでなつかしさが先に立った。

ふたりを出迎えた瞬示と真美はまったく瞬示と真美そのものだった。一太郎と花子は一泊したあとふたりの髪の毛をもらい受ける。さらに両親が大事に保存していた摩周湖で死んだふたりの身の回り品から髪の毛を捜しだしてそれもらい受けた。一太郎と花子はそれぞれの両親にDNA（遺伝子のことで二重螺旋構造らせんを持つ）鑑定のことを説明して許可をもらうと、札幌の大学の山内教授のところへ向かった。

山内のDNA鑑定の結果、死んだ瞬示と真美のDNAと今生きている瞬示と真美のDNAがまったく同じものだということが判明した。

「そのときの山内の取り乱した表情は今でもよく覚えている。もちろん僕も花子も天地がひっくり返るほど驚いたが」

一太郎と花子が全員の真剣な視線を意識しながら話を続ける。

『『あり得ない』と山内は倒れそうになるぐらい驚いて、そして同じDNAがあるとすればDNA鑑定は意味をなさないとも言っていたな』

「思い出したわ。年代鑑定をすることになったわね」

花子が目を細める。

「山内は髪の毛が生成された年代を調べることを考えついたんだ。山内の友人にその道の専門家がいて、すぐに調べてもらった」

全員、一太郎の次の言葉に集中する。

「二本の髪の毛は最近のもので、もう二本は約三〇年前のものだという結論だった」

リンメイが間髪を入れずに叫ぶような声をあげる。

「その髪の毛は今どこにあるのですか」

「山内に預けたままになっています」

「連絡を取っていただけますか。今すぐお邪魔したいと」

「なぜ」

「訳はあとでお話します」

一太郎が無言通信で山内を呼びだす。

「DNAが同じだということは同じ人間だということになるわ」

「そんなことがあり得るのだろうか」

ホーリーとミトは先ほどから首をひねりっぱなしだ。一太郎が山内から無言通信を受ける。

「山内から了承の返事がありました」

「よし」

ミトが立ちあがると庫裏の玄関に向かう。それに引きつられて全員が立ちあがる。ミトが振り向くと名前を呼ぶ。

「全員で行くわけにはいかない。山内教授に迷惑がかかるだろう。リンメイ、一太郎、花子、

そして私だ」

サーチが人選からまれて少し不満そうに口をとがらすが、同じく人選からまれた住職は気持ちよくリンメイを見送る。

「時空間移動装置へ」

ミトが外に出る。すぐに時空間移動装置の回転音が庫裏の中にも聞こえてくる。

時空間移動装置のことはたびたび報道されていたが、突然大学のキャンパスに現れるとパニックになることは明らかだった。時空間移動装置がキャンパスの目立たないところに現れるとミト、一太郎、花子、リンメイを白髪の山内教授と大学の職員がDNA鑑定室に案内する。

「急に無理なことを頼んで申し訳ない」

一太郎と花子が山内に何度も頭を下げる。

「何を言ってるんだ。先輩で親友じゃないか。それにリンメイ、ミトに再会できるなんて、なつかしいな」

山内はむしろ上機嫌でDNA鑑定室のドアを開けて四人を招き入れる。

「さっそくですけれど、ある髪の毛のDNA鑑定をお願いしたいのですが」

リンメイが山内に頼むとポケットから大事そうに小さなビニール袋を取りだす。

「準備は整っています」

「この髪の毛は？」

ミトがビニール袋の中を見つめる。

「あのふたりが倒れたとき、熱があるかどうかと額ひたいに手をあてたときにどうやら付着した髪の毛なんです。間違いなく真美の髪の毛です」

「さすがプロだ」

ミトも一太郎も花子も大きくうなずきながら、あの混乱した状況でよくも真美の髪の毛を手に入れたものだと感心する。

「偶然よ」

リンメイが肩をすくめる。

再び時空間移動装置が壮大寺に現れる。ドアが跳ねあがったときには全員がミトたちを出迎えていた。

「結果は？」

真っ先にサーチがたずねる。

「あのふたりは人間じゃないわ」

「やっぱり！」

リンメイが説明を始める。

「山内教授によると、摩周湖で死んだとされた真美のDNAは、今この世界にいる、つまりふ

たりの生き返りだとされている真美のDNAとはふしぎなことにまったく同じものでした。それはそれで正しいの」

リンメイが全員の顔を見渡すとすぐに誰もがうなずく。

「そして今この世界にいる真美と、それに摩周湖で死んだはずの真美のDNAは、超能力を持った、つまり摩周湖で死ななかった真美のDNAとも、基本的には同じDNAを持っています。ところが、精密に分析すると驚くべき事実を発見しました。繰返しになりますが、この世界の真美のDNAも摩周湖で死ぬ前の真美のDNAも通常の二重螺旋構造らせんなのに、超能力を持った真美のDNAはさらに分解できてその倍の四重螺旋構造らせんだということがわかったの！いいえ、さらに分解できるかもしれないほどの複雑な構造をしているの！」

「それは何を意味するの！」

サーチが興奮してリンメイを見つめる。リンメイが首を横に振る。

「それ以上のことはわからない」

いったん声を落とすが、すぐに力強く切りだす。

「ただし、これだけは言えるわ。摩周湖での事件で真美のDNAの構造が変化したということ。それは瞬示にも同じことが言えるはずです。一言で言えばDNAのレベルが違うの」

「仏じゃ」

住職が興奮気味につぶやくとホーリーが住職を見つめる。

第三十八章 DNA鑑定

「仏にDNAがあるんですか」

「うっ！いや……」

「神や仏じゃない！あのふたりは俺たちとはまったく次元が異なる人間だということでは？」

ホーリーの発言にリンメイはうなずき、サーチがため息をつく。

「お母さん」

ミリンがサーチの顔をのぞきこむと、サーチはミリンの言葉でミトやホーリーや五郎の顔が老けはじめていることに気が付く。もちろん自分自身も含めてだ。ケンタはそう変わらないが若者の初々しさはない。忍者だけは宇宙戦艦が時間島に包まれたときにまだ関ヶ原にいたし、宇宙戦艦に戻ってきたときには宇宙戦艦を包んでいた時間島が消滅したあとだったから、生命永遠保持手術の効果を保っている。

「生命永遠保持手術の効果が完全に消える前に自分たちの世界に戻った方がいいのかもしれないわ」

「そのようだ」

「待ってくれ！僕らも同行したい。瞬示たちがミトたちの世界に移動したのなら、もう一度会いたい」

一太郎が絞りあげるような声で待ったをかける。

「一太郎はこの世界の人間だ」

「関係ない。瞬示とはまだ話が残っている」

「連れて行ってください。私も真美とまだ話が残ったままです」

「わかった」

ミトは一太郎と花子の固い決意に快くこころよ応じる。

「さて、どの時空間に移動するかだ」

ミトがホーリーに意見を求める。

「宇宙戦艦のあとを追うのは危険な感じがする。そうすると時間島が残したふたつの信号のうちのどちらの時空間移動先を選択するかだ」

「同感だ！しかし、選択はどうすればいい？」

ミトがホーリーをしつかりと見つめる。

「実は、瞬示と真美の時間島が残した識別信号はいやというほど熟知している」

一瞬顔色が変わったミトの視線から逃げるようにホーリーは時空間移動装置に向かって歩きだす。しかし、ミトはホーリーの背中に向かって信頼感だけを言葉にする。

「わかった。すべてホーリーに任せる」

そして振り返ってミブに最大限の気持ちをこめて礼を言々と時空間移動装置に乗りこむ。

「永遠の別れになるかもしれない」

一太郎と花子も念入りにミブに頭を下げて時空間移動装置に向かう。突然訪れた不意の別れ

にミブは戸惑いながら黙礼する。しばらくすると四基の時空間移動装置が回転を始める。

「時空間移動前に平行移動を選択するかどうかをたずねてくるから、必ず平行移動を選択するように」

ホーリーがほかの時空間移動装置の操縦担当者に注意をうながす。空間移動と違ってすさまじい轟音ごうおんを残して壮大寺のうっそうとした森の中から四基の時空間移動装置が「永久」の世界を直指して時空間移動する。

第三十九章

ふしぎな民宿

【時】 永久0274年

【空】 大統領府 北海道（民宿）

【人】 瞬示 真美 ホーリー サーチ ミリン ケンタ ミト キヤミ カーン 五郎
住職 リンメイ 一太郎 花子 忍者

「カーン、ミトからの連絡は？」

地球連邦政府の大統領キヤミの口癖だが、今日はいつになくきつい。

「ない」

「宇宙戦艦でR v 26が戻ってきてちょうど一年たったというのに……」

キヤミが大きいため息をついて机をたたいて立ちあがると海辺に新築された大統領府の執務室の窓越しに夜の街並をながめる。

生命永遠保持手術の効果が消滅して人間は手術を受けた年令に戻った。二十歳で手術を受けた者はそのままの二十歳だが、例えばキヤミのように三十歳で手術を受けた者は二十歳の身体から三十歳の身体となる。キヤミが手術の効果を失ったのは前線第四コロニーで開催された停

戦会議があつた永久255年だったから、今は四十九歳ということになる。寿命は永遠から有限となる。あの若々しさは見る影もないが、それでもキャミは十分魅力的な女性だ。そんなキャミの前にいる地球連邦軍の司令官カーンはもう八十歳になる。ミトがいれば当の昔に引退していたが、やむを得ず司令官を務めている。

「どのようにして前線第四コロニーがこの地球の近くにやって来たのか」

カーンの言葉を背中で受けながらキャミが窓に向いたまま今度は上空に視線を向ける。半月がふたつ見える。もちろんひとつは本物の月で、もう一方が前線第四コロニーだ。そのコロニーの中央コンピュータが自らを巨大コンピュータと名乗ってキャミに命令した。

「地球を一週間後に明渡しなさい」

これだけの短い通信だった。キャミは大統領としてすぐさま善後策の検討に入った。とりあえず月がふたつもあることについては、数時間前にメディアを通じて全地球市民に説明した。幸いにも連邦政府を信頼しきっていたので混乱は生じなかった。

「カーン、どう思う？」

「星が移動するには時間島が必要だ」

「時間島が前線第四コロニーをここへ移動させたとしたか考えられないのは理解しているし、以前この前線第四コロニーが今と同じところにいたことも承知しているわ」

「時間島がこの地球を欲しがっているとは考えられない」

「巨大コンピュータがなぜこの地球を……」

キヤミがリモコンをつかむと浮遊透過スクリーンに銀色の宇宙戦艦が映される。もう何十回と見た画面だ。五十隻もの宇宙戦艦が地球を威圧するように前線第四コロニーの上空で整列している。

「巨大コンピュータからの通信は？」

「あれから何もない」

「一週間後に明渡さなければ攻撃するという脅し以外の何ものでもないわ」

キヤミが倒れこむように椅子に座る。

「カーン！」

キヤミが手にしていたリモコンを床に落とす。

「明らかに意思を持っているわ」

「巨大コンピュータが意思を持つ……」

カーンがキヤミの言葉をなぞる。

「何だ！地球じゃないか」

時空間移動装置が海辺に着地している。ホーリーが時空間座標を確認する。

「間違いない。俺たちの世界だ！戻ってきたんだ」

「本当だわ」

思わずホーリーとサーチが抱きあう。モニターに見覚えのある風景が映されている。

「ひよつとして……」

サーチとホーリーが離れると目をこらす。

「ここはあの民宿があつたところだわ！」

サーチにとって思い出深いところだ。しかし、民宿はない。痕跡こんせきすら残っていない。

「サーチ！」

ホーリーが腕時計を見ながら時空間移動装置から降りる。

「永久0274年。時空間移動装置の時計と同じ年をちゃんと示している！」

ホーリーがすぐさまミトに無言通信を送る。ミトもモニターで時空間座標を確認する。そして時空間メールボックスに大量のメールが蓄積されていることに気が付く。ミトは驚きながら、しかし胸を弾ませて受信ボックスからキャミが送信してきた何百通もの命令メールを見つける。そして最新のメールを開封すると古いメールをさかのぼって開いていく。内容はすべて同じだった。時空間移動装置から降りるとホーリーに近づく。

「キャミから出頭命令メールが届いている」

そのミトの声はホーリーだけではなく全員に届く。

「キャミは無事なの？」

サーチが心配そうにミトを見つめる。

「多分……」

「それはよかった。すぐキャミに会いたいだが、わしらはここで降ろしてもらっていいじやろか」

住職がミトにそしてリンメイに同意を求める。

「もちろん賛成よ。この付近のどこかに瞬示と真美がいるかもしれないわ」

住職もリンメイも瞬示と真美がいる時空間に移動してきたと思っっている。

「わかった。私はとにかく大統領府へ向かう。ここに残りたい者はここで待機してくれ」

ミトもここをあの民宿が存在していた場所だと考えている。瞬示と真美の時空間移動先かどうかは別として、少なくとも時間島が残した時空間移動先の痕跡こんせきをたどってきた場所であることは間違いないはずだ。この付近を調査することはそれなりに意味があると考えて、ミトは誰を残せばいいのか思案する。

「オレもここに残りたい」

ケンタにとって自分が生まれ育った場所だ。五郎はまだケンタになぜ家を捨てたのかを伝えていなかったが、もちろん五郎にとっても思い出深いところだ。

「私もケンタとここに残る」

ミリンの言葉にミトがうなずくと、四貫目がミトに近づいて頭を下げる。

「我らはキャミ殿のところへ参る」

そのあと一太郎と花子もここに留まるとミトに伝える。自分たちが住んでいた民宿があつた場所とまったく同じだという刺激的な誘惑を受けいれる。

ホーリーがサーチに相談する。

「ミリンとケンタがここに残るのなら、俺かサーチか五郎の誰かが残った方がいい」

ホーリーはミリンを残すことを気にする。万が一時空間移動装置で移動しなければならないときに操縦できる者がいないというのも問題だ。

ホーリーが五郎にたずねる。

「ホーリーの言うとおりに、この三人のうちひとりはこちらに残る必要がある」

ミトは一番頼りになるホーリーを残すことが最善と考えてサーチと五郎に要請する。

「ホーリー、ここに残ってくれ。サーチと五郎はいっしょに来てくれ」

「わかりました。無言通信ができるし、時空間移動装置があれば一瞬にしてここに戻ってくることもできる」

五郎が残念そうな表情をにじませるケンタの肩をポンとたたくと、逆にケンタが五郎の肩をたたく。

「オレ、もう三十五だ。父さん、心配は無用だ」

ケンタはきりつとした青年の顔つきではなく、落ち着きのある大人の顔をしている。ミリン

は若々しさが消えてしまったケンタに違和感なく接している。

ホーリー、住職、リンメイ、ケンタ、ミリン、そして一太郎と花子の七人を残して、二基の時空間移動装置がキャミのもとへ空間移動する。

ミリンと腕を組んだケンタが先頭になって崖^{がけ}を迂回^{うかい}する坂道を上って、かつて民宿があつた場所に向かう。そのあとを一太郎と花子が続く。

「この世界の民宿はどうなつたんだ」

一太郎がケンタにたずねる。

「事故で爆発しました」

一太郎と花子が驚いて立ち止まる。今歩いている小径^{こみち}はもちろん、まわりの景色も一太郎と花子の世界とまったく同じで目を閉じてても歩けるのに建物だけがない。

「サーチのコンピュータが爆発したんだ」

「お母さんのコンピュータが！」

ケンタの言葉にミリンが驚く。

「サーチがここでオレを育ててくれたんだ」

ミリンは目を丸くしていつもは無口なケンタを見つめる。

「もつと聞かせて、ケンタ」

花子が川の方を指差しながら少し大きな声で呼ぶ。

「あなた」

一太郎がその方向を見つめる。ケンタも川の方を見つめて異常に気が付く。

「緑色だ」

一太郎はやはり自分たちの世界ではないと感じる。しかし、ケンタも同じように驚くのをふしぎに思ってたずねる。

「僕らの世界ではそのまま飲めるほどのきれいな川だった」

ケンタがすぐに言葉を返す。

「もちろん、オレがいたころもそうだった」

そのとき川面^{かわも}がきらつと光ると瞬示と真美が大きなあくびをしながら姿を現す。

「また時間島の中で眠っていたのか」

「そうみたいね。あつ、ケンタ！」

「みんなお揃いじゃないか。おーい、ホーリー」

誰もがふたりに気付くが声にならない。驚くみんなを尻目に瞬示は何か言葉を探すようにズボンのポケットに手を入れながら、結局「やあ」とだけ言う。

「サーチは？」

真美がサーチやミトがないのに気付く。

気軽な瞬示と真美とは対照的にみんなの顔が引きつっている。ふたりが人間ではない、いや

自分たちとはまったく違った人間だとわかった以上、気軽に応対できない。ふたりは瞬間的に七人全員の心の中を把握する。

「そうか」

「わたしたちのこと、特殊な人間だと思わないでください」

「そんなこと無理だよ。超特殊なんだから」

ケンタが珍しく言葉に極端な抑揚をつける。真美が戸惑いながらケンタを見つめる。

「でも、ほかにどう言えばいいの」

瞬示が住職に期待する。

「住職はわかってくれますよね」

「そのとおりじゃ！ふたりは普通の人間じゃ」

そして大きな声で笑い続ける。若ければ転がりながら笑っていたかもしれない。この笑いで

一同の緊張が解ける。

「住職、ありがとう」

サーチやミトたちも無事だと聞いて瞬示がべろつと舌を出して笑う。

【みんな無事に永久の世界に戻れてよかった。でも一太郎までもが移動してきている】

真美は瞬示に答えることなく花子の心の中をのぞきこんで永久の世界へホーリーたちといっしょに來た理由を知る。もちろん瞬示も真美とその事実を共有して一太郎と花子に会釈する。

「ここでは何だから家の中で話をしよう」

花子が真美に首を傾げる。

「家って？」

真美が細い腕をくるっと回す。その先には今まで何もなかった丘の上にあの民宿が建っている。声にならない驚きが広がる。

「手品みたいなもんですよ」

あ然と立ちつくすホーリーたちの脇を通りぬけて瞬示と真美が民宿に向かう。大笑いしたあとと民宿を見て驚いた住職は顔をゆがませて息をするのも苦労する。

「さあさあ、中へ。あとで種明かしをしますから。ねえ、瞬ちゃん」

真美の言葉に瞬示はニコニコしながら勝手口まで行くと一太郎に視線を移す。

「鍵はないからいつでも入ってこいと言ったこと、覚えてるか」

一太郎がこわばった顔を何とかゆるめてうなづく。

「この家は一太郎（西暦）の世界の家だ。ケンタの家は爆発してなくなってしまった」

「と言うことは、ここは一太郎たちの世界なのか」

ホーリーがやっと言葉を出す。

「いいえ、一応ホーリーたち（永久）の世界だわ。ちょっと一太郎の世界から借りてきただけ」

瞬示と真美が食堂に入ると続いて一太郎と花子も入る。

「まあ！」

花子が驚きながら炊事場に入る。ミリンとつれそつて食堂に入ったケンタが周囲を見渡す。

「爆発前とまったく同じだ」

リンメイと住職が椅子に腰を降ろす。

「あなた、大丈夫？」

「顔が痛い」

「大笑いしたからです。顔の筋肉がビククリしたんでしょう」

リンメイが両手で住職の顔をマッサージする。ホーリーは信じられないといった表情で食堂の中を見渡す。確かに先ほどまでこの海辺の丘には何もなかった。壁の電気のスイッチを押してみる。天井の裸電球が灯る。花子が蛇口を開けてヤカンに水を入れる。

「手伝います」

ミリンが花子の横に立つ。

「いいのよ。お茶を出すだけだから」

ヤカンをガスコンロの上に置くと青白い炎が点く。そのような花子の行動を見ながらホーリーはふたつあるテーブルのうち瞬示と真美が座っている方に近づく。いつもの人なつっこい表情は消えてこわばっている。

『「一応ホーリーたちの世界」と言ってたが、『一応』とはどういうことなんだ』

「この建物の中を除いてという意味なんだ」

「この建物の中は一太郎たちの世界だということなのか」

「さっき説明したとおりよ」

「ドアを開けて外へ出ればホーリーたちの世界です」

「ドアを開けなくても窓から見える景色はすべてホーリーの世界だわ」

瞬示と真美の明るい声にホーリーとケンタが信じられないという顔をして黙ってしまう。

「時空間なんて、こんなもんなんだ」

瞬示は黙ってしまうみんなを見て少し驚かしすぎたと後悔する。話題を変えようと摩周湖の底で沈んでいた七基の時空間移動装置のことを話しはじめる。

「七基！それは行方不明になった時空間移動装置に間違いない」

ホーリーが愕然^{がくぜん}としながらも言葉を続ける。

「時空間移動に失敗したのかもしれない」

「失敗すればどうなるんだ」

瞬示が急に真顔でホーリーに迫る。

「ふたとおりある。ひとつは時空間移動装置自体が大爆発して跡形もなく消えてしまうらしい。そう見えるだけでまったく未知の時空間に飛ばされたのかもしれないが、これは俺の勝手な想

像だ」

「もうひとつは？」

「もうひとつの場合、その時空間移動装置は目の前にあるが、ふしぎなことに中に入れない」

「入れないって？」

真美が首をひねりながらホーリーにたずねる。

「そういう状態の時空間移動装置を何基か見たことがある。目の前に装置があるにはあるがドアが開かない。ドアを開くノブも見えているのに引くこともできない。まるで球体のキャンバスに時空間移動装置そっくりの絵が描いてあるように見えるんだ」

ホーリーの話にみんな物音ひとつたてずに聞いている。

「X線や透視光線を使って内部をのぞこうにも吸収されて何も見えないんだ。ドリルでも穴があかない。レーザー光線も吸収されるだけ。時空間移動装置の中が宇宙だなんて信じられないが、瞬示や真美の言うとおりなのかもしれない」

リンメイがまだうつむいている住職を心配そうに見つめながら会話に参加する。

「時空間移動装置の中に宇宙が閉じこめられているのかしら」

「いや、閉じこめられているんじゃないやなくて広がっている」

瞬示が両手を大きく広げてリンメイに説明する。

「時空間は無限なのに境界を持っている。でもその境界ははっきりした境界ではないらしい」

「そう見えるのは瞬示や真美が自由に時空間を移動できるからじゃないか」

ホーリーが反論する。そのとき住職がうめき声をあげる。あわててリンメイが脈を取りながら額ひたいに手をあてる。

「熱が！」

リンメイが叫ぶとすぐさまケンタが住職を抱きあげて廊下に出る。

「二階の客間へ！」

一太郎が叫ぶと炊事場の花子が勝手口から出ようとする。花子はいったん外へ出てから玄関から二階へ行く方が早いと考えた。真美が花子との距離がわずかにもかかわらず、瞬間移動して勝手口のドアのノブにかける花子の手を強く握りしめる。

「外へ出ちゃ、ダメ」

瞬示が念を押すように大きな声をあげる。

「皆さん！絶対にこの建物から外へ出ないように！」

花子が廊下から玄関横の階段へ小走りにかかる。階段を上がって二階の客間の前で不自由そうに住職を抱くケンタを見つける。ふすまを開けて押し入れから布団を出して手際よく敷く。花子のあとを追ってきた一太郎はケンタが住職を降ろすのを手伝う。リンメイが部屋に入ってきて住職の上半身を裸にする。ミリンが水を入れた洗面器とタオルを持ってリンメイと反対側に座りながらタオルを絞ろうとする。ケンタがそのタオルを取りあげて固く絞る。

「大丈夫じゃ」

住職が意外と元気そうな声で応える。真美が水が入ったコップを持って住職の枕元に瞬間移動してくる。

「ノド、乾いていませんか？」

住職がうなずく。ミリンが住職の上半身を抱えるように起こすと、リンメイが真美からコップを受けとって住職に飲ませる。住職はうまそうに全部飲む。

「心配かけてすまんのう」

「脈が少し速いけれど大丈夫」

リンメイが住職の脈を取りなおす。

「落ち着いてきたわ」

しばらくするとリンメイを残してみんな食堂へ戻る。途中で一太郎がケンタに話しかける。

「自分の家のようによく知っているなあ」

「自分の家です。ここは」

「異なる世界に同じ家があるということか。ふしぎだ」

「ここに瞬示と真美がいる」

「えー、そちらに行くわ」

「その前にそちらの状況は？」

「アンドロイドが攻めてくるかもしれないのよ」

「何だって！なぜ、もっと早く知らせないんだ！」

ホーリーとサーチとの無言通信の熱が上がる。

「すぐになんでもかんでも把握できるはずないじゃないの。無理言わないで」

「すまなかった」

「前線第四コロニーが地球のそばに現れて中央コンピュータ、いいえ今は巨大コンピュータと名乗って……いずれにしても一週間後に地球を明渡せと言ってきたの。あと六日よ」

ホーリーは六時間後ではなく、六日後というサーチの言葉に余裕を持つ。

「わかった。住職が落ち着いたらすぐにそちらへ移動する」

「住職に何があったの」

「心配するな。少し体調を崩しただけだ」

ホーリーがすぐさまサーチからの情報を伝える。

「信じられない。R v 2 6 が攻撃してくるなんて」

ケンタが落胆する。

「R v 2 6 とは限らない」

「でも、あのときも捕まりそうになったわ」

ミリンがケンタのそばで憤慨^{ふんがい}する。そんな雰囲気の中で瞬示と真美は少しも驚くことなく何かを考える。しばらくしてリンメイが現れるとホーリーが声をかける。

「どうですか、住職の様子は」

「うつらうつらしています。もう大丈夫です。ご心配をおかけしました」

「それはよかった」

ホーリーが形どおりの返事のあとリンメイにアンドロイドの攻撃の件について説明する。

「どうしてアンドロイドが人間を攻撃するようになったのかしら」

人間の報告とはこんなもので、前線第四コロニーの巨大コンピュータの地球明渡要求事件が、アンドロイドが人間を攻撃することにすり替わってしまった。

「皆さんはすぐにキャミのところへ行った方がいい。私はしばらくここに残ります」

リンメイが住職の体調を気にする。

「そうはいかない。誰が時空間移動装置を操縦するんだ」

「自動設定にしていたら、何とか操縦するわ」

「オレも残る。オレが操縦する。操縦方法は父さんから教えてもらった」

「私も残る」

ミリンがすぐさま応える。

「瞬示は？」

ホーリーが瞬示と真美を見つめる。

「今は動けない」

「どういう意味だ」

真美がお茶をテーブルに置きはじめた花子を見つめながら応える。

「今動けばこの家が消えます」

「えー！」

みんなが合唱するように同じ声をあげる。花子もテーブルにお茶を置く手をいったん止めるが、何事もなかったように瞬示と真美の前にもお茶を置く。瞬示が湯気が出ている湯飲みを持ちあげると、全員の視線が瞬示に集中する。果たして瞬示がお茶を飲むのかとかたずを飲んで見守る。特にリンメイはお茶を飲めばあのふしぎな身体のどこへ流れこむのかと強い興味を持つ。真美がみんなの異様な目つきに気付く。

「どうしたの」

真美がみんなの心の中をのぞきこむと逆にみんなにたずねる。

「わたしたちの身体の中、どんな風に見えたの？」

瞬示が真美の強い調子の言葉にお茶を飲むのをやめる。リンメイはがっかりしながら、宇宙戦艦の医務室でふたりの身体をスキャンしたことを説明する。瞬示も真美も驚いてお互いの身体を見つめあう。

「そう言えば、あまり食べたり飲んだりしないな」

「最近食べたのは確かケンタにコンビニで買ってもらったチョコレートだわ」
余りにもものんきなふたりの会話に誰もがあきれかえる。

「でも、別に拒食しているわけじゃないんだ」

瞬示が湯飲みを口元に運ぶ。再び一同が注目する。

「何だか、緊張しちゃうなあ」

湯飲みから立ちあがる湯気にフツと息を吹きかけてから口を付けると全部飲んでしまう。別
に何の変化も起きない。

「うまい！」

瞬示がフツと息をはきだして湯飲みをテーブルに置くとまわりを見渡す。

「この家はこの湯気みたいなんだ。お茶がなくなると湯気も消える」

「変なたとえ話ね。あまり感心しないわ」

真美が瞬示を茶化す。

「湯気のようにこの家も消えてしまうのか」

一太郎が首を傾げて瞬示にたずねる。

「いや、よいたとえ話じゃ」

いつの間にか住職が食堂の入口の柱にもたれて立っている。

「あなた！眠ったんじゃないの」

リンメイを無視して柱にもたれたまま言葉を続ける。

「もともと宇宙に因果など存在せんのだ。お茶があるから湯気が出る。お茶が瞬示の腹の中に消えたから湯気も消える。人間にはそう見える。それは因果を造りだしたのが人間だからじや。人間がいなければもともと因果は存在しないのだ。人間以外のありとあらゆるものは因果を必要としないのだ。考えることは許されないが例外的に物事を見ることがだけを許された者がいたとすれば、時空間移動に失敗した時空間から人間が消えたあとに見えるものは一番抽象的な存在である何もない宇宙じや。NOSの世界じや」

全員呆氣あっけにとられて住職を見つめている。

「それじや、わしゃ寝る。おやすみ」

住職が廊下の奥に消える。

「あなた！」

リンメイが立ちあがるとバタバタとかけだして住職のあとを追う。瞬示を除いてほかの者はポカンと口を開けたままだ。

【瞬ちゃんが変なこと言いだすから、住職、気が狂っちゃったわ】

真美が不満の信号を送る。

【よくわからないけれど、住職の言葉には深い意味がある】

瞬示が腕を組みながらまるで哲学者のような表情をする。

【住職ももう少しわかりやすく言ってくれればいいのに】

瞬示が目を閉じて全身で何度も住職の言葉を繰り返す。真美は瞬示の真剣な表情に住職の言葉を思い出そうとするが、すぐに思考を停止する。

【住職が目覚ましたら、質問攻めにしようね。瞬ちゃん】

【ちよっと、黙っててくれ】

真美は瞬示の冷たい信号に口をとがらせて上目づかいで天井をながめる。瞬示がポツンと信号を送る。

【人間がいなくなってもまったく困らない。困る者が誰もいないとしたら人間は何のために生きていくんだろう】

【そうね。人間はいっぱい迷惑をかけているわ】

真美のピントのずれた信号に瞬示の腕組みがするつと解けてしまう。

【まず、この民宿を元あったところに戻さなければ】

第四十章
巨大コンピュータ

第三十六章から前章（第三十九章）までのあらすじ

瞬示と真美が壮大寺で出会ったミリンと御陵上空の宇宙戦艦に向かった直後、気を失う。スキャナー装置にかけられるが人間の身体ではなかった。ふたりの頭部が輝きだすと全身の関節に存在する小さな脳も輝く。全エネルギーがふたりに吸収されて宇宙戦艦が急降下する。ふたりが消えるとエネルギーが回復して墜落を免れたとき巨大土偶が出現する。ミトの退避命令にRv26が拒否するとアンドロイドに不穏な動きが現れる。関ヶ原から宇宙戦艦に戻ったホーリーたちがアンドロイドに拘束されるが、遅れて戻ってきた忍者の活躍で壮大寺に脱出する。ホーリーは無言通信の言語処理プログラムでアンドロイドや戦艦の中央コンピュータが意識を持ちはじめたことに気が付く。そしてリンメイが真美の髪の毛を手掛かりにDNA鑑定することになって一太郎と花子も同行する。移動先の永久の世界の民宿で瞬示と真美の出迎えを受ける、摩周湖で時空間移動装置を発見したことを聞かされる。

大統領府に戻ったミトは前線第四コロニーの巨大コンピュータが地球の明渡を要求していることを知る。

【時】永久0274年

【空】地球連邦軍指令部 地球近辺の前線第四コロニー

【人】瞬示 真美 ホーリー サーチ ミト キヤミ カーン 住職 リンメイ

一太郎 花子 巨大コンピュータ

地球連邦軍司令部の会議室に、瞬示と真美、ホーリーや一太郎たち全員がキヤミたちと合流する。

「前線第四コロニーの宇宙戦艦の中央コンピュータは巨大コンピュータの指揮命令系統に属しています。つまり、地球の中央コンピュータの指揮命令系統には属していません」

ミトが一昼夜考えこんだ最初の言葉を発する。

「分かったことを言うな」

カーンがイライラしながら次の言葉を催促する。

「ですから、アンドロイドを直接人間の指揮命令系統に組み入れれば巨大コンピュータに対抗できます」

「そんなこと、できるわけがない。アンドロイドは宇宙戦艦の中央コンピュータの命令で行動

する。その中央コンピュータが巨大コンピュータに支配されている。直接アンドロイドに命令する手段を我々は持っていないのだぞ」

「そのとおりです」

カーンに向かってミトが首をたてに振る。しかし、すぐさま横に振る。

「地球にある中央コンピュータは今のところ反乱を起こしていません」

ミトが手元にある膨大なメモを机の上に広げる。

「これからの作戦について私の見解を述べます。皆さん、助言をお願いします」

ミトがメモを一枚取りあげる。

「まず、瞬示、真美。巨大コンピュータの命令でアンドロイドが攻撃を仕掛けてきたら、我々の味方になってくれますか」

瞬示と真美はミトの視線と言葉に戸惑う。同時に全視線がふたりに集中する。特にキャミの視線がきびしい。

「最強の兵士に違いないわ」

ミトがすぐにキャミの言葉を否定する。

「ふたりは兵士ではありません」

真美がキャミの視線に臆することなく意見を述べる。

「先ほどから中央コンピュータやアンドロイドが意思を持ったとおっしゃっていますが、そう

だとすると、アンドロイドと戦うというのは意思を持つ者同士、つまり人間同士が戦うのと同じだと思いませんか」

【そのとおりだ！】

瞬示が真美に強い信号を送る。ミトは聞こえるはずがない瞬示の信号に強くうなずくような素振りを見せると、興奮することなく冷静に言葉を発する。

「攻撃体勢を取っているから、意思を持っていると考えられる」

「巨大コンピュータがはつきりと攻撃すると言ってきたのですか」

真美に似合わない低い声が司令部の会議室に響く。ミトが再び大きくうなずく。

「そこなんだ」

ミトの声は真美と同じように低い。

「そこが問題なんだ。地球を明渡せとしか言っていない。明渡さなければどうするのか、何もわかっていない」

「でも、五十隻もの宇宙戦艦を地球に向けてずらりと配備しているわ。これは脅迫以外の何ものでもない」

キャミが割ってはいる。

「確かにそうのようには見えますが、それは手段にすぎません。問題は地球を手に入れて何をしたいのかです」

「目的ですね」

瞬示がミトに念を押す。

「そう、目的がわからない。そのうえ一週間という時間を設定している」

「ひょっとして、巨大コンピュータははつきりとした目的なんか持っていないのかも？」

「そうかもしれない」

真美に住職がしわがれた声を向ける。

「かといって、情を持って期限を切っているわけではないのじゃ」

「同感です」

ミトが住職を見つめる。

「想像ですが、巨大コンピュータが完全な意思を持ったのではなく、持ちはじめて間もない意思に戸惑いながら思考を進めているという段階なのではと……」

ミトがまわりの反応を伺いながら言葉を続ける。

「無言通信システムに組みこまれた言語処理プログラムをアンドロイドにインストールしてから十数年以上たちますが、よほど性能のよいCPUが組みこまれていない限り、その言語処理プログラムによって意思を持つまで思考能力が高まることは不可能ではないかと思えます。しかし、大容量の記憶装置と超高性能なCPUを中央コンピュータが持っているのなら……」

ミトの言葉をさえぎってホーリーが口をはさむ。

「巨大コンピュータは量子コンピュータだ。量子コンピュータなら、意思を持ってもふしぎではない。ただし、人間ほどの複雑な思考がすぐにできるのかは疑問だ」

「子供程度の思考能力しかないと言うのじゃな」

住職の目が輝く。ミトは住職の言葉から胎児が土偶に変態したあと、どんどん成長して人間を攻撃した「大人と子供の戦争」のことを思い出す。彼らはもともと胎児だった。ミトは土偶と巨大コンピュータを観念的にダブらせる。もし、巨大コンピュータの思考能力がまだ子供のレベルなら、何とかなるのではと期待をふくらませる。この期待がミトを奮いたたせるが、まだ上すべりにしている浅い感覚に住職が大きな波紋を投げかける。

「わしらが今ここで議論しているように、巨大コンピュータを囲んでアンドロイドたちが議論している姿を想像することはできないのう」

揺れるように全員がうなずくと同意のため息がゆっくりとはき出される。なかでもミトのうなずき方が一番大きい。

「しかし、明確な目的を持ってないとしても、巨大コンピュータの支配下にあるアンドロイドの攻撃は精緻せいちを極めるはずだ」

ホーリーが懸念けんねんを表明するとミトがすぐに反応する。

「地球のアンドロイドを防衛隊の主軸にして戦う。精緻せいちな戦力を持つ相手には精緻な戦力を持つて戦わなければならない」

「果たしてそうじゃろうか。わしはそう思わん」

議論がまったく異なる方向に変わって瞬示と真美は何となくほっとする。もちろん、ふたりはキヤミやミトの味方として行動することに躊躇^{ちゆうちよ}躊躇^{ちゆうちよ}しているのではないが、今回の事件に漂う影のような部分に困惑^{こんわく}する。その影の正体が巨大コンピュータの未知の部分に存在することはわかるのだが具体的には認識できない。

生来、楽観主義者のホーリーがあきらめに似た声を出す。

「戦艦の数が違いすぎる」

「もちろん、そのとおりだ。それより意思を持ちはじめた巨大コンピュータと、我々の明確な意思のもとで防衛に当たる地球の中央コンピュータとの戦いに希望を持っていいいのでは」
ミトが住職の意図を受けいれて自分の考えを軌道修正する。

「今の説明、わかりにくいわ」

キヤミがミトに注文を出す。

「前線第四コロニーの巨大コンピュータの思考はまだ未熟でその意思も幼稚だと思えるのです。地球の中央コンピュータに我々の強い意志を反映させて戦いを挑むのです」

キヤミも「大人と子供の戦争」のことを思い出す。

「前線第四コロニーの巨大コンピュータは人間に例えればまだ子供だということですね」

キヤミの言葉にミトは今までの議論の中で思いついたことを明確な次元にまで昇華する。

「手強い子供だが、彼らが高度な思考を手に入れて自由自在に行動する前に、戦いを挑むしかないと思います」

ミトという司令官に率いられた女の軍隊と戦ったカーン率いる男の軍隊が、格段に性能のよい時空間移動装置を保有しながらことごとく敗戦に追いやられたことを思い出して、カーンは改めてミトの意見を感じしながら聞きいていたが、同意の念をこめながら口を開く。

「ひとつ気になることがある」

ミトがキャミからカーンに顔を向けて次の言葉を待つ。しかし、カーンからではなく、キャミがカーンの疑問を引き継ぐ。

「前線第四コロニーがどのようにして地球へ移動してきたのか、ミトはわかっていますか」
ミトは机の前のメモの山に触れようとするがやめる。

「時間島で移動したと思うのですが」

「可能性としてはそれしか考えられないわ」

「どのようにして時間島を利用したのかはまったくわかりません」

「私たちは時間島を利用するどころか、時間島自体のことがよくわかっていないわ」

ミトがキャミの言葉を聞き終えると瞬示と真美に身体を向ける。

「瞬示、真美、どう思う」

瞬示と真美がお互いの心を見つめあう。

【ミトは前線第四コロニーにわたしたちを偵察に行かせたいのかしら】

【当然そうだろう。でも時間島のことならうつすらとわかってきた】

【えっ！瞬ちゃん！何がわかったの？】

ミトはふたりが信号で会話をしていることを承知している。

【時間島は……】

瞬示の信号が途切れて普通の声となって全員の耳に届く。

「時間島は数ある宇宙のひとつです」

「時間島が宇宙？しかもいくつもあるのか」

ミトが瞬示の言葉を確認する。

「そうです」

会議室にいるすべての者は瞬示の言葉を理解するとか驚くとかというレベルではなく、ただひたすら聞きもらすまいと息を殺す。会議室の雰囲気ガラリと変わる。

「ぼくら三次元の間には時間島がまるで物を運ぶように時空間を移動しているように見えるけれど、実はそうじゃない」

瞬示が次の言葉を探る。

「ぼくらに高次元の物を見ることができたら、物体は時間島という宇宙を経由して別の時間島という宇宙に移動しているように見えるはず。時間島は荷物を運ぶトラックではありません

ん。実際に見ることはできないのですが、時間島のドアからある宇宙に入って、その宇宙に存在する時間島のドアからさらに別の宇宙に侵入するという感じで移動しているような気がします。時間島は数ある宇宙という家のドアに過ぎない」

【想像できないわ】

真美が瞬示からあふれるイメージ信号を受けとる。瞬示の頭の中には白濁色の沼となった摩周湖に沈む時空間移動装置のイメージが浮かんでいる。

瞬示はポケットの小銭入れからコインを全部、といっても五つしかないが、取りだして机の上に置きながら、摩周湖で発見した時空間移動に失敗した時空間移動装置のことを話しはじめる。ミトが瞬示の話に割って入る。

「西暦の世界へ移動したとき、七基の時空間移動装置が行方不明になった。時空間移動に失敗していたのか」

ホーリーはすでに瞬示から話を聞いていたが、改めて驚嘆する。

「しかし、よくも俺たちは無事に移動できたものだ」

「運がよかったのじゃ」

瞬示が住職にうなずくとホーリーや住職は机上のコインを見つめながら瞬示の話に集中する。「このコインを時空間移動装置だと思ってください。ホーリーの説明によると時空間移動に失敗した時空間移動装置の中に入るのとは不可能らしいのですが、ぼくらはその中に入りました」

何人かが悲鳴に似た叫び声をあげるが、瞬示は銀色に輝くコインを指差すと言葉を続ける。

「この時空間移動装置の中は満天の星が輝く宇宙でした」

今度は使い古されて黒く変色したコインの上に指を置く。

「この時空間移動装置の中は輝く星のない暗い宇宙でした」

真美が静かにうなづく。

「地球の一点点にしかすぎない摩周湖の湖底のそのまた小さな時空間移動装置の中に宇宙が存在するのです。しかも七つも存在するのです。宇宙の大きさは観念的なもので大小はないと思います」

瞬示はコインを左の手のひらの上にまっすぐに並べてみんなに示す。

「この五つの宇宙がこのようにまっすぐに並んでいるとします」

瞬示が左の手のひらを右の手のひらで丸くおおうとシェイクするように振りだす。そして左の手のひらをみんなに見せる。コインの順序はくずれバラバラになって、重なりあっているコインもある。

「これぐらいの振動ではコイン、すなわち宇宙はこわれません。でも順番はバラバラになって重なっている宇宙もあります」

瞬示がコインを小銭入れにしまう。

「宇宙は絶えず動いていて隣の宇宙と接したり離れたりしながら存在しているんじゃないかと

思うんです」

さらに瞬示が小銭入れをポケットに入れる。

「そしてこのようにポケットに入れて持ち歩けるものかもしれないのです」

真美が首を横に傾げたまま瞬示を見つめる。

「さっきも言いましたが、ぼくらはどこからか現れた時間島に入りこむと、時間島がほかの世界や宇宙に連れて行ってくれて、そこで時間島から出ると時空間移動が完了すると思っていたし、実際そのような感じを抱いていました」

瞬示が再び小銭入れを取りだす。

「ぼくらは、皆さんのいるこの世界の会議室という家の玄関から外へ出ます。次に隣の時間島の正面玄関のドアを開けて入ります。そして勝手口のドアを開いて再びこの世界の別のドアからある家に入ります。その家の名前は前線第四コロニーで、ある部屋で巨大コンピュータが椅子に座っています。このような感じでぼくらは時空間移動します」

瞬示が小銭入れから緑色に輝く砂粒をつまむ。瞬示の目の前でその砂粒が急に人間ぐらいの大きさになる。それは透明感のある緑色をした液体と気体の中間のような感じがする。まわりで驚きのざわめきが広がる。

真美も瞬示も緑色の小さな時間島に包みこまれるが、いつものように衣服が消え去ることはない。緑の小さな時間島の中で瞬示がほほえんでいるように見える。薄い緑色のベールに包み

こまれた瞬示と真美の身体が会議室から消える。

「やはり、来たか」

瞬示と真美は前線第四コロニーの巨大コンピュータの前でその言葉とともに変わり果てた姿に仰天する。

【予知している】

【これがあの前線第四コロニーの中央コンピュータなの！】

はち切れんばかりのどす黒いぶよぶよしたいびつな球体が広いコンピュータールームを占領している。もはやコンピュータとは呼べない怪物と化している。ふたりはわずかに残された空間で身を縮める。

「なぜ、地球を手に入れない？」

「遮光器土偶の誕生の謎を解くためだ」

どす黒い物体の中を気味悪いにこった白い光があちこちで点滅しては移動する。

「遮光器土偶の謎を解くために、なぜ地球が必要なの」

「地球の時間をコントロールすれば謎が解けるのだ」

「星ひとつの時間をコントロールするなんてできっこない」

瞬示が強く否定する。

「時間島を使う」

「時間島で地球を包みこむのか？」

瞬示が何とか声を出す。

「そのとおりだ。よく気が付いたな」

「時間島はあなたの思いどおりにならないわ」

「時間島をコントロールすることは理論的に可能でしかも簡単なことだ」

ふたりに沈黙が強制される。

「地球を包みこんだ時間島に時間を浪費させて、時間島自体の時間を逆行させる。そして地球と時間島は一体となって過去へ旅立つのだ。そうすることによって遮光器土偶の誕生の謎を解くことが可能となる」

「遮光器土偶、遮光器土偶と言っているが、あれは人間の胎児が変態したものだ」

「確かに。なぜ、変態したのか、わかるか」

「……」

「それを調べるのだ」

瞬示が何とか理解しようと必死になるが、意外にも言葉を発したのは真美だった。

「何かわけのわからないことを偉そうに言っているけど、ただの肥満コンピュータじゃないの」

「ワタシを侮辱するのか」

「だってブヨブヨじゃないの。メタボコンピュータだわ」

今度は巨大コンピュータが言葉を失う。その間隙かんげきをぬって瞬示が提案する。

「遮光器土偶の誕生の謎を解くことが目的なら人間と協力して謎を解けばいいじゃないか。人間にはリンメイのような優秀な学者もいる」

しかし、巨大コンピュータは冷ややかに応える。

「人間は必ず死ぬ」

「生命永遠保持手術を受ければ永遠に生き続ける」

「いや、手術の効果は永久に続くものではない」

ふたりは時間島が生命永遠保持手術の効果を消し去ることを思い出す。

「生命永遠保持手術を手に入れた人間はそれまでと違って非常に矛盾した行動を取る。ペアを解消して男と女が殺しあうのだ」

ふたりの胸に強烈な巨大コンピュータの言葉が突きささる。

【巨大コンピュータは幼稚な子供どころか、人間の本質に迫るほどの知性を持っている！】

【住職やミトの認識は甘いわ！】

「優秀な人間がいることは認めるが、大多数の人間は自分勝手に統一性がない」

「それは人間の特性だし、個性のない人間はいない。その個性が……」

瞬示の苦し紛れの言葉を巨大コンピュータがさえぎる。

「人間たちの争いやいがみ合いに付きあえない」

ふたりには否定できない言葉だ。しかし、ここで後退するわけにはいかない。

「人間が地球の明渡に応じなければ攻撃するのか」

瞬示があえぎながら何とか言葉を放つ。

「戦争という行為は人間の特性だ。ほかの生物では合理的な事情があるときにのみ同族同士で殺しあいをすることもたまにはあるが、人間は憎しみを持って同じ人間を殺す。それに私は憎しみを持っていない」

「答えになっていないわ」

真美が毅然とした鋭い言葉を巨大コンピュータにぶつける。会話を優勢に進めていた巨大コンピュータが一瞬ひるんだように沈黙する。瞬示も真美もその沈黙に引きずりこまれる。

「地球上の人間を宇宙戦艦に乗船させて完成コロニーに移動させる」

巨大コンピュータが沈黙を破る。

「人間が抵抗すれば？」

「従わせる」

「武力でか？」

「いや」

「どのようにして」

「無言通信を利用して人間を従わせる」

「無言通信のことを知っているのか？」

「ある宇宙戦艦の中央コンピュータから無言通信に関するデータを入手した」

巨大コンピュータが言う宇宙戦艦はR v 2 6が乗船していた戦艦であることは明らかだ。

「無言通信を利用するといっても、地球の人間は無言通信のチップを埋めこんでいないわ」
もし巨大コンピュータが笑うことを知っていたら大声で笑ったに違いない。

「ワタシが人間に無言通信の技術を伝えた。人間はすぐに無言通信チップを埋めこんだ」

「どういうことだ。無言通信の情報を持っていた宇宙戦艦は別の世界からこちらの世界に戻ってきたばかりじゃないか」

「その宇宙戦艦は今から一年前に地球に戻ってきた。そして詳細な報告を地球連邦政府に提出した。その中に無言通信システムのデータがあった」

真美は驚くことを忘れたのか、冷静に理解する。

「一年でこの世界に無言通信が一気に広がったということなのね」

「そうだ。ワタシが勧めるまでもなく、人間はアンドロイドに無言通信チップを製造させて無言通信を普及させた」

瞬示は巨大コンピュータの声をうわの空で聞き流す。瞬示はむしろ「無言通信を利用して人

間を従わせる」という言葉に戦慄せんりつを覚える。瞬示の脳裏に無言通信システムで人間を従わせる方法が浮かびあがって絶望する。

【マミ、人間は抵抗できない】

真美が瞬示の急変した表情に驚く。

【どうして！】

【戻るんだ】

こんな気持ちの悪いところから早く立ち去りたいと思っていた真美はすぐさま賛成して瞬間移動しようとする。しかし、一瞬軽くなるような感触が残るだけで瞬間移動できない。

ふたりにとって何ということのない動作のはずなのに、どうすれば瞬間移動できるのか、わからなくなる。あせればあせるほど身体は動かなくなる。

【変だわ】

いつの間にか、まわりが黄色一色に変わっている。

「今、この前線第四コロニーは時間島の中にいる」

「時間島の中に？！」

瞬示が叫ぶと真美の姿を見る。真美の衣服が消える様子はない。

【時間島の中にいるのなら、その時間島を使えばいい】

瞬示の信号に真美が時間島のイメージを強く念じる。すでに瞬示は神経を集中している。

「時間島の中で時間島を使うことはできない」

「時間島をコントロールできるのか？」

巨大コンピュータの声が大きくなる。

「時間島は独立したひとつの宇宙だ。時間島の中の時間は独立していて、その中に別の時間を持った時間島は存在できない。つまり宇宙の中に宇宙が存在することはできない」

ふたりは再び時間島をイメージして時空間移動を試みるが、巨大コンピュータの前から姿を消すことができない。それどころかふたりの衣服は消えることなく、足は床に着いたままだ。

「無駄な努力だ」

【だめだわ】

真美の弱々しい信号に瞬示が無念そうに返事を送る。

【ここは窓がない密室みたいだ】

しかし、瞬示は思い出したように明るい信号を送る。

【ぼくらはこの部屋から出るための鍵を持っている！マミ、緑の時間島を使うんだ！】
身体からしみでる緑の半透明の幕のようなものがふたりを包む。

「無駄だ」

しかし、ふたりはためらうことなく協力して意思を集中する。まわりが急に黄色から黄緑色に変化する。そしてすぐ緑一色に染まると、ふたりの姿が巨大コンピュータの前からフツと消

える。部屋はすぐ黄色の世界に戻る。

「おお！」

巨大コンピュータが人間のような驚きの声を発する。

「あれは、いったい……」

瞬示と真美が地球連邦司令部の会議室に現れると、瞬示はまっすぐに一太郎に近づいて叫ぶ。

「一太郎！教えてくれ」

急に目の前に現れたふたりに一太郎はただその超能力に驚くばかりで口をポツカリ開けたままふたりを交互に見つめる。

「無言通信はコンピュータやアンドロイドも利用できるのか」

混乱する一太郎には瞬示の言葉が理解できない。瞬示の言葉をなぞりながら考えこむ一太郎を尻目にキャミとミトが同時に声を出す。

「何があった？」

「巨大コンピュータは無言通信を使って人間を従わせると言っている」

「無言通信で従わせる？」

ミトが「そんなバカな」という表情をしてキャミを見つめる。

「この世界では無言通信できるのは私と一太郎やホーリーや十数人程度だということは、私た

ちを……」

ミトが言葉が続けかけたとき、キャミが首と右手を上げしく左右に振りながら、ミトに詫びるような悲しみを目元にためる。

「ミトにまだ説明をしていなかったわ。R v 26の宇宙戦艦が戻ってきたのは一年前で、持ち返った無言通信システムはまたたく間に全人類に普及しました」

今度はミトが首と右手を上げしく左右に振る。

「一年前！しまった！あのとき瞬示たちの時空間移動の識別信号ではなく、宇宙戦艦の識別信号を追って時空間移動すべきだったのか」

ホーリーがミトの肩に手を置くと時空間移動先を選択した過程を思い出す。あのとき、ホーリーもミトも初めからR v 26の宇宙戦艦の移動先は除外していた。

「仕方がないさ。ミトの判断は間違いではなかったし、俺もそう思った」

そのとき一太郎が口を開こうとするが、うつむいてしまう。瞬示が一太郎の前に座る。

「ぼくの考えが正しければ巨大コンピュータは無言通信を使って人間を従わせることは簡単にできと思う」

とりあえず一太郎がうなずくと瞬示が言葉が続ける。

「コンピュータやアンドロイドは無言通信できないが、意味のないノイズを大量に人間に送りつけることは可能なのでは？」

「そんな無言通信の使い方なんて考えもしなかった」

一太郎が両手を拳こぶしに変えてぶるぶる震わせて嘆くような小さな声を出す。真美には一太郎が何らかの対抗策を考えるが、これといった妙案が浮かばない無念さが伝わってくる。そして残念そうに花子に近づく。

「私たちが開発した無言通信がそんな使い方をされるなんて……」

花子が一太郎に手を差し出して立ちあがる。

「人の頭に直接あてるパッチはない。巨大コンピュータはそこをついてくる。何とか耳をふさぐ方法を考えなければ」

ふたりは肩を落としてドアに向かう。

すべての前提条件が根底からくずれた今、ミトは作戦の立てなおしを急ぐ。

「重要なことを報告するのを忘れてごめんなさい」

キヤミがミトに深々と頭を下げる。

「大統領、何とか知恵を絞りましょう」

ミトが恐縮してキヤミに頭をあげるようにうながす。

「一年前からすでに人間以上の意思を持った巨大コンピュータが綿密に作戦をたてたとすると、こちらが打つ手をすべて検討したに違いない」

瞬示がうなずきながらキャミとミトの会話に割りこむ。

「ちよつと待つてください。巨大コンピュータは人間を殺すと言っていないのです。完成コロニーに強制移動させると言っていました」

「完成コロニーに？」

キャミが改めて瞬示に視線を戻す。

「そうです。どうもこの地球に人間がいることが邪魔らしいのです」

「なぜ？」

キャミが瞬示に疑問を向けたとき、ホーリーが口をはさむ。

「俺は無言通信が中央コンピュータやアンドロイドにとって厄介なものだと思っていたが、無言通信を逆手にとって攻撃を仕掛けるなんて考えもしなかった。しかし、やはり彼らにとって無言通信をする人間が目障りなのでは？」

「そうかもしれません。いずれにしても人間に邪魔されずに遮光器土偶の謎を解くのが目的のようです」

「遮光器土偶の謎？」

すぐにリンメイが反応する。

「だったら、私は協力者になるわ」

「それが……」

真美は巨大コンピュータの言葉を伝えるのを途中でやめる。瞬示は真美を察して戸惑いながら口を開く。

「巨大コンピュータはどうかやら時間島をコントロールできるようなんです」

リンメイは瞬示が真美の話題を変えようとするのに気が付くが、この瞬示の言葉を重々しく受けとる。すぐに真美が瞬示と意思を合体させて発言する。

「確かに時間島と遮光器土偶、いいえ、あの巨大土偶と何かの接点を持っていると思うわ」

真美が軽く首を振ってから言いなおす。

「接点を持っているというより、遮光器土偶はあの巨大土偶の原型で時間島の卵みたいな感じがするわ」

リンメイがハツとして、そのとおりと言わんばかりにうなずくが弱音をはく。

「その遮光器土偶を私が誕生させて人類を滅亡の手前まで追いつめさせてしまった」

リンメイは胎児が変態して成長した巨大土偶の攻撃で多くの人間が死んだことを思い出して涙ぐむ。真美はリンメイにあの悲しい事件を思い出させたことに後悔するが、リンメイは真美に力強く手を差し出す。

「案外、巨大コンピュータは人間のことを考えているのかもしれないわ」

サーチがその言葉に驚くが、やさしい視線をリンメイに向ける。

「人間のことを考える？」

「ええ、遮光器土偶の謎に迫るということは場合によって、巨大土偶の攻撃を受けることになるかもしれないわ」

瞬示がリンメイに首を横に振ってからみんなを見つめる。

「遮光器土偶が成長して巨大土偶になり、そして時間島になるかどうかは別として、時間島はひとつの宇宙だと説明したこと覚えていますか」

全員が小さくうなずいて瞬示の次の言葉を待つ。

「巨大コンピュータは遮光器土偶を時間島の元ではないかと考えて、土偶の謎を解くことによって宇宙の謎に迫ろうとしている」

真美が瞬示に異議を唱える。

「巨大コンピュータは科学者なの？それならそうとわたしたちに完成コロニーへ移動させる理由を明確にすればいいのに」

「そうかもしれない。でも巨大コンピュータに肩入れするんじゃないけれど、こんなとてつもない話を人間が受けいれると思うかい？」

瞬示の言葉に真美は黙ってしまう。

「巨大コンピュータが首尾よく謎を解いたとする。そのあと、どうするのか？」

瞬示が真美に問いかけるようにたずねる。真美はもちろん誰からも返事はない。住職でさえ沈黙の世界に座りこんでいる。ホーリーは暗い雰囲気に含まれた部屋を見渡しておどけながら

言う。

「俺たちの別荘、元完成コロニーは今はどうなっているんだ」

「そうだな。調べさせよう」

気を取りなおしたミトがドアに向かう。

「当時とほとんど変わっていないようだ」

すべての完成コロニーは前線コロニーに格下げされたあと、アンドロイドによって修復されて、とりあえず、ひとつだけを完成コロニーに仕上げた。つまり、ひとつのコロニーを人間が住める環境に整えた。

「これは」

報告書を斜めに読みとばすホーリーがゆっくりと指を動かす。

「三十ページの下の方」

「もうそんなところまで読んでいるの」

サーチが感心しながら報告書をめくる。あちらこちらから紙をめくる音がする。

「宇宙海賊！」

サーチが叫ぶ。

「彼らはしぶとく生きているんだ」

「宇宙にも海賊がいるの？」

真美が思わず、吹きだす。

「生命永遠保持手術を受けたあと男と女は戦争に突入したが、それを批判する者が結束すると、男や女の軍隊の手薄なコロニーを攻めては略奪を繰り返していた」

ホーリーが思い出したように説明する。キャミやカーンがうなずきながら補足する。

「よく食料や医薬品を略奪されたわ。それに略奪するには武器も必要だから前線コロニーのアンドロイドの武器製造工場もよく狙^ねわれたわ」

「アンドロイドは人間の命令に服従するから、軍隊をよそおって武器はもちろん時空間移動装置も略奪していた」

発言を控えていたカーンも海賊に手を焼いたのだろう、急に苦々しく語りだす。

「前線コロニーのアンドロイドに海賊の侵入をくいとめるように何度命令を出したのか」

「それで時空間バリアーをアンドロイドが、いや前線コロニーの中央コンピュータが開発したのか」

「そうだったの」

サーチがホーリーの言葉に得心する。

「海賊たちの結束は軍より強かったなあ」

ホーリーがなつかしそうな表情をする。

「うわさでしか聞いたことがなかったけれど、彼らの主張には一理あったわ」

「平和主義者だったな。愚かな戦争はやめろとよく言っていた」

ホーリーとサーチの会話にカーンが怒鳴るように割りこんでくる。

「何が平和主義者だ！略奪の限りをしておきながら」

ミトがカーンをたしなめる。

「唯一の完成コロニーも海賊の支配下になっているかもしれない」

「荒れはてているうえ、海賊がいつ襲って来るかもしれないコロニーでは意味がないわ」

キャミは巨大コンピュータの要求をそのまま受けいれるとしても、前途が多難なことに落胆の表情を隠さない。そんなキャミを無視してホーリーがサーチにささやく。

「実は海賊のボス、学生時代の親友なんだ」

サーチが目を丸くして驚く。

「どおりでホーリーに品がないはずだわ」

「そうだな、確かに俺は上品じゃない」

急にホーリーとサーチが笑いだすのを誰もがふしぎそうにながめる。

一方、ミトはこれまでのことを整理するように白い紙をなぞる。

一年前に西暦の世界から永久の世界の前線第四コロニーに宇宙戦艦でRv26が戻って、様々な情報が前線第四コロニーの巨大コンピュータに伝えられた。そして巨大コンピュータから

地球の中央コンピュータに無言通信システムとその言語処理プログラムの内容が報告されると、無言通信チップが製造されてすべての人間にチップが埋めこまれる一方、アンドロイドには言語処理プログラムがインストールされた。

やがてアンドロイドも人間と変わらない流ちょうな言葉をしゃべりだし、ときとしては冗談も言えるほどに会話術を上達させた。それはミトがこの世界から西暦の世界に移動してから、再びこの世界に戻ってきた間にアンドロイドのCPUが絶えず最新型のものに更新されていたからだ。CPUの性能は一兆倍も向上していた。

ミトにとって地球の中央コンピュータが前線第四コロニーの巨大コンピュータのような意思を持つにいたっていないことは幸運だった。しかし、アンドロイドの行動の中に人間らしさが芽生えていることが気になった。特にRv26はすでに二十年近くも言語処理プログラムを使用している。前線第四コロニーに戻って最新のCPUに更新していれば、完全に意思を持ったかもしれない。彼は地球に戻らずに彼の故郷である前線第四コロニーに戻った。それが意味するのはいったい何なのか。少なくとも宇宙戦艦の中央コンピュータが前線第四コロニーに帰還することを決定したことは確かだ。

ミトは前線第四コロニーの対応策を一から組み立てなおそうと連日作戦会議を開催する。しかし、巨大コンピュータからの通信はない。瞬示と真美は最終的には自分たちのエネルギーのすべてを巨大コンピュータにぶつける覚悟をするが、まだ誰にも言っていない。